

しか。おやのはいとかなしうき、しかば、たゞなきにぞなかれし。その驚き、しまゝにくるしきこともなくて、おきぬにきんの人のはいとあらわらしくおそろしくおぼえて仕むねなむはしりし。ふぢつぼの御ことはさぞある。せいりやう殿にてつかうまつりしよ、せめてきかまほしかりしは。おとゞ人々にもなくせめきこえしかば、あな物ぐるほしとむづかり給ひしかど、人々の中にていでおはしてまかで世給ひしを聞きしは、いづくにほまれたるとこそおぼえしか。あなかま、かうきこゆととの給ひながら「おとゞのをぞまだき、侍らぬ」。宮「いざやその人のをぞゆくはしうきかぬ。いかできかむと思へどさらなきかせず。さていふやうは、そこの御もとにありましかばこの手はいとよくならはしたてまつりてまし。この世にはそここのみなむこのそうの手ひき給ふべき人は物し給ふ。すゞに思ひのほかなる所にありて、御ために心ざしなきさまに見えたてまつることゝて、こゑをのみぞいふや」。ふぢつぼ「あなうたてや、よにもさは御きなしならむ。なかはかゝるたよりによるひるせめ給ひて、をしへきこえたまはぬやうはありなむや」。宮「さいへどきかす。いま上おりの給ひてなむとき、せんにてなにごととも手をつくしてつかまつりきかせたてまつらむとす。かくてわらせ給ふ御心のいとかしこきかしまりには、かゝる事をだにこそはそこに無まゐりてをさけなむ」とぞいふ。ふぢつぼ「いみじきことにもあるかな。さ侍らむときは御せうそくかきのたまへ。志のびて御もとにつかまつらむ。それをさへはづさせ給ふな。ごせんにはゆくすゑもあり。かのはあくまできこしめしてむ。いぬの御とくに」。宮「あなひさ

しや」などおほくの御ものがたりなど去給ひて、「いで御ぐしはこゝのはみなおちぬ」とてひきくらべて見給へば、「ふぢつぼのは今三寸ばかりぞままさりたる物。いとひとしかりしものを、おほくもまさり給ひにける物かな」とて二の宮のを見給へば、うちきのすそも板いと三ひと板すぢかゝりは一の宮の御に好いとよく似たり。すべていとおなじやうにおはするが、これはすこしふくらかにけぢかきに板なむ。姫宮はまだちひさくおはするが、あてにそひやかなる御かたちの御ぐしたけにすこしあまりたり。かゝるほどに、大殿の御方よりひわりぞ、みき、つばい、もちひなどたてまつり給へり。左の大とのよりは、なし、かうじ、たちばな、あらまきなどあり。ところどころよりをかしまものどもふさにたてまつれ給へり。宮の御もとには、そんなわらの君、中納言の君、この御まへにはそんなわらの君御兵衛あり。そんなわらちものはがたりす。あね君御われらが宮は、なほやこの下らうのむすめをうへとはおぼしたらむ」。中の君「さらなることかな。一日それよりきたりし人にとひしかば、ある人とうぐらにさぶらひ給ひしぞ、九の君とは申すめれといひければ、とらへていみじううたせ給ひて、またにこめられければ、さらにうけていふ人なるなり。かぎりなくかしづきてぞおかれたる」。あねきみ「あなもののぐるはしや。人き、こそやさしけれ。御かたのおとゞや、かやうのとき、給ふらむと思ふこそおもてはづかしけれ、かの君さらなる事をも去給ふかな、ことぐさにも無えわらひ給ふものを、かのみこの御こにえそこたひかでかうだにあらむとの給ふ」などいふ。ふぢつぼ「なにごとぞや。この君かくてもせらるゝを御ともならずとも時々

はものし給へかし。かの君「さおもひ給へれどわたらせ給はむとありつれば、おなじくはとてなむ。ひとは御かたの御ことによりておとゞにかしこくさわがれたてまつりし。はやたてまつり給へりし御文をまもつかへのももてまうできたりしかば、はべりながらきこえぬ。君こそなどかはまぬりこぬとはきこえさせざりし。侍りながらすべて心ちなきなど例のこと物し給はぬ人の、むつからせ給ひしこそいとほしく侍りしか。さて見給ひて御文はこればかりのたからはあらじ。今行く末はかくてまもえ給はじとて人にもふれさせ給はぬ。みづしにをさめさせ給ひて、きくはしたなきめをなむ見給へりし。ふぢつば「そんわらの君の御もとにむめりし本どもをいとわづらはしく書かせ給ふめりしか。そのよろこびきこえさせしぞや。こゝにこそいと心ちなしとは、いものせしか、たまへりける人に御文をとらせずなりにけることを」などのたまふほどに日くれぬ。宰相中將の君、御はんのよおなじばんのをとこそん信なまうのほりたり。藏人のせうまやうは二の宮のわたり給ふめれば、御まへ、だいはん所にもものし給ふ。ふぢつば「いとひさしうま侍らぬわづ、こよひいかで御まへにはつねに、あそばすらむものを」。宮「さらにもせむせむ。つれづれなるにかきならせばつれなしや、まばゆしやなどわらへはみだにぞ見ぬ。いざこよひ忍びて」とてきんの御琴どもを、いづれいざさせ給ふ。かたち風をばふぢつば、やまもりは一の宮、さうのことは二の宮、琵琶はひめ宮、やまとごとはあなたのそんわらの御まへごとらうちおきて、まづきんの御ことをかきおはせつゝ、あそばすいとおもしろし。宮「あやうこの御てこそき、あたりの御

手にはいとよくにたれ。いかでかくはなりにたる。ふぢつば「あなむくつけや。いかでそれはきく、にだにきかぬものを」。宮「いかでかのわたりならでき、給ひけむ、かのよのなからむかし。こゝにはさばかりだにも、あまかせぬ」。いらへ「いとうたてあることを思ひ歸きこえけるかな。ゆめからぬのたまはする」などのたまひて、このねどもひきわはせてあそび給ふほどに、大將宮の御むかへにとてもものし給ひけるを、こゝいもの弊しければ、みそかにたちよりてかららんのおたにてき、給ふをもまゝ給はで、よろづのてをあそばすをき、給ふ。おもふやう、いかでかわれせりやう殿にてつかうまつりし手をひき給ふらむ、うちの人ならばこそまうのほりてき、給はめ、いとあやしくもあるかなとき、おどろき給ふ。御ことが、いことも一つにあひて、おもしろき手どもをあそばしはやりて、人のありなしもまろしめさず。宰相の中將の君、藏人少將宮、あこのまじうなどはみからしのうち、母屋のみすわけておはします。大將みはしよりやをらのほりて、みすのはまにこもりてあな信をもとめ給へど、いみじくうるはしくつくりたればひまもなし。あくべきものもなければ、いかにせむと思ひたち給へり。かくてよななばかりまであそび給ふ。遊びはて、ものなきこしめして御とのごもりなどするほどに、うちこわづくりして「そんわらの君はこゝにか」とのたまへば、宮たち、ふぢつばも心ちをまどはして、「あないみじや、いかにまつること、いもぞは。つねに、かく心ちなき事どもをますること」とてもものたまはず。宰相中將おどろきて、いで給ひておましなどまき給へば、「こゝにはどのぬにまぬりつるなり。君の御とのぬどころに」とのたま

へば入れたてまつり給ふ。南むきにおはすれば、みなみと西とのすみへをくり物にしたる三尺のびやうぶ、からにしきのはしざしたる物おましなど、中納言殿のまきおき給へる物どもあり。宮たち御かたいとほしくおぼされていり給ひぬ。大将、さいまやうの中將はうち、こときんだちはすのこに、大将、そんわらの君して「三條にまかりわたりて、今なむかへりまうできつるおぼつかなきになむ、こよひはわたらせ給ふまじきか」ときこえ給へば、宮「こにはからうじてたいめんしたれば、まばしかうてなむ。かしこに、あらむものひとりしてあらむを、などか見すて、は」。大将、あやしのめのおほせごどげにうしろめたくとおぼす。よふけぬれば宰相の中將「あやしくむかしおぼえたるに、や。大将などもかやうにてぞ、物などがたりま給ふほどに、わけぬればつとめてかへり給ひぬ。宮の御もとに御文あり、「よべ御あそびどもうけたまはるとて、さもひさしく、

まらぶとはおとにぞきしことのねをまことにかともひきさしよひかな。たちかへりすくけまりてこそ。うちよりめしあればまぬり侍りぬ。いまようさり御むかへに」ときこえ給へり。ふぢつば「さればこい、そむかしを、だにたゞそこにのみなむおはする」といふ。おはしまして今はめづらしき手どもひき給へば、いとかしこくなほりにけりとぞき、けむ、「まるをこそをかしと思ひたらめ。ことはみなさ、たり。この御、さうのことはいとよくなりぬべし」といへば、あえなむとて御かへりもなし。あやしと思ひつゝ、まぬり給ひて、ゆふさりつかたうちより御文あり、「まかで侍りなむとするをこそつかまつりさし、御文けふつかまつ

れ」とおはせらるれば「みな御らんじてけり。こゝすこしなむかたきところまじり侍りける。あすのよさりまかで侍りときこえ侍りけり。さらばよ、かなり」とことばに聞え給ひておはんふみはなし。ねうこの君おはしまして、とのぬもの、ねさうぞくなどたてまつれ給ふ。つとめてとうぐうより例の藏人きて御文あり、「ひと日いとこゝろうつ、しかは、かくものせむとおもへども、いりであらるゝといふめればなむ、おなじ心ならましかばと思ふこそ。

うら風にたちてざりけるまら浪の今より、とのみたのみけるかな。そらごとをこそねたけれ」とあり。一の宮もなに事をかたのみきこえ給はじ。藤壺、いとひてなどそらごとば聞えさせしなめり」とて笑ひ給へば、宮「たゞ一人一人こそさやうにもたまふ」。ぶぢつば、藏人に「なにわざかこのころはま給ふ。たれだれかまうのぼり給ふ。御文などは人のもとにつかはすや」とはせ給へば、「日頃はひるは御文あそばし、よるは御手ならひあくまでせさせ給ふ。院の御方なむこの月となりてみよばかりまうのぼり給ひぬ。今日はわたり給ひてのひひ、とたびなむさてはのぼり給ふ人もなし。御文は右のおほと、御かたになむつたひ侍りし。右の大将どのになむこの月より、三たびばかりたてまつり給へる。ひとよはまぬり侍るべき。おとゝかの御方におはしますをりにていとかしこくさやうせさせ給ひき。いかでかそ、このみまうでまほしからむ。ろくはありきや。藏人と、女のよそ、侍りき。一の宮、なしつばな、はたちまじり給ふなめり」。藤つば「ときの人ぞや心いとよしとていとらう驚たうし給ふ。そがうちにおやはらからははづかして、かたちも右大将になむ似給へる」

とどのたまふ。よろづの人うき事さく中にかの御事またきかぬ。左の大將のはいとすく
 よか蔭にかめしき人のよろづの事おもひながらいはぬかな。式部卿の宮のはそんわうの
 かたちにて、なに心もなくなむき侍る。中納言殿はいとさゝやかになれたる人のらうらう
 しきなり。院のは見たてまつりき。いとものものしうなむ、きよらにすべてもちつきのやう
 にいと見まほしきかたちになむ。宮「それをいとやんどなきものに、御心ざしもようあり
 て、たゞわれをこそとおぼして心にはかてめすれば、つねに御なかはあしきぞ」などのたま
 ふ。かくて「心もうけたまはりぬ。こゝにもいかでいかに思ひ給ふれば、きこえさ
 せたりしやうに、日のふるまゝにくるしう侍ればなむたちぬ」とのたまはせたる。

「まづけきをうちみぎらなむ君がため今よりなみのたゝぬなるらむ」とのみをきこえ
 給ふ。うちよりまた、大將殿御ふみ「宮の御もとにたびたびきこえさすれど、御かへりの侍ら
 ぬはいかなるにか。かゝる御心ばへのあるこそいかなるにかあらむと。まづ心なくお
 もひ給へられて、御文もつかうまつりたがふれば、わらはせ給ふも御おもてぶせにこそ。

「春日山今日もふみ見ぬものならば花はのこらずちりぬと思はむ。いぬ宮いかに侍
 らむ、かならず御返り」ときこえ給へり。ふちつぼ見給ひて、「いとよく宮の御手に似た
 りかし」とてさしくらべて見るに、「まさりにはえぞあるまじき。まかで給はぬまじきに、いぬ
 みやむかへたてまつり給へ。おはせむときはふようなめり」。宮「ようぞ。めめのととも
 いひおきたればさきにもこれかれ見む」とのたまひしかど、大輔とかくしていださすなりに

ふちつぼ「さらば今のまにいぎ給へ。いかでかかゝるをりにだに。見たてまつらでは」。
 宮「なごもにこがにみ給はじ。かしこの人はおのれをばものにもせず、ものもいはねど
 かわれをぞおそろしきものには、そげかいで、ゆくとてはたゞこの事をのみかへすが
 へすいひおきたれば、さらに人にも見せず」。ふちつぼ「あなまさりがほこそ」との給ふ。御つ
 かひ「御返り給はずば、やがてさぶらはせ給はむとおほせられし。かならずたまはり侍ら
 む。今さらにおもはせ給はむわびしく侍るべし」と申さすれば、「あやしや、かたかるべき
 ことならばこそなることもなければ、むづかしさにとてありしはみしかど、おぼつか
 かなぬほどなりしかばなむやまぢにはゆふかひなや。さやは」とて、

「やままげみふみは見ずともかせまたでちるべき花の色とやは見る。いぬ宮あなた
 に」ときこえたまふ。かくて日くれぬれば、大將まかでたまふ。やがてものし給へり。す
 のにおましなどよそひてものし給ふ。御車御せんなどして御くるまよせさせ給ひて、
 せうそくきこえ給ふ。「まかで給へるまゝにわたらせ給ひぬべくはとてなむ御むかへに」と
 きこえたまへれば、あなたには「こゝにいとひさしうきこえまか。さうることいもをなむきこえ
 させたる。けふあすこゝになむ。あなたに出でばや」と聞え侍給へれば、大將あからさまにわ
 たらせ給ひて、「またかへらせ給へかし」。宮「何かさわがしきやうに」とのたまへば、「藤壺の
 御まへにさぶらひ給へらむものを、くるしうもこそおぼさるれ。わたらせ給はねばそなた
 にまゐりこむ」ときこえ給へば、「何か、こゝにはみすともくるしからむことはおのづか

ら」とのたまへば、大將こなたにもし給ふをまひてはえきこえ給はず。いと苦しとおほし
 て、「さらばはなれたのとのぬこそは」とてもし給へば、ふちつば南のひさしに御ひやふぶ
 たて、おましまかせ給ひて「さらばこゝにを」ときこえ給へば、宮「あな見ぐるしや、せばき所
 に、いぬ宮（宮）のもとにいぬ」とのたまへば、大將「なにせむにか。いぬ宮（宮）のもとにうちに入
 す（宮）とこそいふなれ」とてひとひ（宮）ものし給ひしきみたちのとのぬ所にいり給ひぬ。こよひ
 春宮のすけのきみども（宮）のなごてう（宮）して（宮）か宮の御方、藏人所、だいはん所にも
 のせさせ給ふ。御まへどもにはをしきなどして参り給ふ。大將どの、御まへには宮の御まへ
 のをまゐる。されどまゐらず。御とのぬものとりにつかはしてふし給ひぬ。うちよりも御ふ
 すま出し給ふ。御ともの人もやがてあり。それにも物などの給ふ。大將「こゝの（宮）みすのも
 とにいせさせ給へ（宮）、きこえさすべきことなどあれば、「あな見ぐるしや」とて御帳の内に
 いり給ひぬ。みな御とのぬもりぬ。かくてよなかばかりに三條殿よりおとゞの御せうそくあ
 り、「わからさまにものし給へ。とみなる事などあれば」。おどろきて「なに事ぞ」とはせ給
 へば、「宮の（宮）御かたのなやませ給へば」と申す。「うちよりたゞ今まかで侍りてみだりごゝ
 ちとうざい知らず侍りて（宮）、今ためらひてたゞいまと聞え給へ」とばかりありて、「御つかひ
 よしなわたり給ひそ、ぞ（宮）くゑの事ありて」とあれば、おどろき給ひて、「何ぞ」とはせ給へ
 ば、「を」ときこえ給ふ。「宮より御つかひはありつ（宮）や」とはせ給ふ。「まらずえみ給へ
 ずなりぬ」と申してまゐりぬ。曉になりて中納言君（宮）といふして「三條にかゝる事侍るなれ

ば、今のまにまかりわたりたちながらまゐらむ」とていで給ふ。ふちつば「なにとして（宮）給へ
 らむ」とて（宮）のたまへば、宮「を」とことかいふなりつ」とのたまへば、「あぢきなのことや」と
 きこえ給ふ。大將けがらはでかへり給ひて、せちにきこえ給へば、その日のゆふさりつかた
 「なしつぼもとぶらひ聞え給はむ」とてわたり給ひぬ。かゝるほどに、御つかひにはあらで藏
 人まかでたり。うへ御まへにめしてとはせ給ふ、「なしつぼより（宮）御つかひいくたびか（宮）つ
 かはし（宮）。藏人、きこしめさ（宮）りしに、いたくわづらひ給ふことありとて御せうそく申さ
 れたると（宮）ありしになむ、おどろかせ給ひて、そのよ（宮）はさてはけさなむまゐりて侍る。をとこ
 おはするなりとて（宮）人はさこそいへ、つひにま給ひつめりかし。いかでかおほえぬすぢには
 なむまう（宮）し（宮）の、しる。あな（宮）、にくや、かやうの事はきかぬやうにてもものたまはず。
 西のたいに（宮）、かくて三日の夜、一の宮うぶやしなひま給ふ。五日よは大將殿、七日の夜なむ
 東宮よりれの御とぶらひはありける。うぶやいとおもしろうきよらにあり。ちゝおとゞ
 をはじめて左のつかさ人、宮人ひきてあげばりうちて、（宮）夜ひとよあそびあかす。その夜は
 おほき（宮）おとゞ、きさいの宮、大宮（宮）、御うぶやしなひま給へり。右大將のきみたち、左中將に
 ては宰相中將、左近の少將に藏人の少將、頭中將など、さ（宮）らでは上達部、藤大納言、その（宮）おと
 の宰相、さ（宮）らぬもいとおほかり。こゝはなしつぼの御うぶや（宮）。また九日の（宮）よは右の大
 將の御うぶやしなひ、例のまろがねのつ（宮）がさね、すみ物（宮）などして（宮）たてまつれり。お
 はぢおとゞこの生れ給へる君を、かぎりなくかなしくま給ひて、ほぞのをつきながらいだき

もちての給ふやう、「子といふものはかく悲しきものにこそありけれ。たゞ宮のちひさくおはするにもこそわれめ。これにおなじくはまゐり給ひて一二ねんのほどにかゝらましかば、いかにうれしからまし」との給へば、「のちおひのと（こゝろ）いぬふことのあれば、なごて、わがうまごにこそわれ。かならずことすぢとも思ひつくらむ。院のきさいの宮はそこのすぢにはものし給はずや。うぢちのは（こゝろ）み心もことにはあらずや。などわかこそこのみに（こゝろ）ならむからにこのすぢのたゆべき」との給へば、おとゞ「うたてある（こゝろ）と、かけてもえいふまじきことなり。むかしなりせばなにのうたがひは」などの給ふ。「ちひさき子はこもち（こゝろ）のみ（こゝろ）なり。めにちかくは中納言は見ずなりにき。なごてこの君見たてまつりにつねにおもか（こゝろ）れ」とうへのおとゞはあしともたまはず。おとゞ「すゑの世にらうたき人のものし給へば、見るとてあなたがちなるをみならはぬ世心ちし給ふらむと思へば、いとなむおそろしき」とのたまへば、北のかた、「何かおはせよ（こゝろ）かはてもものはならふめれば、今よりこそは」。おとゞ「さればよ、まへはからのたまへかし」との給ふ。されど宮の御方にはよるとまゐり給ふこといとまれなり。中の君と（こゝろ）ありしもあからさまにぞとぶらひ給ふ。かくておとゞ二（こゝろ）の宮には御（こゝろ）こゝろとゞめ給ひてしたびに（こゝろ）は、みやき（こゝろ）しきいかめしくなり給ひて、つきたちぬれば、まじら殿の女御の御心もかくしていつか（こゝろ）の目まゐり給ふとて、一の宮にきこえ給ふやう、「まゐらまはしくあらねど、御くにゆづりもちかくあべかなるに、このころはうちわたりにもとおもひてなむ。その（こゝろ）なかにい（こゝろ）とにくげなるさまにつねにのたまへば、まゐるいぬ宮

鏡を見たてまつらざらむことのおぼつかかなるべきをなむ（こゝろ）。さてこの宮をとの、御方にわたしたてまつらむすれども、思ふ心ありてなむ、さきこゆるやうあり。こなたにすゑ奉り給ひて御目はなたすみとぶらひ給へ。大將いとものゆかしくま給ふめり。ゆめ見せ給ふな。よしともわしとも人には見せぬぞよき。彈正の宮にいとよく（こゝろ）こえむ。よるはこなたにとのこもれ。などこと（こゝろ）いとよりも宰相の君は、いとわづらはしき十のみこはるて参りなむ」ときこえ給へば「うけたまはりぬ。いとよううしろみきこえむ。よるはおなじ所にとおもへど、むつかしきものやいひはへら（こゝろ）むとおもへばえ侍るまじき。彈正の宮にきこえ給へば、藏人の少將はかのみなみにありしところ（こゝろ）に（こゝろ）よるひるありて、ふぢつぼぞせめきこゆめりし。いみじくうらむめりしかども、耳にもきき、いれ給はざめりき」ときこえ給ふ。彈正の宮にもおなじこと聞えおきて、日くれぬれば御くるま（こゝろ）ばかり、ごせんかすま（こゝろ）らず。君たちさながら御ともにて（こゝろ）参り給ひぬれば、御かど、こまうと（こゝろ）きたんなりやとて、すなはちまうのぼらせ給ふ。こゝはま（こゝろ）うでん（こゝろ）の御つぼねへ（こゝろ）か（こゝろ）く（こゝろ）て（こゝろ）ふぢつぼこの月（こゝろ）に（こゝろ）わたり給へり。春宮より御使（こゝろ）日々に（こゝろ）あ（こゝろ）るときはおほんことに（こゝろ）御文（こゝろ）なきをりなし。こ（こゝろ）もちになれば大宮こなたにわたり給ひてのたまふ、「さきのはかのま（こゝろ）ん殿にてこそはそにてそこのこといでき、いとたひらかなるこの君たちも（こゝろ）うまれ給ひしかども、さて人の御方となりたるを、かゝることなむあると聞ゆべきにあらず。こゝにてこそはよろづのことところからにも（こゝろ）あ（こゝろ）らじ」などのたまひて、かねてよりすはふ行はせ給ふ。山々寺々に祈りの

師をすゑて申させ給ふやう、「おもほす事にうたがひてきたる、これことなくたひらかに。さてはこたみ御事おぼすやうにたひらかにて賢」とてをわがひきて、祈りぐわんをせさせ給ふ。おとこの事をうたがひておもほす。ふぢつば「さりとも宮走り給はであるべき事か。天下の院の御かたはらにいでくともおもほすべうもわらず」との給ふ。ものなどおもほしておやたちはおもほしなげ、いとつれなくしておはす。かゝるほどに、ちゆうずんになりぬ。大きおとこの御四十九日、八日六日ばかりにあたりたれば、御わざはて、まばしかりて、御かど大將を御位にておはしますほどに大納言になし給ひてむとおぼして、たゞ今太政大臣なくともありぬべくおぼして、なり給ふべき人の御年わかけれど、大納言のやんどとなければなむ。左のおとこのいかにこの大臣めしのけつに、中納言に思ふ人なさむとおもほすほどに、まゐりすぎて、廿二日に大臣めしあるべし。とのばらそのまうけま給ふ。左大將どのいとなくまうけ給ふ。右大將おりたちてまつりごとま給ふ。この日になりてみなまゐり給ふ。左のおとこの太政大臣、右は左、左の左大將は右大臣になり給ひて、大納言にはまた右大將なり給ひて、中納言には御門宰相中將をとおもほす。右のおとこの源宰相をとおもほす。うへ「さだめ、られよ」とおほせらるれば、右のおとこの「こたみのすんもろすみのあそんにぞわたりて侍る。左大將のまへわたりまかりならぬものなり。かゝれどもまさよりが思ひ侍るは、おほい侍まうち君のをはりと侍るとて、よび侍りしにまかりて侍りしかば、たの事申さず、さねたのあそんのうへをなむかへすがへす申し侍りしかば、おとこのこのことの

うへをば知らで、かならずあひかへり見むと申し侍りしをよろこびて、まかりかくれ侍りしを賢このたびのげちはかれをめぐまらせ給へ」とそうし給へば、上は「もろすみのあそんはさるべきことなれど、思ふやうは院のおはしまし、こゝになどかくてあるを、おなじ親王のいんつべ「無きや」などいひて、「いと下らうなればせけむなるをさる例もあるを、すけずみのあそんをなむおもふ。さねたのあそんはかけたるところもなく、今は世をすて、法師のやうになりたる人は、なにのつかさのようかあるべき」とおほせらるれば、「たうじにおや侍る。まさよりがをとこともまさかりなむ侍りて、かれら御をくれ侍らむは、このあそんの例のみ侍らむことなむ、いとほしく悲しう侍り、身をすて、侍るにむなしくなり侍る。のちにたまふ例も侍りなむや。いきて侍らむになかまかりならざらむ」と申し給へば、うへ「さらばともかくもみな賢はからひにあるべきことなるを、まつと思はれむをたれもたれも」とおほせらるれば、げん宰相をなせし給ふ。おとこのなり給ふべき、君達あやしとおほす。宰相には御心と頭中將なし給ひつ。こと擇つかさどもみななりぬ。かくてまかで給ふまゝに大きおとこの右のおとこの右大將、まゝ殿に参りたまひて、右大將「たびたびのよろこびを御かたにのみなむ。一の宮の御とくにならずばかくその人にも侍らず、たゞ今まかりなるべきをりにもあらぬを、かつは思ひ給へつ、み、かつはよろこびさこそさする」とあれば、女御の君「いとおぼえぬすぢにおほしなるを」などのたまふ。ちゝおとこのもたち給へり。大將いはいしたてまつり給ふ。まゝ一の宮ちかくて御らんじていとくしとおもほす。かくて今

日は太政大臣の大饗にみなまゐり給ひぬ。またの日左の大との、御のたまふべけれど、いませ給ふことありてあすなり。ふぢつぽのおはします西のたいに、宮もおとゝもおはしますほどに、左のおとゝおは宮の御もとによろこび申しに参り給へり。おどろきながらひさしにおましよそひてたいめん玄給へり。おとゝ「すなはち参らむと思は給へしを、きのふはあはれのこと侍りしかばそれにさはりてなむ。いともうれしき御よろこびとなむ。れいよりもうれしく、この宮にさぶらふ人のみぐるしくめづらしげなきことにかく侍らば、はじめものし給ふだにことはえゆるなかんめるに、見ぐるしけれとこゝにさへは、み放ち侍らむやはとてなむ。この頃こゝに侍るを、おとゝのいとあやしう、みな人のうらやみきこゆることの、かくのみものし給ふこそなどかことものはえはなくはいものひと、ゆくすゑの君こそ」。宮「いでや、なにかしそ驚ならひたるに侍らねば、たゞこの人のあねのとのにさぶらひ、御のちなどのあまたものし給ふをのみこそ、かこちもやきこえましと思は給ふれ」。おとゝ「すぢかはりたるやうにのたまはすれど、かねまさかのちは、おとなも、わらはも、こまこまで皆御中にま侍れば、さうにへだてきこゆる事侍らず。ちかきをもとほきをもをさなき物どもはこなたにかへり見させ給へとなむおもう給ふる。わか宮この世の物にも見え給はねば、御方をばかたじけなきものに、そがうちにもかくまださまかりなるまじきまよくに侍らば、世の中をなかくもえおもう給へすなむ」。宮「あなや、しや。御おやのやうなる人だにさもおもひ給はざる物を」とのたまへば「よろづのことうしろやすくを」などの給ひてたち給ひぬ。宮さりとる

われらがためにうしろめたくもものし給はむやはとおもはず。ひるつ方右の大殿、一の宮の御もとにまうで給へり。やがてふぢつぽの御もとに御せうをこわり、「をばりほふしのやうなるよろこびに侍れときこえさせてやはとてなむ」、宰相の中將してきこえ給へり。御返り、「いとかしこくかくの給はするをなむ。こゝには時えらるゝ心ちして侍る」などきこえ給へり。かへり給ひぬ。すなはち右大將かぎりなくさうぞきて、はなやかに、をぢにもちゝにもすぐれて、まうで給ひて、大宮ををがみたてまつり給ふ。藏人の少將して「まばしはべるべきを、こゝかしこよろこび申さむとてなむ。御かたには今ことさらにさぶらはむときこえたまへ」といで給ふを、宮も御方もすてひとみすのうちにみて見たてまつり給ひて、「なほ似るものはなかりけりと、いま宮こそさいはひおはすれ。見きくかひある人をもひとりやうし給ひて、つかひ人よりげにまたがへ給ふる」といふぢつぽはのたまひし。宰相まゐりよろこび申させ給ふ。さうぞくいとよくしてはいしたてまつり給ひていで給ひぬ。このころはふぢつぽけふあすとおはすとて、里の人々まゐりつどひて五十人ばかりあり。宮の御かたの人もいとおほかり。御まへにこれかれさぶらひ給ひて、宰相の中將の君「こたみのよろこびをま侍りぬるこそすけずみよろこびには思ひ給ふれ。ときどきをのにまかりて見給ひしかば、いとかなしげに世の中を深く心うしと思ひてものし給ひしを、あはれと思ひ給ひしかばみづからのよろこびあらまじよりもうれしくなむ。みな人さなむおもひ侍るなる。右大との、左大將などはかく心ふかく、かくさらにはづかしきことなむみなきこえ給へし。ふぢつぽ

あやしきことと懸てこえおき給ひければ、さんだちをおきたてまつり申し給ひければこそ
 わなれ。こゝにゑるべきことかは、いでさも侍らず、そなたにての給ひしことをおぼしたる
 なり。さらす^{おぼ}ばこたみはよに^{おぼ}も辨の君はいとおほくさいたちて^たなり給ひき。さら
 いふべくもあらぬを、すけずみはのちにまかりなりしかど、うへの御心まらひに仰せられし
 なり。ふぢつば^{おと}は君たちに^{おぼ}おほえまさられたりけり」とて笑ひ給ふ。かくて夕ぐ
 れになりぬ。おと^いもおはするに新中納言参り給ひて、御せうそきこえ給ひて御まへにい
 で、おと^いを^{おぼ}はいしたてまつり給ふ。はなやかにきよらなりしなごりにまやうじにてそ
 こなはれたれと、さまもてなしまめきてめでたしと、おと^いよろこび給ひて、御さうぞこ
 してすのこにおましきさてすゑたてまつり給へり。「いとうれしくとしごろおぼつかなくえ
 たいめんせざりつるを思ひ給へ。なげきつるをよくわたり^{おぼ}給へるを、かぎりなくよろこ
 び^{おぼ}申し侍る。ちかくはとのにまゐりて侍^{おぼ}りしに、えたいめんせざりしをなむ思ひ給へな
 げきつる」。中納言「世の中の^{おぼ}いはかなく侍りしかばおこなひもま侍らむとて、まめやかなる
 所もとめて年ごろこもり侍るを、との、御ことにてまかりいで侍りぬ。おもほえぬよろこび
 侍ればおどろきかしくまりてなむ。かくいたづら人にて侍ればつかさくらゐのようも侍ら
 ぬど、御心ざしを見給ひつるなむいとかしこく侍る」とてなき給ふに^{おぼ}、おと^いもむかしよ
 りおなじ所にて見たてまつりなれたれば、よからぬこと^{おぼ}も^{おぼ}に人してこそはおもひきこ
^{おぼ}ゆれ。されどおもほしうと見たればこれをなむばか^{おぼ}り申し侍る。こゝにはこの宮に侍る

侍物のとかう侍りける。このごろものすべきころなりければ、これだに侍るなり。はいあり
 ていひ^{おぼ}えむと^{おぼ}ものし給はむ人おなじ所にてみかたらひ奉らむとておはしませしを、ある
 は一のかみなどになり給ひぬれば、いかでかゝる所にはとて、皆とのにわたらせ給ひにし
 ば、こゝをばこの人にかくとらせて侍るなり」。中納言「もとよりおろかに侍るうちに、年ご
 ろたままひもなくもの覺えず侍りて、ことのたまひしやうにて^{おぼ}、さる御をはりのことも
 うけたまはりしかども、かくもおぼえず侍りしかば、とり申すやうもおも^{おぼ}はえず侍りて、
 おのづから心もあるやうになり侍りける」。おと^い「なにかは、さしもまざりこどもあま
 たもて侍れど、まことにくやしうおもておせなる^{おぼ}べきは侍らぬど、おほす^{おぼ}にまじらは
 むにおもだしく侍るべきもなく、人のあそびせむ所には草刈り、笛吹くばかりの心どもに
 ていとむしんにて侍り、からうじてとごまにまじらひてもはぢなかりしかば^{おぼ}、はかなくて
 まづかへりにき。さればかたじけなくとも、今はたおやもおはしまさぬを、たのもしげなく
 とも、との、御かはりともおもほせ。まざりよりはむかし侍りしもの、かくなり給へると思ひ
 給へむ」などの給へば、中納言ものたまはず涙をのみながし給へば、おと^い「いかばかり
 上ずめきか^{おぼ}たりし人ぞ。かう涙をもをします、世の中を心うしと思ひたるを、おぼろげに
 はあらざり。かゝる心ながらいたづらになりなばおそろしくもあるかな、うべわれらはあ
 はれなりとはのたまひけりとおぼして、おほくの御^{おぼ}物語し給ひて、おと^い「兵衛はこゝに
 ものし給はたいめんせむとありし。むかし人ものし給へり。きこえよ」とていり給ひぬれ

ば、兵衛の君みすの徳うちにて「むかしを今にとこそきこえさせ給ふべけれ」といふこゑいと近ければ、中納言の君「いとめづらしき御こゑにもあるかな」とてみすのもととなるはしらのもとによりて「さもひさしくなりにける」などのたまへば、「いづれの世にかわすれきこえさせむ。かたときも思ふ給へ。をこたらねどよそにはなれおはしますな徳。うちにもなれたるやうなれば、さしわけてもきこえさせねば、げに忘れずながらとしごろになむ。ましてこなたにわたらせ給ひてのちは、おはしましたし、方のみ見やられ侍りて、つねにむかしこひしくなむ。うへにもさらにむすれきこえさせ給はず、思はずにまめやかなる御心ざしのありけること」ときこえ給ふ。中納言「いま、世の中に侍るとて、見たてまつるをこそ心ざしなきやうに、むかしより今までおもしろ給へ。あつめたる事をきこえて、世の中になからむことなむいとよろめたなき心ちする。はやうなきこえわづらひてしに、かへりまどはれし心ちなれど、今はおもほしうとむべきにも驚あらしぬを、たゞこゝもとにいでさせ給ひなむやときこえ給へ」とのたまへば、兵衛かくなきこゑれば、もやのみすのはしらのもとにふし給ひて、「こゝにもいかできこえむこと年ごろ思ひつるにいとうれしくものし給ふなるをなむ。さてのたまひつべからむことはなほのたまへ。こゝにいとよきこゑ」といはせ給へば、中納言「今は耳もきこえ侍らず、人のきこしめすばかりものもきこえねばとほくてはえなむ」ときこえ給ふ。うへ「かたは人にこそはむつまじうはれものし給はざりけり」とのたまふ。御聲いと近ければいとあやしくめづらしくおもほえて「それもたがまなさせ給へるにか」ときこえ

給ふ。兵衛「こゝになほいでさせ給へ。おとゞの君も御せうそきこえよとのたまはせつるものを」ときこゑれば、「いとくるしければぞや。このすだれをあげ給へ」とのたまひて、御几帳とおしひださせ給ひて、すこしさしひださせ給へり。中納言「うれしきにもまづものおぼえぬものになむ。むかしさもせむかたなくまどはれ侍りしかば、たままひをまづめむと、たびたびたゞ御文一く徳だりを見給はむと、兵衛をせめ侍りしかど、え見給はざりしを、そのかみしに侍りなましかば、かゝるをりもなくしてすは」。うへ「こゝにもとしごろいかできこえむと思ふことあれど、さるべきをりなくてなむ。この山ざとすみし給ふこそいと心うけれ。おのづからちかくきこえ給たまふやうもあらむ。さやうにのみみなあんなる世の中なれば、うたていひなしつゝ、おどろけば、いとさゝにくしや。いかで世の中にかた時侍るべうもあらず、せむやうもなかりしかば、いかゞはせむ侍、見どころ侍徳るところの御こゑはなれたるにて、おもひ給へなぐさむやとてまかりありきしに、としごろは侍れど、世のうきよりはといふなれどなほおなじやうにわびしく侍るは、ところからも侍らず」ときこえ給ふ。「またものゝ心まらざりしときは、人にもきこえずうときものとおもひしをおもへば、今こそ人につらしとおもほざるゝは、いとほしき心ちしけれ。人々の心に見くらべたてまつれば、またわすれたまはざりけるを、つねにいとほしとおもひきこゑるをも、さゝ給はずやあらむ」ときこえ給へば、世の中の事きこえ侍らぬところなれば、ましておもほされむことはいかでといまはおやを驚もものし給はず。よろづに身のいたづらにならむをの給ふべき人ももの

し給はねば、さまことになりてふかき山に入りなむと思ふ給ふるを、かくとだにきこえうけ
 たまはらでやとてなむおぼえぬよろこびの侍るを、いとわやしがり侍るに、人のつくるや
 うに侍りしかば、さまでさだめておぼしけること、さりともしきこえさせてむとたのみてなむ。う
 へ「御よろこびの事は、こたみはこゝにもまじり侍らず。ゆくさきたひらかに侍り、おもふ
 やうにも侍らばうちわたり御うしろみはとなむ思ふ給ふるを、なほこのおぼこなひ山と
 の給ふ事のためは、世の人のあるやうに宮づかへなどま侍る人、なんどして、ものし給
 は、こゝにもたえずきこえうけたまはらむ。さらばげにこのわたりに御心ざしあるとはま
 るべき。かくきこゆるにさもま給はずば、なほもとよりさる御心ありけりとなむ」。中納言
 「かくの給はせば時々さとにまかりかよひても侍りもしなむ。世の人のやうに人につきては
 え侍るまじ。こゝにえきこえさせしときより、人のもとには侍らず。とのに侍りしまでは女
 をよそに見給ひき。それも兵衛の君にもきこえ給ひなむ。まゐらせ給ひてのち山ざとにま
 かりこもりては、下すにてもさる物をなむ見給へぬ。おのづから君たちときどきものし給ひ
 て見給ふ。今さらになでふことかは見給ふべき。かくながらまな、むとこそ思ひ給ふれ」と
 て涙をつぶつととおとして、いたくためらひてきこえもやり給はねば、いとわはれとおもは
 して、まらぬ人のいまめづらしき、そあらざらめ。むかし見給ひけむ人のあはれなるも、も
 たまへるをものし給ひけむやうにてへ給へり給し。世の中に見ぐるしかりしこと、もは、み
 なわらまほしきやうにのみなりにためるを、たゞそこにかうてもものし給ふなるのみなむま

た見ぐるしかなる。中納言「それはまかりにけむかた、鮮もまらさず、ここの、さねた、かれら
 鮮がれうに侍るなるもいたづらなるべくなむ。みづからも侍るべくもあらず。あれしも世の
 中にはあるにやなきにやあらむとも、民部卿こそありどころまりたるやうにもせられし
 か。たづねいでもしちかく侍るところにはそれら侍らむ。さりともしなごりさるかたちなら
 む物も見給へしときこえ給ふを、おぢ給ふはいみじき御おこなひの、こゝろにこそあなれ。
 などかはすぢことなるやうには」と驚きこえ給へば、「そのすぢを心うしと思ふ給へ。いりに
 しなり」ときこえ給ふ。「まめやかにてこゝ符のために御心ざしある物ならば、きこゆるやう
 にてものし給へ。きこゆるやうにてあらじとおぼすとも、かうきこゆることにかなふとおぼ
 して、おぼさる、物ならば、うとから、つねにきこえうけたまはらむ。さらぬものならば
 うとくときこえ」とのたまへば、「例の人のやうにてはなほえ侍らじ。か、やうにときどき
 侍らむおほせごともまたがふとおもう給へ」ときこえ給へば、「よしおほくもきこえじ。こ
 ゝにも世の中に侍らむともまらさず、たひらかに侍るものならば、時々兵衛がもとにはせ給
 へ。てなむこえむ。たゞいまはゆくさきのこととせきこえにくし」とてり給ひぬ。中納言
 の君は兵衛の君とものがたりま給ひて、あかつきにかへり給ふと、なむ。こゝへは西のた
 りによるこびの人々にだにまゐりつとひ給へり。中納言藤つぼ物がたりま給へりこゝへは以下四十
 二字イ無義詞

國ゆづりの中

かうてけふは左の大殿の大饗、やがてこの御方御まへにてまん殿おもしろくつくり、さまいかめしければ、ま給ふ例のごといかめし。かんだちめはみな例の人々なれば、御方御まへに
見給はず。右のおとゞばかりをまらうどにてもし給へる。又の日は右の大殿のいと厳めし
うま給ふ三條殿いとおもしろうきよらにつくりなされたれば、そこにま給ふ。まん殿はか
んだちめのぎにまつらはれ、ひんがしの一のたいを彈正の宮、らうをまらうちぎみのぎに、
二のたいらうかけてとところどころにせられたり。かんだちめつねにもし給はぬ所二條なれ
ば、御心づかひまつ、まらうで給ふ。右のおとゞもものし給ふ。右のおとゞ「こゝにはこの大饗
まはじむる日なるを、かしこくとも宮たちかたらひまこえていで歸たてまつり給へ」とまこ
え給へれば、彈正の宮、その宮にかうかうとまこえ給へば、宮たち「大饗のところになつ
まそとたびたび上のたまはすれば、左の大將殿になむつきはべらざるまむ。さりとままは
のたまふらむを」と大將もろともにまらうで給ふ。おとゞよろこびかしこまり給ふ。この大
饗のことは宮のいざらにまら給はず。かくてこのおとゞ、あるじのおとゞにまこえ給ふ、「こゝ
にはかへりあるじはじめ給ひし時どまらたりしかし。としどろあらぬまにまなさせ給
ひてけり。むかしよりかくならひたるまきに侍れば、御心ざしもかはらで、おなじこと、思

ひ給ふれど、そのこととも侍らで、まことさら聞えさせ侍らぬや」。あるじのおとゞ「こゝ
にてまもさらへだて聞ゆることまなけれど、そが中にいまはた大將などまてまぶらへば
むかしより心ざしふかく」などまこえ給ふ。「まきにまらたりしには、大將のまだみすく
ものし給ひしかばこそ人心ちもせしか。このたびはまこえふるべくもあらぬこそ」とまこえ
給へば、あるじのおとゞ「まきの御こてもめたがへさせ給へり」とつねになげましものを
ときこえ給へば、「さてたてまつらすや。かのたまへる人は、まきよりが子にてやしなひた
てまつるぞかし。見たてまつり給ふにかひなくば、世にも」。あるじのおとゞ「されどはいた
がひたるやうになむ。一日中納言のいとめづらしうまらられたりけるはいかなること
か。殿をふかくうらみ奉りてまじらはれぬとこそうけたまはりしか。あらまはこたみのこと
はよろづのことをかう忘れぬべき御心ざしぞかし。これを見給ふこそ心づかひはまらう
どのとのの給ふめゆりしかばまなむ」。あるじのおとゞ「まの給ふ、かまなたまやうなり。か
のすぢによりてと見たればこそ世の人みな心づかひし、かしこまりまこえゆめれ」と御物か
たりま給ひて、御中いとよげに見ゆ。女がたにはおとな、わらは、下づかへかぎりなくさうぞ
きていとおほかり。かづけものどもままにいとめでたくして、とうでませ給ひき。いで
物みなあり。ごたちはいと心ことなり。かくてよ一よあそびあかし給ふ。御まへの池につる
かくる、かくにあはせていできつ、まふ。つとめてかへり給ふ。かくて中納言はこの殿にま
まものし給ひて、をのへかへり給ひなむとおぼすに、ふぢつばのたまひしこといかにせむ、

さの給ふとて里すみをせば、今はなにかひかは、心ならぬやうに、よ人こそ思はめ、まひて山里にあらばはいよくてあらむとおもふにこそありけれとこそはおもはずべかめれなどおもはしわづらひて民部卿に「かうかうなむありし」ときこえ給へば、「さりけむ物をまことにそのことをおもはさば、おなじやうにてもものし給へば、ころぎしなきやうにこそは。かくてもものし給ひつゝ、おほやけわたくし、をしみきこゆれば、きゝにくんぎにはことまわらびうちあはめて泣く泣くまじり給ひしかど、ゆめばかりのこゑをだにま給はず、世の中に心をもうつく、しやかにおもはれ給へる人の、いまさらたにめんまてさきこえ給ひけむもきゝ給はず。としごろ御心ざしのきこえぬるに、こゑはあらめ。このたびの御よろこびはおとゝおはしまし、世にまじらひても右大辨をばこゑし給ふべくもあらぬを、おほろげの御心ざしにはあらず。なほ時々はをのにかよひ給ふとも、かの山ざとにもものし給ふ人、むかへたてまつり給ひて、御すましのことなどせさせたまつり給へ」。中納言「身ひとつは京にかよひつゝも侍りぬべし。かしこにもきこえてき。ふるきにもあれ、あたらしきにもあれ、人はさらに見給はじ」との給へば、「さらばかのおほいきみは知り給はじとするか。またいでくともちひさくこそは、あらめ。おとなになり給へる人を、まらじとおぼすらむとぞ。いでなにかいまはみをだにまらぬもの、を」とのたまへば、「さらばこゝにこそはたづね聞ゆべかなれ。とのゝたてまつられたんなるぞ。こゝらのてう、家なども誰にかはいたづらになされてかひなくこそは」などのたまふ。中納言「こゝに給へる所はえ侍りぬらむや、さりぬべ

くはとささき侍りぬべからむやうにまなさせ給へ。いでそこはまたてなくはあらざりし所なり。女君の御れうなるなむよろづの物ぐして、たゞ今もおはしたらむに、びんなかるまじき」などきこえ給ふ。かくて民部卿、母北の方のすみ給ふ山里にまうで給へれば、北の方たいめんま給へり。民部卿としごろいとおぼつかなくいづこにもものし給ふらむとも、えうけたまはらざりしを、ある人のかうてなど申すにつきてなむうけたまはりし。いであさましや。されどあやしき御中ならむ御なげきなせるべし。中納言の君のありしやうにもあらずなりに「たためり」ときこえ給へば、「あなうたてや、あしかれとも思ふ給へねばこそあらまほしきやうにては、さてもとふべき人だにとしごろまで夢のうちにもきこえぬに、おもひのはかにおはしましたるをなむ」。民部卿「のたまはせしことのあるを、すなはちまゐりこむとてせしかどほどなく御思ひになりしかばなむ、の給はせしやうは、こゝに物したらむ女君をば殿の御子になしたてまつりて、さねまさがつかうまつるおやは世の中思ひはなれ給へる人なめり。さればえまてたてまつり給はじ」とてたてまつり給ひしものども、まゐりしたる文たてまつり給ふ。「このえ給へる殿はことにひろくはあらねど、わかき人のすみ給はむにいとおもしろきところなり。かくおもはしてにやありつらむ、としごろ御心とめてつくらせ給ふ。あるべきまなみななむせられたるは、はやくわたらせ給へ。この南殿は中納言の君なむ賜はり給へるちかどなりにて、いまだに御なかよくて物し給へ」ときこえ給ふ。北の方も見給ひていみじくなき給ふ。「かくあさましき所なれば、世の中の事をささきこ

えぬを、殿の御こともひさしくわりてなむうけたまはりし。いみじくかなしく親もなきやうなる人をもち侍りて、さりともおはしまさばとおもら給へつるものを、かゝることをさへ給ひける」とて泣き給ふ。御ぶくなどをもき給へり。例の御服をぞ君はき給へる。「かくうけたまはらましかば、これの侍る人にもおもき御ぶくをこそきせ侍るべかりけれ、心ときめきのやうなれども」とてここにび色の御を一かさね、くろつるばみの御こうちき、とり侍いで、見せたてまつり給へり。民部卿なき給ひて、

「山里をひとり仕ながめてわが宿のふちのさかりをいかでき、けむ」。北の方。

「松かれてふちのみありとき、しかば（おぼ）我もたもとほふかくなりき」ときこえ給ふ。民部卿「そもも女君はいかに伊おひい（侍）で給へる。むかしはなだゝる人におとるまじくきこえ給ひしを」とてみすをかきわけて見たてまつり給へば、にび色の御几帳たて、親も子もぬ給へり。ひめ君うすにびの一かさね、御こうちきかいぬりのうちき一かさねき給へり。御年十七さいばかりにて御ぐしいとめでたし。かしらつき御ありさまいとうつくしげにておはす。母君いとものものしくあいぎやうづきてかみうるはしく清げなり。年三十五のほどにて給へり。民部卿、女君に「まるをおやとはおぼせ。今はよろづにつかうまつらむ」などて御ぐしをかきいで、見給へば、いと多くて七尺ばかりあり。北の方「髪などおひぬべく侍りしかど、世の中のかくなりにより、夜晝思ひなげき、ある時はふしまづみ、かしらももたげず歎きて、かほかたちも人のやうにもおひいでぬ（な）めり。あやしくこのことどもは人にも

似ずおやを戀ひ悲みつゝ、ひとりはいたづらになりぬめりき。これも今に忘れざめればまたいかゝあらむとなむ」。民部卿「いとわやしや。なでふ契あることにかありけむ。よろづのことさまたげのやうにわめれば、世のつねならぬ御すきと仕なむ見給ふる。今はなほ里の殿へいで給へ。今よきいとりて御むかへに（い）ときこえたまへば、「いなや、いまさらにはうかたりし里にも、なにか、わかき人のおはしまさむところにもまゐり侍れかし。こゝにはやがて黒きさまにてもやみ侍りなむ。こゝながらもなむいではとわぢきなきことを、はやかたり給へ。そこにさへそひたてまつり給はず（は）いかでか、うしろみきこえ給ふ人なくてはさてもよすて給ふばかりのほどにはわらざめり。かの君もつひにさてのみややみ給はましとおほすこゝろなぐさめ給ふ折もありなむ」などきこえ給ふ。かうてもものまゐり給ふ。いほろいほろのをしき四つしてひきほし、くだものなどして、御さかなに（ま）へにかうじ、たちばな、ひとこあふちなどあるをとらせ給ひて、おほみきまゐり給ふ。御ともの人には御せんにも下人にも皆さまさまに御前にはみなこしき給ふ。下人にははら（ち）など賜ひてかへり給ひぬ。（お）かくてふちつば、今日あすにわたり給へば、みな御うぶやのまうけさせ給ひて、大殿におはしませば、君たちは三所、四所、よごとにとのぬし給ふ御かたにおはしまして、あるはよるとまり給ひ（ち）などするほどに、宮よりよきほどなる老ろがねこがねのたちばな（お）ふくろ、さばみ（た）たるまきし一かさねおほひて、りんだうのくみしてゆひて、八重山吹のつくりばなにつけてあり。おほんふみには「おほつかなからぬほどにと思ふ給へとたのめし

ほどをすぐされに怪しかば、それがつらさにも無こそこのごろはよのまはいかとおぼつかなく思ひやれ。さてこれはをさなき人々にそこに見給ふほどだにあはれにま給へかし。

うらやまし今さつさまつたちばなやわが身にひとはいつか待ちてむと思ふは無こゝろもとなくなむ」とてたてまつり給へり。大宮、御ふくろわけて見給へば、おほいなる橘のかは無をよこさまにきりて、こがねをみに似せてつゝみつゝ一ふくろあり。大宮「あなわづらはしや。いかでこはせさせ給ひしぞ」とはせ給へれば、例の藏人「兵衛殿、中納言殿のおはせと無うけたまはり給ひて、おまへにてこれかれなむ仕うまつり給ひし」。宮「かやうのをかしきわざは、かの君ばかりぞま給ひいでられけむかし。これかれにおしつゝみて、くばりたてまつり給ふ。藏人少將おはすや、君たちさるつ、ちのひにたちばなくはせむとて、ことにきんだちもてあそび給ふ。御かへりは「日ごろとはせ給はざりつればいと心ほそき心ちなむ。さてこれはさしもうけたまはらぬものを、

みにもかくむかしの人をならしつゝ、花たちばなをなにかうらやむ」。ことごとくまたさこえ給ふ。大宮、御使に女のさうぞく一くだり賜ふ。かゝるほどにそんわうの君、ふぢつぼにある夕ぐれにかははなれて黒き水をけのおほきやかなるよついつゝかさねて、女どもさし入れてぬ。局の人々「あやしき物かな。御せんにかゝる物をさしいれていぬる」とて見れば、おほきなるくぼて無を白きくみしてゆひて、いつゝさし入れたり。とり入れたればほどはをけ無のおほきさなり。わけて見ればひと無つにはねりたるきぬを、いひもりたるやうに

いれたり。今一つにはあやをおなじやうにいれたり。今ひとつには、かつを、さけなどのやうにてお無いれたり。くぼてのふたになま女の手にて、「けふならむ。からう無して一つづゝのりつかひしてくま時にはなごか、

ねぎごともしかすなりにしかさまには神のおほかるくぼてそとぞ」とあるを、そん王の君「たれにか、例の人のすさびにこそあめれ。久しくかやうの事なかりつるを」との給ふ。めのと「里におはしますほどをおぼしたるなめり」といふ。君はいかでかこれが返り事無こえむとおもへど、さるべき事をりもなければ、おまへにとりいで、御らんせさすれば「いとさよげなる神のおろしか」などのたまふ。かつをなごくばりつゝ、い無くぼてはもたり。かゝるほどにつどもりになりていとたひらかに男みこ無うまれ給へり。けしきもなくしておはしつるほどにうまれ給へば、人々はきゝ、あへ給はず。おと無宮よろこび給ふことかぎりなし。いかならむと思ひつるたびたび無何事もなくま給へれば、うまれ給へるみこをうつくしみおはさらず。宮より御せうそくたちかへりあり。おと無睦しくつかうまつる人を御前にめて、よろづてうじて参り給ふ。思ふやうに人のえせぬをば御てづからま給ふ。宮の御はらの君たちはこもりておはす。御てづからま給へば、君たち「何事をか無つからまつらむ」ときこえ給へば、おと無「おそこたちはまだみじくならむ。おきなはおほくの子うまごのは、もいたはりならひたり。かゝる人をばこのをりによくいたはり心まらひつれば、かたちもことにそこなはれぬものなり。宮のよ無おほすなるに、つひやかさてこそはまるらせめ」とてよ

ろづにありがたきものをきてまぬり給ふ。うぶやしなひを給はぬ人なく、いとさよらに去給ふ。宮より七日のは御屏風、おましよりはじめて御座なりもちのあしつきたり。御からびついつよるひにあやにしさよよりはじめてよろづの物入れさせ給へり。御文あり、御使は大夫。「たびたびのは見給ふべきみづからのたまはねばおぼつかなくなむ。いかにとおもふまゝにこそや。ことなることなくてもし給ふなるをよろこび、よろづの事みぬものとなりけるをなあらためまはしくこそ。さてこれはたび人のれうにとてあまたのおやになり給ひぬるをなむ。いとあはれにいまはとくたいめんもがなとのみなむ。さりぬべくはゆめばかりもみづからもの給へ。うちもおどろかされたりともいとよく見えつべしや」とてたてまつり給へり。大宮見給ひて「かく人のおやになり給ひて、こゝろきておはしますこそあはれなれ。おぼつかなしとあめるを、御返事もふしなからさこえ給へかし」との給へば、きこえ給ふ。「うけたまはりぬ。また筆もとられ侍らぬとはおぼつかなしとの給はせられたれば、ふしなからさこえさする。いかにと思ひなげさつるを今日まではかくきこえさするをのちはいか。人のおやにとかのたまはせたるはよつはやみるとかいふなることをなむ、今かう思ひ給ふることたび人に給はせたるものはあるじまでむよろこびきこゆる。かどごとには」と書き給へれば、宮つゝませ給ひて、御使に女のおよひ、しも人にろくなど給ひて奉り給ひつ。一の宮の御方より、こもちの御まへの御おとゞのごせん、ちどの御ぞ、むつき、いとさよらにてうむじてたてまつれり。白さをりびつに、さばみたるゑかきて、白き黄ばみたるせにつゝ、仁辭みたり。御

いしのだいに例のつるあり。すはまに、

「ゆくすゑも思ひやらるゝいしにのみちとせのつるをあまた見つれば」と大將の君の手にてかき給へり。源中納言殿の北の方いといかめしうつかうまつり給ふ。をとこ方は左衛門の督の君よろづのところどころのこと、みな君たちわたり給ひつゝ、去給へり。所々より御うぶやしなひを給はぬなし。おとゞの君はとにいでの給ひて、おはしまさし時はまらうど御座とみこたちもいさゝかつど御給ひしを、いませもあらぬと、おほきおとゞみこたちをはなちたてまつりて、右大將よりはじめてまうで給へり。宮の殿上人などはなれなきなし。下人ものこるなくまぬれり。かくておとゞの御ふえ、御ことどもあそばせば、大將としどろひさしくうけたまはらざりつる御遊びはこよひのれうにおかせ給ひけるにこそは。おとゞ「のちおひのおそろしかりしかばみ、はすばりにしを、こよひはいたちのまとゝこそき、給ひけるは、もの一つ遊ばせつかうまつりてこゝろみむ」とのたまひて、まやらの笛をたてまつり給ふ。おとゞはかはぶえをあそばす。兵衛の督、中納言おほひちりき、これかれ御ことどもあそばしてよひと夜あそびあかし給ふ。歌などよみ給ひつゝ、あかつきには皆ものなごかづけ給ひてかへり給ひぬ。つとめて宮、よべのものこゝかしこへたてまつり給ふ。すゝしの中納言ははどのにて。かくて九日のよは、大いとのうちのだいきやうの御まへのもの給ひ給ふ。こゝかしこよりのときよらにてたてまつり給ふ。左大將殿おほいなるうみがたをして、ほららの山のまたのかめのはらには、かぐはしきえびをいれたり。山には、くるばう、ま

うくのゑかう、おはせだきものどもをつちにて、ことり、たまのえだなみたちたり。うみのつらに、しろくろき鶴四つみな志とにぬれて、そらなる鶴いろをばいとくろきも六つ、おほききれいの鶴のはどにて、老るがねをはらふくらにいさせたり。それにはさかうよろづのありがたき葉びははつ、まじれたり。そのつるに、

「くすりおふる山のふもとにすむつるのはをならべてもかへるひなどり」。いづくよりともなくて、夕ぐれのみぎれにかきすゑたり。すゝしの中納言の君かやうにもてあそび物のく癖に侍たてまつり給ふ。そのよもこれかれおほみあそびなどして、こよひはけぢかうしてなまめきたり。よわけぬればつとめておましをきかへ、例のこととして人々のさうぞくども癖などしてさぶらふ。おぼない志のすけはじめよりまゐりて例の御ゆどの、行事す。御湯殿はすはらのきみに、とのもりといふまゐる。老めやかなるをりにておまへにてこれかれ物がたりするついでに内侍のすけ聞ゆ、「こゝらの御うぶやにわひまうでくるなかに、ものおほくにぎは、しかりし事は、この御うぶや、な、のたからふりおもしろく心きもさかえしことはぬ宮の御うぶや。このたびのはいとあらまほしうきよらにて侍るめり」。兵衛督殿は、「おもしろき事はなくて、いかめしくにぎは、しき事はいみじく侍りき。かづけ物清らによるづの物はな、つのだからに去かへしていとさよらなりきや」といへば、ふぢつほは「一の宮の御方にてげにめづらしき心ちは去給ひけむかし。さる人の心にいれてゐたちて去給ひける事なれば」。内侍のすけ、「さてさらにもうまれおち給ひしすなはち父おとこのまひ去給ひし

よりはじめておもしろきことぞかぎりなく侍りし。大殿七日のよはまひ去給ふ。ことかんだちめすかし給ふと御ものた舞まひ、さんひかれなどせしは、さることはいづくにかさるかひありて、いぬ宮のいとをかしくぞおはする。このころはふきしてゐ給へり。人御ら侍んじてはたわらひにわらひ給ふ。おとこの君はとみの事あれどゐて遊ばせ給ひつ、ははたち給はず、よるひるに給ひぎにぞすゑたてまつり給へる」。げにいとつうくしきや、御方宮々々の御なかはいかある」と。すけ「いかばかりめでたきなかぞとは、さいつころこなたにおはしけるにまゐりけれど、物も給ひきこえ給はざりければ、五日六日いりふし給ひてこそはうらみたてまつり給ひしか。御あそびこれかれ去給ひしをたちぎ、しかば、御方のきんの御ことをこの舞すぢにあそばし、か、いとあやしかりしかな。おなじやうなるもの、ねとはいひながら、このさらはすぢことなることの、おまへにてつからまつりてはなむおち給ひしか」。さて宮はいかたのたまひし」ととひ給へば、「いかでか、かうはしくいもき、給はぬものを、まことにきこえたるならむとこそき、給ひしか」ときこゆれば、「よくもの給ひけるかな」ときこしめす。かうて、大伏宮はすはらの君に二夜とりおかせしものども去てまゐれり。はうらいの山を御らんじて、「いとわづらはしく去たるものかな。いづくのならむ」とのたまふ。そん王の君にかたらひてまゐらせ給へば、をかしと思ひつれども、岩の上になたてたるこの鶴どもをとりはなちつ、見給へば、ぢんのつるはいとおもくてとるて去とにぬる。「あなみみの物どもや」といひの、しり、白がねのはかねなれどことにおもくもわらず、はらにもの、

またにいれたり。かきつけたる歌はこがねのていしてあしでなかり。これはたがてぞとあつ
 まりて見給へどええり給はず。御方御らんじて「大将の御手にこそあめれ。わか君にとて手
 本あめりしおなじ手なめり」ときこえたまへば、おとゞげにさなめり。こと人のすべきわ
 ぎにはあらず。これを見えらぬやうなるはいと心なきわざかな。いかにせむ」とのたまひ
 て、御ひとりめして山のつち所々こゝろみさせ給へば、さらになぐひなきかをり懸す。つる
 のかも似るものなし。まろきかいほろほと見給へば、まやかうのへそながらほとばかりいた
 り。とうで、かをこゝろみ懸給へば、いとなつかしくかうばしきもの、例ににすあやしく、
 この物どものこゝろあるがごと物に似ざらむ。宰相中將「ある人々仁賢のまのびて申し、は
 いとありがたき所よ懸り治部卿のみかう物えてこがれたりとこそ申し、か」。おとゞげにさ
 よりなり。こぞのふゆ人にきかせておまへにて御文つかうまつりたまひき。かゝる世に似ぬ
 ものなみどみゆるは」などの給ふほどに、ま中納言殿より兵衛の君にとて御文あり。御覽
 せさせ給へば「いとあはれにうれしかりしことは、すなはちと思ふ給へしかど、世の人の心つ
 らまかせ給ひしかば、げにうたてもやと思ふ給へしほどに、ねんじきこえしるしにや、おも
 う給ふるやうにてたひらかにおはしますなるを、限りなくよろこびきこえさせつれど、もの
 さわがしきがうちに、いままでなり侍りにける人はむかしのみおもう給へられて、物もおほ
 え給へざりしかば、なにごとをきこえさせ侍らむ。いでや、
 こゝにてもきけるこゑを時鳥まどはれしかなまでの山路にとさきてなむひとりはへ

る。はらからなどをこそ女たよりにはそければ御らんずらむかし。おとゞもの、たまはせし
 やうに、昔まの君の御かはりにおもほしなまはのたまひし所へもまかりかへらむ侍り。
 今日あすのほどにまかりて、いまさらには時々はちからを」ときこえたり。御らんじて、兵衛
 に「かくかき給へ」とて書かせ給ふ。「かくなむときこえつれば、みづからきこえむすればま
 たはかたばかたしき心ちもせぬを、ひとは御すまひせいし聞えむとてなむ。なかはかたば
 なばまたはかへり給ふべから懸む。世の人のあるやうにてちかくものし給へかし。さらば
 思ひきこえつべしや」ときこえ給ひて、おくの方に「まがたひけむとかさざりせば、
 山べにしすむときかすばほとゝぎすなべて知らせぬこゑはせましや。あはれとき、し
 かば」とて給へれば、わたくしにも文書きてとらせつ。西の對の御うぶやしなひの物どもと
 りいでたれば、君たちいどみつゝと給へり。物にいれてをさめ給ふ。かくして中納言御文
 見給ひて「げにわが心ざしを見給へばこそかくものたまへ」などのたまふ。宰相まゐり給ひ
 て「宮にもうちにもきのふ参りて侍りしに、宮の御せうそこ、日頃ふるまゝに、いかにこゝろ
 ぼそく、今はかひなし、世に人のみなあるとにこそあめれ、たゞ例の人のあるやうにても
 したまへ、何かさてもものしたまふなどきこえなむ。宮の君、などおのれはみそかをと、こし
 人と文かよはしやはする、さすが人をこそはよきにはま給ふめれ、宰相かゝるをぞのたまふ
 ぞかし。たれかみそかなるわざする。うとからぬ御中にこそ。かくなのたまひそ、たれかは宮
 にある人のがざり、このぬす人をよしといふ人はさいはひのおにこそあめれ、ありとある

限りみこにもおはせよ、上らうにもあれ、おもてやは見え給へる。よるひるいりぬ給へれば、
 ば、宮人のはうへのもまものもわび事をこそすなりしか。いで、いにたれば院の御方もまう
 のぼり給ひて、たちぬる月よりはまる信りものし給はずなやみ給ふなり。こゝにも御ふみ給
 ふ御返り。御返りの給はざるいこさへてまなすなりにけむこそおんやうじ、かんばなき、神佛もな
 き世なめれ。こゝばくいの人のわれをもとにてせぬわざをすれ。いとだにいはすなりにける
 こそおなじくばこの宮をのこみ給はなむ。われこそはとおもひてうみつらねたるもの、
 くちあかすいおしよせつべく」と佐の給へば宰相の君「天下にいへつとよきの人のほゝとする
 や。なしたつぼと世をおもひためれどなにごとあらじ。ましてさらふいにはおはすとも、宮な
 どのほわが心よせもあらむ」との給へば、「いであなかま給へ」など腹立ち給ふを、中納言さ
 ゝ給ふをかたはらいたくおもほすほどに、民部卿おはして物がたりま給ふついでに「さいつ
 ころかの山もとにまうで、侍りき。かのの給ひおきしことゝも侍りし。文どもたてまつりて
 ういちわたり給ひぬときこえしかば、いまさらになににかはわかきひとはさもなど、いな
 む。御服いと重きたまへりき。かくふようにまなし奉りたまへるは如何にぞとて隠れ給ひ
 しかど、見奉りしかば、皆かたち人にこそは。年頃さばかり物を思しつゝ、服にいやつれま給
 へれど、さらぬ人にも多く勝りてなむ。女君はいとをかしげにて見えはしき形なむま給ひけ
 るに、御ぐしのいと長げなりしをかいこして見給へりしかば、いと麗しく覺えて七尺ばか
 りにぞありし。頭つき、顔のやういとめでたかりき。かゝる人を見給はで徒らになし給ふ、な

でふわざぞ。よき女は親のおもてをもおこす物にはあらずや。人のかたちにもいと
 き、給ひて、御みゝをもめこをもいたづらになし給はなむぞ。このおもほしはさし尺にか
 の君をとり給はじや。みぐるい。はやはやいともかくもま給へ」ときこえ給へば、「むかしは
 さても侍りぬべかりし。としいころまからねばいすれ侍りにけむ。今は人見給へむとも思
 ひ給へず、なほかのためたる所にいおかせ給ひて時々をとせ給へ。こゝにはをのたま
 かりてあつきほどいして、あるやうにまたがひて、まうでくば時々もいまうでこむか
 し」。民部卿「なにせむにかいま又かへり給ふべき。年ころさてもものし給へるをいおほやけわ
 たくしをしみ給ひ、まじろひのついでなどもつひに思ひいでられ給ひつゝ、いみじく悲
 しくなむ侍る。今はかくおやもおはしまさずなりぬるを、あまたあるなるこひにもあらず。
 いまはかうてもものし給ふぞ、たびのやうにおもほさるらむ。いまは侍る所もいとびんなく
 りにたり。むかしのやうにはあらでわらはべの侍る所にいりて見給ひて、おなじ所にもものし
 給へ。なにせむにかへり給ふべき」と申し給へば、「にび色のきぬげにや侍らむといとむつか
 しく侍れば、ゆなどわかさせてものせむとなり。いま侍りしやうにはあらで、京にもまうで
 きなむや」とのたまへば、民部卿、
 「今はかくのへ見いし人もなきものを君さへはかへゆかすもあらなむ」とのたまへば、中
 納言の君、
 「わがゆるとなげさしみちにわたれかし君がまるべにならむとぞおもふ」ときこえ給へ

ば、宰相、

「なき人のみちのゑるべに君なくばおくれわれもなにかにまどはむ」とのたまふを、民部卿の君きゝて、

「ありしともかゝらばとのみなげ仕かれて君にもつひにおくれぬるかな」と聞え給ふ。中納言は御せんなどしていで給ひぬ。民部卿も宰相も、宮の君に「いかに心細くおもはずらむ。いまたがひにまばまばまらむ。とのぬ人なども、さらせてを」と言てとのへおはしぬ。かくて六仁目になりぬ。民部卿そで君の御むかへし給はむとて、三條殿にもし給ひて、そこなはれたるところつくるはせ、池はらはせ、御てうどいもはみなわれは、おき所あるべきやうにまつらはせ、みすかけさせ給ふ。びやうぶ、御帳よりはじめて新しくきよげなり。この殿はひとまちはひはだ、このおと、いたらう、わた殿、いたやどもあまたくらなどあり。いけなど^三舞ちかくをかしげなり。三日まで物まゐるべきことなど人々にのたまひて、御車三つ御せんなどあまたして、かのふもとにおはしてちかくなれば、我さき^四たちておはしてきこえ給ふ。「さきには日のくれにしかばなむ。いそぎてさらばわたらせ給へとてなむ。いとあつくるしく侍れども、今日なりでよろしき日の侍らざりつればまゐりさつるを^五とさこえ給へば」「なでふ心をか、たゞおはすらむまゝにて人見るべきところに^六侍らぬを」と聞え給へば、「さらばさらばはやめておはしましねかし。わびても世をうしといひぬめりしをいづち^七にこそ^八聞え給へば」など思ふことやいでこむ。わたらせ給ふまじきさまにの給へば、い

かなることぞ^九。北の方^{一〇}こゝには^{一一}何しにかは。これよりふかくとこそは、世の中の心うく思ひ給へられしかばこそ。年ごろかうてもうとからぬひと所は、かくこゝにもいかでかものし給はむ。この御うしろみま給ふとおぼしてこそは、かく山里にはこの君をすまはせ奉り給ふべき。さりとともこゝにはおとらじ。そがうちにはべる^{一二}中納言の君おはせよと、こゝよくまもりて人にこぼたせてつかうまつれと」と仰せたまひて、われも御車にておはしぬ。北の方はそいへにおほさるれど、この君をかくだにあらせむやとおぼしておはして見給へば、いとおもまろくひろくて、てうどいも^{一三}なまき物なし。いとさよげにてはひいりて見給ふに、物うがり給ひつれど、かうてもありぬべしと見給ふ。おまし所はこの^{一四}女のおはすべき^{一五}ことさままじき^{一六}なり。おと^{一七}のいでのかたがたならむとおぼす。人々のさうしなどはいとよくてあり。みくらにはここの、おかせ給へるぬのせになどあり。こまかなるものなどはなし。御前の物などはのたまひおきたる人々参る。民部卿は「三日すぎしてまゐらむ」とてとながらかへり給ひぬ。かうて三日すぎぬれば、新宰相もろともにおはして、「いとめやすくおはしぬ。いま一つの事^{一八}、いかでせさせたまつりてしが」などいふ^{一九}給ふ。物など心してたてまつり給ふ。三條殿にかくて^{二〇}ふちつぼには御心ちもいまはさかだち給ひにたれど^{二一}大將殿はなほおはしましていたはりたてまつり給へばにやあらむ、ことにそこなはれ給はず。つややかにて^{二二}なりまさり給ひて、めでたくおはす。綾のかいぬりのひとへがさぬ、ふたあゐのおり物のきぬぬ^{二三}かけておはするを、おと^{二四}見たてまつり給

ふ。君達のおはするに、「わかきぬしたちにならひ給へ。子もちはかくぞいたはりなすよ」とのたまふ。誰もほゝゑみしておはさうす。宰相の君「人がらにこそものかし給ふめれ」。おとゞ「わが御方もかくおそろしげなる人ぞ、ちつくりいづれ給へれど、さりつけにやは。うちのなごよ」とのたまひて、わか宮の御かたを見やり給へば、やんどとなき人まゐりつどひて、ひびきぞろたちてこなたなどにもわたり給はず。いとさきさらしくおはするを、いかなる人か、人々のさ思ひて、かくはあめるをはぢや見むすらむとおぼすほどに、宮より、「日頃はいかゞうちへ、こゝにはなやましくなむあれば、またえたいめんせずやと思ふにぞ任こ、侍にはけしうは物し給はじを、まもつぼねにやはうしろめたくはこそ。人もろともには、いでや、

君をまつわがことわれを思ひせばいままでこゝにござらましやは。思ふこそねたくまかでられし時もはかるやうにて、かくかすかにもおもはれざめれば、まばしはものをしと思へどあやしく心よりほかにてとまむあるを、御方あなやしや、たゞにてやは。れいのにくげごととまゑ給ふめり。あないとほしとて、「このころは誰々かものし給ふ。いづくにか御使は侍る侍りか。うちわたりにはなに事かある」との給はすれば、「このころは例の御文あそばしなどはせさせ給はで、御心なやましとてまうのほり給ふ事は、みなみ侍の御方こそはそここにさぶらふ。左衛門といふ人忍びて申し、かば、五月ばかりより御けしきありてなやませ給ふとなむ申しさぶらふ」。御使は「ひとひまゐり侍りしかど申すまじきことなれど、うちわたりにはなしつばの御方のおはんせうそこまゑ給へることをなむ、やんどとなきところ

どころよろこばせ給ふなる。ある所にはものゝすぢと言ふものたえぬと見れど、つひにはいできぬる物なりけり。かゝるをりにしわはせ給へる事とて、つねにある所には御ふみやよはさせ給ふとなむうけたまはる。かの御方もとくまゐり給へと侍るなるを」ときこゆ。宮の御かへり「うけたまはりぬ。なやましげにのたまふなるはいかやうにかいともしもきこえさせ、こゝにもなほいとくるしくなむ侍れば、たてまつり、まはせらぬことや。まつか侍るか侍るは、

またばよりまたより色はかはりつ、まつとはさらにははずもあらなむ」とて、たてまつり給ふ。「つるの事はおとゞそらごにあらじ。うちのまゝささいとおそく、こゝろかしこくおはし給ふ。やんどとなき人々御こしなかりさるればかならずさ思すなむらむ。右衛大臣、大臣、公卿たち心をひとつに例をひきてこれをと申さむには、なにのうたがひかあらむ。われはうまにまじりたらむうしのやうにてなに事をかは。民部卿ばかりこそは大きおとゞだにもものし給はましかばこそは、ものゝあしきにやあらむ。をりしもこそあれ、ものし給はずこともとてあるは下らうなり。ぬんこむとてものし給ふも、わがすぢをとおぼさむだり侍なり。女をばなにとかは心うしと思ひて、こともをあらせてまつらすとも、わかみやまめかにいたづらにならぬ。なにのめんぼくかあらむ。それはほみな思ひたゝむかし。いみじきはぢをもおいのなみだに見つるかな。おほきおとゞのみけしきに給は見むと思へど、をとこはまたしうものせぬ」との給へば、ふぢつば「なにかいとむつましうはとも

おもひます。まことにさだめはてられぬ。さこしめすとも夢ばかりものしきけしきに、なこのをりに人々の御志どもを見給へ。人の志のみこそおはれにもつらうもわれ。年ごろかくてものし給へるに、さもあらでしもやと思ふをりに、かゝることのあるはえさるまじき程にこそは、またこにておはするにはなどかは御わがほとけをつるのこのといふ事もあるをさこしめしたるけしきゆめ人々に見え給ふな」ときこえ給へば、「あな御いみじや、わか君をばいかでかたゞみこにては見奉らむ。かゝるおほせごととに御よすなる御心をや」とほろほろとなき給ふ。左衛門督さむらひなにかはおほさじ。世にさるやう侍らじ。こと人々は知らず、おほきおほどのばらなるをえおぼしすおぼし。いづくにもいかで見給ふれば、おろそかなる御中ともにも侍らざめり。いかでか、御ためにうしろめたき心は、大宮はこれは御さるものにてこの宮のとこみ給へらむ時までさだまらずばおぼしむつかしからむ。おんのせちにきこえ給はむことは、いかでか」。おとゞ「それは天下に御まなこ七つ八つおぼし給へる男一たびに三つ四つうまれ給ふとも、さかしらさしいらへせむとす。よをまつりおぼしぢなれ給へるみを、うひだちおぼしにも陛下みかどのもろくちと申す事はえいなび給はぬことなり。そのかみむこもまうとも心を一つにて、うれへそうせぢむ。これこそむつかしけれ。それもよう思ふ時は女こそあればさりとともと思ふものを」などの給ひて、また宮より御文あり、「心ゆかぬやうにありければ、あやしきおぼしにたちかへり、なにとさゝ給へるやうやある。こゝにはさらにおもほえずなむおぼし。人々にせうぞくまたりしにこそおぼし時々もそれもおぼしこのころはなやましくて物せせず。えだの

とりくおぼしさだにまたすともなるあなすおぼしらや、

うちはおぼしへてまつのみ休まける佳吉はまたばもえだも何かかはらむとのみをおぼし、おのれたひらかにてぞなに事もかくてはえこそ」とのたまへれば、おとゞ見給ひて「かくのたまふめるをまゐり給へかし。御方なにしにかなしつばまゐり給はなむおぼし、人すくなればこそあらめ」とて御かへり、

「み山木のまたにはかせいはやくともえだ木はつゆもすぐなとぞおもふ。かすならぬつにみのふちせをば思ひ給へずや」とのみきこえ給ふ。かくてこのうまれ給へるみこをば今宮とおぼしきこゆ。御湯どのまゐりてねおき給へるを大宮はいだき給ひて、「をかしくもおはするかな。唯わか宮にこそあめれ。これはわが子にしたてまつらむ」。こゝは名にしおぼし。かくて一の宮五月よりはらみ給ひぬ。こたみいたくなやみ給へど、大將の君にはさも知らせ給はず。唯御心ちなやみ給ふやうにてあれば、おもほしさをわきて、まつり、はらへせさせ、所々にもみずほふ行はせ給ひて、ありさおぼし給はず。女御の君もおはしまさねば、夜晝くすし、おんやうじ、けんざなどめしつ、おはしますに、彈正の宮と御物語を給ふ。「ふぢつほのさとにもものし給ふときどきまうで、ものまうさむと思へども、この月ごろは殿などものし給ふめれば、はじめまうでたりしに、ものさわがしくて物も申さでまうでさなき。人の志はいとよく見まり給へるにこそあめれ。新中納言いだし給ふを見れば、まろが志をまゐり給はぬにやあらむとこそかたり給ひしか」。大宮「さることありとのたまひけれ」とおぼしこえ給へば、おとゞ宮「かひなの信

事や、あまりあなづられてはあやまちせられ給はむに、誰も誰も何わざかま給はむ。をさなかりければこそさりぬべき折ありけれと、人々の心をくみつゝ、今ならましかばかくねたき心ちせましや。女君「あなむくつげ、かくは御の給ふ人をばいたづらになさむとおほすか、いとこの見ゆる物さぞあらしむといふものを、たはぶれにてもあなゆしや」との給へば、「よくの給ふなめり。心ある人の思ふことをそしるかし。たゞいまかくあるほどなめれば、まめやかにばさも思はず、世の中さたまりなむとき、大臣たかきくらぬにもし給ふとも、にくもてなし給ふらむ。はいとげむとす」との給へば、いみじくおぢ給ふ。かゝるほどに大將入り給ひて、「今のほどはくすしどもにとひ侍れば、ねちなどにやおはすらむとなむ、物とふにはりやらけとぞ。さればまゐんごん院の律師のもとにせうそこいひつかはしつ。参りこば御まんせさせたまつらむ。三條よりいふべき事侍りてたびたび侍るを、たゞ今のまことにまかりていととくまうでさなむとてまかりぬ。めし侍りけるをすなはちまゐらむとせしかど、かしこにはんべる人の目頃いたくなやみ給へば、女御などはものし給はぬほどなれば、また譲る人なくてえさぶらはず侍りつる」。北の方「えさらけにうけたまはらざりけり。いかやうにかなどかかくなどのたまはざりし。参りて見たてまつらましものを」。大將「まらざりやうけなどいひて物まぬらすなむありつるを、きのふ今日はおもくなりてなむ」。おと「いとほしきかな、まゐるべうこそあめれ。もつしききにありしすぢにやあらむ」ときこえ給ふ。「さも見え侍らず。さりしときもかくはものし給はざりき。さてもほどなくばいか」ときこ

え給ふ。おと「せうそこ申したりしは、きさいの宮よりの給ふことなむありし。いかなることにかおもふ時にはさもありぬべきことなれど、よのみだれとなり、さわがしかりぬべきうち、天下にまさる心ありとたれたれもおもほえしとなむ。いかなることぞと申さむとてなり。宮もかしこをまゐらすとの給ふめると、こよひなむまゐらせむと思ふ。ふぢつほまゐり給ひなば、まやうそくのたき物のやうなるべし。私たちの御まへにねすみははしもつかうまづれとてなむ」とのたまへば、「いかなるべきことにか侍らむ。なかたゞはいかでかとり申さむ。殿の御ためじやことなき事なり。それによりて侍らむところにおもひうとまれむもくるしうなむ、たいきさいの宮のたまはむに難たてまつり給へ。ひさうと見ることも侍らば、いとよきことなむ」ときこえ給へば、「いと身のためにはいとよかる侍らば、おほかたさわがしかるべければ、こゝにもさぞ思ふや、さらばはやものせられよ。つとめてそこらにもまうでむ」とのたまへば、大將かへり給ひぬ。なしつば、御車二十ばかりして御せんとおほくて参り給ひぬ。うまれ給へる宮は母宮のもとにおはす。三條殿に御かくて大將かへり給ひて、宮に「今のまはいかゝいふべき事ありと侍りしかばまかりたりつるに、やんごとなきことにも申されつれど、ひがいらへをなむしてまうできぬる。さるはなしつばこよひぞまゐられける。されどそなたにもまからずなりぬ。里人もいままゐらむ」ときこえ給ふほどに、「律師まゐり給へり」と申せば、なほ「こなたに」とてすのこにおましまかせてさうじ入れ給ふ。「これははづかしき人ぞや」とて直衣さうぞくにいで給ふ。律師はあ

やのよそひいとさきよらにて参り給へり。すがたかほかしらつきいとめでたう、御とものものどもさうぞくさよらに、かたちよき十人ばかり、わかほし十人、大どろし三十人ばかり、びらうげの車のあたらしきにのりてまゐり給へり。中門よりだいどうしはとめてさぶらひ、はふし、わらはしていり給ひてゐ給へり。おとゞ「宮の中などにてはたいめんたまはれど、そのこと、なくてはえとり申さぬ事をなむ、さるは昔より心ざし侍れど、おねんにをこたる律師山伏もいかでかと心ざし侍れど、殿のおはせごとたまはらぬをなげき侍るに、たまたまおはせ給へれば」と申し給ふ。おとゞいとうれしくて、「こゝにも、かすにおぼさねばや。とはせ給はざらむと思ひ給ひつるに、うちいめしなどにも参り給ふとき、おほきをいかならむと思ひ給へるに、かくものし給へるをなむせうそさこえたりつるは、こゝにたちぬる月のつごもりなやみ給へるを、日ごろおもくなりまさりてなむ。これかれにもとはせ侍れば、さけなど申させむなどおこなはせ給ふ侍れど、なほ心もとなきを、唯今はあらはれたるやしほさけにこそはとてなむ。一夜二夜ばかりものせさせ給へと、さこえ給ふ心にはひさしくさふらひなむ。はとけに疑のたまはするなむいとおそろしくてまかりにげぬべく、このごろは所々にかくなむ。后宮のひめ宮もかくなむなやませ給ひて、おはせ侍りつれど、おとゞ殿にをとてなむ」などさこえ給ふ。大將おやの御もとより「たにさりけむ御心をおそろしや、おくのかたにおはしませむとて、まつらはせていられたてまつらせ給ひつ。かくてまうのほり給へ」とあり。南のひさしによき御びやうぶたてたり。例のそらたき物などしてまゐり給

ふ。かくて宮に内侍のすけの申し給ふ、「いとほらぎたなくをさなくおはします。これは何のつみにてある。御心ちにもあらず、おとゞはさわき給ふ。それはとまれかうまれ、いきてはたらき給ふはとけといはれ給ふ。かちまゐり給へば、ともかうもこそあれ。かゝ人はさる心算してこそかぢまゐれ、いとおそろし。おとゞにさこえむ」と申せば、宮に心算とも知らず、いと苦しきはまぬべきにこそあんめれ」とのたまへば、「おなさがなや」などむつかり給へり。律師はかぢまゐり給ふ。さらにはやきだらによます。わらはより聲かぎりなくありし人なれば、まいていとたふとし。曉になりてこの世の中のこと、とさまかうさまに、みな承り見たまへるを、この御だらにをのみなむおとゞにうけたまはれど、またうけたまはらざりつるを、げにいとたふとくおはしけり。「いかで秋ふかゝらむはどに、このはのふり落ち、風のご心ほそからむと、人のさかざらむ山里にて、きんにおはせてうけたまはりにしかな」と律師「いとたふとさおはせむ」とも侍るかな。唯これのみなむ夜晝はとけかみにも申しなむかし。ほのかにうけたまはりて、おほらはこれによりてまかりいでしなり。されどおはせむとに、たにえうけたまはらざりつれば、思ひ給へなげきつるを、かく仰せらるれば、思のかなひ侍るなりとなむ。わびても御ことのねはいとらけたまはらまほしく、だらにもえつかうまつるまじきにぞ思ひ給ひわびぬる。きんぞえつかうまつりあはすまじかなる。そもそものあやしく御おこなひにつき給ひけるは、などてにて侍りけむ。かすかにて見たてまつり侍りしは、いとこそかなしう侍りしか。山にまかりこもり

しゆゑは、いとみじきことの侍りけるをさらしに知り給へざりき。たゞすゞるにものかなしく世には侍るまじき心ちのせしかば、おやをも見すて、まかりいでにし。その人まゝ母に侍りし侍人なり。みやづかへし侍りし程にいふ、かく^御はわりしを、そのことびんなかりしかば、さかぬやうにて侍りしに、ゑんじたるにやありけむ。おやにわやしきことを申しけるをえ知らで思ひ^給へなげきしを、ふいにことやうにて、わひて侍りしになどかくはなりにたるどととひ侍りしかば、まゝこなりし人のために、おやのたからとするおびをとりかくしてこれをとらずといひ、御門かたぶけたてまつらむとすとそうしけりとなむさ^はかせ侍ると申し、を、山ぶしの聲にさゝなし侍りて、その日つひにのちのことまでさいつころ知り侍りにき。この事をさゝ侍りしかば、いとようにげ^けりとなむ、さるをさゝ給ひてせめて^御の給はざりけるおやのみ心なむいとかなしき」と申し給ふ。大將「いとおそろしかりける人の心にこそは。そのことは左のおとゞのたまひしや。さる事ありけるおびは、なかつたの^御もとに侍る。このおとゞうけ給はら^御むとて、そこにものし給はらと思ひしを、今はたれにかはとて院になむたてまつら^御れたりけるを、うちになむわたりて侍り^御けるを、こぞのまはすに御文つかうまつりしにろくになむ賜はりて侍り。げ^御によりなく^御いみじきたからにこそはかゝるものをささこえなしけむがおそろしき」。律師「さるわざはひになむわたりて侍りし」。大將「そのおびはものし給はましかば、御物がたり^御とぞならましか、たてまつりてむとなむ思ひ給ふる」。律師「山ぶしはなにのれうにかし侍らむ。そうのぐにこゝのおびさし

侍らばこそあらめ。もて侍らましかば、とかくのこと殿ばらにこそたてまつらましか」。大將「たゞそれかと思給へ」とて見せたてまつり給へば、律師見給ひていみじく泣き給ふ。「このおび^御は故千陰^御のないえんにまかりいで給ふとて、さうぞくし給ひしになむ見給ひし」とさこゆ。大將このか^御すかに侍りし少將なか^御よりの入道して侍るとぶらひに、そのときのおなじこゑの人なり。これかれ今はなかつたもかくか^御だちめにて侍り。あるは頭ななどにても侍りける。い^御しむ^御とぶらひにまからむとす。そのかみ御せんにたまはり^御てあそび侍りしよろこび申し給ふときはまりなし。かくてわけぬれば御かたへおり給ひぬ。おとゞ御心とめてけいしどもにおほせ給ひて、御せんより^御物たてまつれ給へりし、かぢまるり給ふ。かくて^御みやわづらひ給ふとて右大臣殿まゐり給へり。宮、左大將殿、^御いそぎて御むかへしてかへり給ふ^御。左の大^御殿、右の大^御殿にさこえ給ふ、「こゝにはなやませ給ふことのおはしける。いかやうにかとうけたまはりに^御なむまゐりきつる」。右のおとゞ「まさよりもさうけたまはりて^御なむ参りきつる。さいつころよりかくうけたまはれどけしうはおはせずとありしを、この山ぶりの律師などめされけるを^御おどろきてなむ。ことにそこばかある御心ちにはあらで、おこり給ふをりなどして物まゐらすとなむ。かたへはあつけなど^御にやとて見給へ侍る。日頃はかくごくねちのころに侍れば、くるしうてうちにもまゐり侍らず」。左のおとゞ「かねまさもひさしうまゐり侍らず。さるは御くにゆづらむことちかくなり侍るを、宮へもまゐる人々侍るをいとあつく侍りてかた時きたないしのひさいれて^御くも

てきたり」とてかくして御返り事ごへりごと「かしこまりてうけたまはらぬ。さのふは左のおとこま
 り給ひていそがしきこえ給ひしが、いととくいいそでものし給ひしなり。の給はせたること
 はわなおそろしや。宮におはします時よりも宮たちがきの事をはしまさひて、よるは御めぐ
 りにおはしますさふめればいそ、これかれたにいそ近くもまゐらずなむ。いとかたじけなくたび
 におはしますさなるを、はやかへらせ給ひね。人にけしきみえさせ給ふな。さて賜はせた
 るあなかたじけなや。かくみくしげ殿をせいそせ給ふをなむ。いかでこのこそいそに女もかけさ
 せてまつりてしがなとぞ人知れずまめやかに宮にわたらせ給ひなむ」ときこえさせつ。
 かくて右の大殿、左衛門督の君、くら人の少將、宮あこのまいそうなどまゐり給へり。宮たちお
 とたち「いざかゝる所にてかくひやういたはらむ」とのたまひて、「をかしまりのかゝり
 かなとけうある」とていそまりあそばす。みな上いそゆなり。人々さうぞくま給へり。宮たちおと
 いたちは直衣たてまつれり。大將のおとこ、くら人の少將まりも上じゆ、さまもよく見ゆ。宮
 たちあやしのわざやとて御覽す。くれぬればみないり給ひぬ。宮たちは二の宮の御かたにい
 り給ひぬ。大將殿いそ宮に「今日は例の風のいもいりおまへなる人々、ましてけふはいと物さ
 よくてくらさせ給ひぬ」ときこゆれば、「あなおそろしや、ずるばんしてまゐり給へ」と、御目
 ふたぎて、みにいそだにいそみ給はねば、いぬ宮ひざにすゑてさしく、めて参りて、「御としいそを
 も見給ふるかな」とのたまへば、宮あつし、すいそのこに」とのたまへば、「よべをだに思ふ所に
 こよひのぬねぶりをよけうなきや」との給ひてふし給ひて、「かの御方にいざとく人さぶら

へさくいそやうあり」とのたまへば、めのとに胸つぶれていかでかいそき、給へらむと、くら人の
 少將もすのこに給ひてかの入見え給へれば、右のおとこいそとほくてさしいで給ふ。「あなか
 しこや、ひといぬないそといとおそろしきつは物ありといそなり。ほかにては知らず、こゝにては
 いとさがないそかいそらむ」との給へば、宮たち御目もさめておき居給ひぬ。めのといそはみもひえ使
 はて、われにもあらで居たり。かくて曉になり、みかうしもおろさず。二の宮の御方といそこな
 たとは高き御屏風たてたり。おはするところちかくては御几帳たてたり。大將このをり宮達
 見たてまつらではいかでかと思ひて、一の宮いとよく御とのいそもりたるに、けうそこをふみ
 たて、御びやうぶのかみよりのぞけば、わけぬとおぼえて、男宮たちはみな御とのいそもりた
 り。二の宮は御几帳のかたはいそらはこたちうちかけてまたおろさずおき給へて、いさゝかな
 る事せむとおぼして入り給へるを、いとよく見えいそたてまつり給ふ。まろさあや一かさねた
 てまつりていそ、御ぐしなどもおほとのいそもりふくだめたれど、いとけぢかくうつくしげなり
 と見る。ひめ宮もおきわがり給へるを、これはまたちひさくかたなりにてあてなり。よくも
 うみあつめたまへるみこたちかなと見て居給ひぬ。かくてその日のゆふがたにいそかへり給
 ひぬ。をとこ宮たちはあるじのおとこの御うま、たかなどたてまつり給ふ。女宮たちにはこ
 がねのやつこのはこに、よろづのありがたきものども入れて、一の宮よりはじめたてまつり
 て、大宮はいそのちひさきによべの物いれてたてまつり給ふ。めのとたちにはさうぞくひと
 くだりつゝたまふ。さ達の中にかつらとの、などいささるいそかへり給ひて右のおとこ宮

に御はらへは、大將に御車など傳いつ、ばかりしてせさせたまつり給ふ。との、わか君などとしていで給ひてせうえうなどをかしくし給ひて、かへり給ひて二日ばかりありて、中宮ひんがしがはに車三つばかりしていで給ふ。おとまはいで給はず。むつましき人々していで給ふ。あふみのかみにのたまふ、「このひんがし河に御はらへしにものすなるを、ひんがし河のみづやにかゝらむあたり車たてさせて、あゆなどくふべきやうに物せさせ給へし。あやしうわかきこのやうに、人の御するにまたがひたる人なれば心ぐるしくなむ」とていたしたて給ひてかへり給ひぬ。三條殿かくてふぢつほもから御さきに御はらへ給はむとて、大殿ももろともにきみたちの御ともの人々多かり。御車ひきつゝくるほどに、大宮「あなたの御車もひとつに」との給へば、藤つぼ「いかでまづ」との給ふほどに、御車どもにだにひきつゝけてたちわづらふ。おとまははかれをうながせとて、藤つぼの御車を一にたてさせ給へば、あみなみないとあはれに思ひへては、からさきにおはしまして、御はらへいかめしうま給ひて、かへり給ひぬ。大殿もかへり給ひぬ。こなたには例のはんむすびてきんだちのどのぬま給ふ。かくてへ給ふほどに、春宮よりをそくまわり給ふとて、ある時はあはれに心ぐるしげに、ある時はにくげにゑん給ふにまたかひて御使あり。その御つかひのくら人申すやう「梨つぼのなんはうにはぬ給ふべきと申すなりにためり。まつりにもまばしはまつらうのぼり給ふ。ひるはこつとにわたらせ給はず。日ころはことに御あそびもま給はず」ときこゆれば、ある時はひとくたり二くたりときこえ給ふ。ある時はきこえ給はず。かゝればみな人の

申す、「あなことをやうや、又なきれいをもまいで給ふかな。かくあなづられ給ふ事」とそしり申す。殿には大殿の御方にも、ふぢつぼの御方にも、今より宮づかさは、殿上人たちはきといき申す人おほかり。わか宮の御方には人々まわりこえつ、おほやけのやうになりておはしますをみたまつり給ふまゝにおぼしなげく事かぎりなく、山々寺々にすほふ行はせ、神ほとけに申し給ふほど、七月のなかの十日になりぬ。ある夕ぐれに彈正宮、西のたいにまわり給ひて御物がたりきこえ給ふ、「かくてもものし給ふほどに志をもきこえまほしけれども物さわがしうものし給ふれば、いとおとなしくなりまさり給ふなりし。心ちもみづからきこえむとせしをあえもの、ほどすしつるになむ」。御いらへ「あえものは年へだて、こそはこゝに御もつれづれと侍るを、たれだれにもきこえまほしけれとみなこそおほしわすれにたれ」。宮「さらにわすれきこえず。かくて侍るをばなにの心ありてとかおほす。」「いでなほ心にくくおはしますとこそは」。宮「このあまたま給ふわざ、時々はこゝにもまて給ひつ、はつかにかくてやは」。君「いと見まほしくてあまたものせらるるを、なにかは」。宮「まめやかにはとしごろかくて侍るを、こゝかしこにもものせよといふ人侍れば、御心のつらかりしにのみわすれがたくて、さやうのこゝ、御ももおもほえぬに、なほむかしのやうにもおもほさで、まのびてまるとにはま給ひなむや」とのたまへば、「あやし、まのびずともさて知らぬ人にやは。かくきこえ承るもうとからねばこそ」など聞え給ふほどに、左大辨の君「いとこゝとこゝとし」とてまゐり給へば、宮「あなにくや、このうるはし物はなに

しにくるぞ」とときこえさし給ひつ。かくて新中納言「藤つぼものし給ふことわりしを、かくてあらばものしともぞおぼす」とてをのよりものし給ひて「いとうれしくものし給へるを、そくおはせば、御むかへにまうでむとなむ。こゝはいとかくびんなきを、日ごろ侍る所にもこのときこえしやうに、うちにいりておはしませ」とときこえ給へば、中納言「なにかこゝにもおはしてきこえしやうに、うちにいりておはしませ」とときこえ給へば、中納言「なにかこゝにもおはばしは、おのせむ侍、たづねむとのたまひし人はいかゞは」とときこえ給へば、「いとあつく侍りつれば、ほどとほくてはものせず、今すこしすくくなりなむ時に」とつれなく聞え給ひて、なほ「いざ給へ」とて一つ車にておはす。おりてもろともに入りおはするを、北の方など見給ひておどろきて、御几帳たてなほしなごす。まづ民部卿入り給ひて「あな見ぐるし。こはなぞ」とてみすわけ給ひつ。あるじたちつゝいゝ給ひて、「なほこゝにははぢたてまつる人もなし」とときこえ給へど、つゝみてえ入り給はず。民部卿「なほいらせ給へ。をんなだにはぢなきこえぬ所にはかひなく」とくどきこえ給ひて、御わらふださしいで給へば、いとまぶぶに「いり給ひて、いとまめやかに見給へば、おくの方にちひさき几帳たて、人あり。はしらのもとに若き女のいとまよらなるむたり。中納言「いとわやしくむつまし」と言ひながら、つれなくもぬ給へるかな、これは藤つぼの御あねなればかくよきぞと見むたり。姫君は、とまれかうまれ、わがおやに見えたてまつらむ、おやの御かほ見むとおもはしむ侍て、をぢおと見給ふをもものにもおもはしたらで、さしむかひて給へり。中納言はかたちのい

と美しくげなるまばられ給へる給へり。女君はみやしり給ふとはぢたれば、たれもものたまはず。ひめ君、父君のえ見知り給はぬをいとかなしとおもほして、えねんじ給はでつづつと泣き給ふを、民部卿いとわはれと見給ひて「おもほしいですや」とときこえ給へば、中納言いとまめにてもものたまはず。民部卿「この君をいとあさましくかくなり給ふまで見たてまつり給はねば、おもひわびてかくおはしませ給せつるなり。今かくておはしませ、世の人のあらぬやうにてはえながくはものし給はじと、御ぐしもかくぞなりたるとて、かきいで、見せ奉り給ひて、今一所もかくこゝに、天下に世にもとめ給ふともまざる人しもえ侍らじ。さねまさらを人とおぼすものならば、なほかくてもものし給へ」とときこえ給ふ。としごろ見ざりつる程におとなにこそは」との給ふまゝに泣き給ふ。むかしの人々あつまりてなくさま、こきみの御めのとまへなるを見給ひても中納言いみじくなき給ふ。さてもあやしう心にもあらできたるかなと思ひ給へり。民部卿「こどの、おはしまし、時こそめおやのこと折々の御すましの事なども、みくちいれ給ひしかど、今は女はらからとておはするはさやうに心まらひてもものし給はず。さねまさらがとくはみづからの事にもかなふ人し侍らねば、志はありながらえおぼしきやうにもつかうまつらじ。かく世の中をおぼしはなれにためれば、は、君はよしなまら給ひそ、この君を御うしろみたてよろづの事さやうにおもはしてもものし給ふ」などときこえ給ひて、御ともの人々所々にすゑさせ給ひて、もの給はせなどして、「とはくよりおはしましつるまゝにていいでたてまつるなり。ものまゐ

れ」との給へば、くろぎ御たひひとよろひ、まやうじの物いときよらにして、ものまゐりつからまつる人、そで君、まさご君の御めのと、おとなびにたれどかたちまうとくにてあり。わらはなりし人に、おとなになりてわかうどにては、わらあり。わらはばかりぞまらぬはあ。かくてもものまゐり、御みきなどまゐりて、山里よりわたり給ひし、ひまつらひおかれたる御かたに、あなたにまゐらせ給ひて、「いとあつきにやすませ給へ」ときこえ給ひて、いれたてまつり給ふ。むかしもてつかひ給ひしてうどいさ、かにてならひ、ま給ひし、ほらごなどとり、ちらし給ふものなくし給ひし、なごして給ひしまゝに、こと御てうどのきよらなるあまたそはりたれば、なまき物なくまつらひおかれたり。中納言なはありがたき心ばえわりかし。おやもなく、われをのみたのみたりし、下は人の、こどもも、たりしを見すて、年ごろありつるにかくひとつもうしなはでありけるなど見給ふ。こなたにもむかし見給ひし人々の参りて御ぞとりかけ、御うちまゐらば、たゞむかしのやうなり。民部卿はむすめにむことりまたらむやうにわたちて、とのへもものし給はで、たゞこの君の事をいそぎ給ふ。新宰相もいそぎ参り給ひて、「さねよりはとのかくれ給ひてのち、よるひるかなしき事を思ひ給へなげきつるに、けふなむその心もわすれてうれしう思ひ給へば、なほかくてへ給はす、おなじきはらからときこゆとも、おやぎみとつかうまつらむとて、ふた所ながら、こゝにもし給ふ。かしづきつかうまつり給ひつ、二三日へ給へど、北の方にもひめ君にもまたものきこえ給はず。かゝる事をうちにも春宮に、まきこしめして、らうた

くいたづらになりぬとき、つるを、今は宮づかへせむと思ふにやあらむ」との給ふ。左のおとゞいみじうよろこび給ふ。年ごろもきこえつるを、わかあひてさて物せよといひしかばにやあらむとおもはず。中納言世の人ふちつぼなども心ならずやおもはずらむとおぼして、四日ばかりありて、ゆふさりつかたこなたにわたり給ひて、ひめ君にきこえ給ふ。いとめづらしくたいめんまたりしかど、見たてまつりしにもおのが心がらとはいひながら、よろづの事あはれにおぼえしかば、まめやかにと思ひてなむ。としごろいかでかいますらかはとあはれま、かき物しにければ、それも心うくおぼえて、このわたりにはおもひいでられむによりてなむ、心うくおぼえて、おほくはえなごきこえ給ふ。姫君、ともかくももの給はで、たゞつくづくと泣き給へば、「なほとしごろは、ありつらむものがたりをこそせめ」などの給へば、「としごろこひしくかなしくのみおぼえ給へるを、からうじてたいめん給はりたれば、ゆめの心ちして」なごきこえ給へば、「世の中にえひさしかるまじき心ちのせしかば、ほふしにもなりなむと思ひて、山ごと年ごろは、民部卿かなたには物し給ふ所にてたづねきこえむばかりなかりしかば、をりふしに思ひいでつ、いかでこのみ思ひながらとしごろえ」など聞え給へば、「もみぢ見むとてまらぬ人もせし時にまうでたりし所なむ。そこに殿かくれ給ひしほどに、四の君のたまふになむ。さなりとはいとさよはなれてはありけむなむ」とおほくの御物がたりま給ひて、は、君は「いづかたにぞ物きこえむ」ときこえ給へば、女君よろこびて北の^のおもてにおはする所にまうで給ひて聞え給へば、北の方「いか^かで

「いかは」ときこえ給へば、民部卿の「かけのごとそひて」との給ふをも、かうの給ふをもき
 給ひて、「わかほとけなどかうはの給ふせうれそし給はずともまうで、たいめん玄給へ
 とこそは思ひつれ。御上を思ひきこゆるにしもあらず。この君の世にをしまれていたづらに
 なり給へば、とさまかうさまにたばかりきこゆるなり。はやおはしてなにも心なくかたらひき
 こえ給へ。おぼろげに思ひてや。かうきこゆ」と申し給へば、「いでやこゝにたいめんせむ
 にぞいとわわしの山にも思ひ入り給はむ」。民部卿「おなじうはこひてぞ山には」ときこゆ
 るを、北の方うちわらひて、「としごろのすまひこそさやうにては、いでやいまさらにはと思
 ひ給ふれどかくのたまへば」とてうすにびのひとへがさね、くろつるばみのこうちきたてま
 つりてまうで給ふ。几帳おしいで、たいめん玄給へば、中納言昔はぢきこえしなめりしにだ
 にさもあらざるを、几帳おしやりて見たてまつり給へば、むかしにもおとりに給は
 ず。さう殿の女御の御やうにておもやせ給へるはあてにこめきたり。中納言「あなめづら
 しや、いとひさしうなりにけるかな。あさましう、あり所もあらせ給はざりつれば、としごろ
 山ざとのつれづれ、春秋のよさむなどにはつねに思ひいでられ給へど、たづねきこえむかた
 なくて、ありし人もあらで見たまへれども、そこにはかはり給へることもなく、たゞあ
 はれなる人のみなむ」とてあふぎにかきつけてたてまつり給ふ。
 「雲よりかへりて見ればふる里のいまむひなづるに給はまぢみざりける御」とてたてまつ
 り給へれば、北の方なくなく、

「むかし見しやとも山にあればかへらぬたづをまつもかれぬる」とのたまふを、い
 とおはれとおぼして、「まめやかにはむかしあやしきそゝる心のつきてあくがれそめにし
 を、なほ心ちのまづまらざりしかば、世にもあらじと思ひてあやしき山ざとにこもり侍り
 て、おやの御もとにまうでざりき。たゞこのをりにぞまうで、見たてまつりし。そこにた
 むこゝにはたひらかにおはしますなとさし。すなはちおもひになりしかば、いまま
 すなはちきこえむとせしかど、心ふかき所つき給へりしかば、横いかにぞ思ひつゝみてな
 む。北の方としごろはいとおはれに物おぼして給ふとうけたまはりつる。わがことやと
 思ひ知られていかでとぶらひきこえむとおもひつれど、それにつけてもおもほすことやあ
 らむとてなむ。中納言「なにかは今まではまばしこそ人をにくしと思ひしかな」とおほく
 御物語り、年ごろありつることなどかたみにきこえ給ふ。中納言「いとよかめり。かくても
 し給へばこゝにはさえついつけても、おほそへてものし給へば、わづらはしうてくるをりあらば
 おやはらからのことかたらひきにたれば、おそろしとこそおぼさるらめ」など夜ふくるま、
 にきてえ給ふほどに、よさりの御だいまるり物などきこしめして、おほんかたにわたり給ひ
 ぬ。かくて御はらからの君たちはものし給はず。をのへやかへり給ふとて、北の方たちの御
 もとに「かゝることのあればなむ」とてよるもひるものし給ひて、「人々のまゐり物など
 もみなもてまうで」とのたまひてうちにもたてまつれ給ふ。こなたにもとりちらし給ひつ
 ゝ、人にもたまひなどして、ものし給ふほどに、むかひ見かたらひ給ふ人はかんだちめ、殿上

人もめづらしがりよろこび、あるはけうあるものなどたてまつれ給ふ。右大將もゆふぐれのすいしげなるにもし給ひて、「こゝにかうて物し給へど、たゞいまなむうけたまはる。年ぞろおはする所にまゐりこむと思ひ給ふれど、とかくまゐりてなむ。さるはかのみつけし山里にもいかでもるともに舞ぞ思ひ給ひつるや。かの人はおはしてとひ給ふさや、たれとはき、給ひし」との給へば、中納言としをろはたづねとはせ給ふとこそふるき山人には」と申し給ふ。北の方、ひめ君などは見給ひて、かの山里にもし給ひし人にこそはあめれ。見しよりのもいとしうとくにきよげにもなりにたるかな、たれならむと見給ふ。かくて物がたりなどし給ひてかへり給ひぬ。かゝるほどに左のおとゞ、きんだちに、「新中納言本さいにかへり給ひて、このたゞひんがしに物し給ふなるを、とぶらひにものせむことのいたづらになすなどの給ひしものを、かくよづきてものし給ふなるゆよろこび申さむ」とのたまひて左衛門の督、宰相中將などしておはしたり。民部卿おどろきてみところながらいで、御むかへしていり給ひぬ。おとゞ「かくてもものし給ふとなむ一日うけたまはりし。すなはちと思ひ給へしを、いとあつく侍りてなむいとうれしく思ふやうにておはするを、限なくよろこびきこゆるを」。民部卿「あからさまにいもうととぶらひにものし給へりしをいひとめて侍るなり。なほ山ざととなむいとわすれがたげに」。おとゞ「御心とかくてもものし給ふにあらはすやは」とて、「かねてまうでけるよろこびにこそいのりなどする舞とささいはひと言ふことあるは」とてみなわらひ給ふほどに、うちよりさうじの御さかなしてころることいとさよらにて御み

きまゐり給ふ。中納言にかはらけさし給ふとて、

「わするなとは契りおきけむたらちねもあみて見るらむ雲のうへにて」。中納言賜はりて、

「ちぎりけむくもるをかく舞はわするればこゝ舞にと君が見るをしぞ思ふ」。民部卿、

「おひのぼる雲もあるらむ山里にたづねいでつゝちぎる心を」。宰相、

「むかしのもいまの雲ははれぬらむちぎりしやどにありと見つれば」。左衛門督、

「雲よりもおのが山々としへつる君をばたれかなげりかざるべき」。宰相中將、

「山ざとにゆきつゝ見ればうちながめひとりへしこそあはれなりしか」。民部卿「あなにくや。おなじ心に」とのたまへば、いらへするはとおほせられつれば、などとおほんみきたび

たびきこしめす。御物がたりなど久しくし給ひて、らう舞宰相の君してうちに「御せうそこ

いとうれしくて物し給ひけるを、よろこび聞えさせよ舞。いまだにあくえ侍らねば、むかし

かゝりしどくねちに、このつりどのへこそはたいふらうしに参りしか。けふ舞で侍る人を

や」。右のおとゞ「けふもむかしのやうにせむかし。わいてもあさすゞみにこそは。さておほ

やけの御いそぎはしんじち舞に月やさだまりて侍らむ」。左のおとゞは「八月ばかりにはう

けたまはれど、たしかにはまたうけたまはらず。すゞく院みなつくりはてたんなれど、なほ

とくいそぎてあるべからむ事せよ」となむ仰せらるれば、「さらばおなじむにやこも侍らむよ

しいはせしめ給へや」。左のおとゞ「けしき見むとてのたまふにやあらむと心づかひ玄給へ

ど、たれも舞たれも何心なくうちかたらひ給ふ。大將殿は御みきなどまゐり給ふ。右のおと

「かくなやませ給はずば、月ものこりすくなくなりぬるを、くらのかたへ御さいたまはらむと思ふ給へるを」ときこえ給へば、左のおとゞ、「なにかさやうにすみなむし給はゞけしうあらじ」ときこえ給ふ。「さうばうけたまはりてつごもりがたにおはしませむかし。御らんせしよりは水などもふかくなり、いをもいと多くすみ侍る。いかなるにかあらむ、山のまへよりかはなむいりてはる。うりかふものどもはいへの中よりなむゆきかへり侍る。御らんせさせばや。春秋はむかしよりも木のかずあまたになりていとをかしく侍る」などきこえ給ひてみなかへり給ひぬ。かくて二の宮、ひめ宮はこれのおとゞの西の方におはします。彈正の宮は八の宮の御めのとなどぐしておはしませど、女御の君ときこえおき給へれば、二の宮の御もとによるもひるもおはします。くら人の少將いかでなどはおぼせど、をとこ宮おはしましていさゝかけしきありて、物きこゆるをたちもあればけしきあしくてのたまへば物きこゆる人もし。この君たちは御なこたちとつきて物をとらせつゝ、ぬすませたてまつれ」との給ふもあり。くら人の少將、中納言の君とて御身につきつかうまつる人、よろづのたから物をとらせ給ひつゝ、「ぬす人にいれよ」との給へど、さるべきをりもなし。いかならむひまにいれむとつかひ給ふこと、人をもあまたきこゆるなかに、二の宮よりせちにきこえ給ふ。宮よりきこゆるほどに、一の宮の御こゝちをかゝるすぢに大將みなし給ひて、「さりともあるくおぼざるらむものを」と驚いたまはせて、「心だましひをまどはかさせ給ふものかな。なほなほかくことごとしき御心ちこそ世の中にわびしかりしは、うちになぶらひ

こうじてみなみの宮に御むかへにとてまゐりて侍りしかど、はしたなくの給ひしに、えまからざりしに、ふぢつほのくにおおとなり給ふべき御心なればにやあらむ。局などして給ひしに、いで給はでやらはせ給ひしこそ、わすれがたくつらくあひおぼさぬをりおほくなむとて驚き、さては御あそびまたまひしよひとよたちではべりしこそ、かの君の御こゑのほどちかうきこえしかど、このつぼねにきこゆることをも驚きなどて三條にかつらにおはしませむと驚き、一日二日すいみ給へ。みやたちなどしていで給へ」とのたまへば、宮「くるしきに、いづちか」とのたまふ。なにかなほとて十九日ばかりにとおもはず。律師も十日ばかりに四下ありてまかで給へば、おとゞ「さうばかのきこえしむづの御あはかならずまかおぼしたれ。今よりはそれよりものたまへ。これよりもきこえむ」とてみでしの中にきぬ物につゝみていださせ給ふ。りんじにはほだいたすのすいぐしたるたくなど一ぐたてまつり給ふ。まかで給ひぬ。かくて十九日になりて御車十二、いとげには宮たち、そん王、いぬ宮いだきたてまつりて、だいの乳母つぎつぎに、おとな、うなる、下づかへ、をとこ宮たち、左のおとゞ、右大將ひとつに、かんのおとゞ、女御車六つしていでたち給ふ。左のおとゞもひきてまうで給ひつれば、これかれいで給ふ。宮の御車一つにたて、かんのと驚の二つにておしあはせて二十ばかりなり。御せんは宮ばら、殿ばら二かたにおしあはせてかすまらず。をとこの御車みすあげてこぼれいで、道のはどとはく御笛ふき、琵琶ひきなどしておはします。おはしあはしつきて、まん殿の南おもてを御方にまつらひ、西おもてにかんのおとゞ、中には一の宮、

ひんがしに二の宮、ひめ宮とまつらひたるまゝにおり給ひぬ。一の宮、女御の君をゐてたてまつらぬこそかひなけれ。をかしきものかな、船どものありくを御覽じてけうじて苦しげになくておきぬ給へば、大將の君いとうれしと思ひ給へり。いぬ宮いとをかしくていで給へばひきいれつ。右のおとゞ「なほなほおはせよ、かればすきもの、そへは、事を申す。などてみすのまへによりて、よろづのをかしき物をとらで、あぢむきよびいで給へば、たゞいではひいで給へる程にかしこらひいだきとり給ひつ。ち、君おとゞの見給ふ程をば、おぼさではかすみ去給ふ。宮たちの見給ふをくるしとおぼす。いぬ宮は、おとゞのいだしきありき、をかしき物とらせならはし給ひつれば、おとゞをばおぢす。おもぎらひをもせず。おほぢおとゞはかなしびよびいで、見むとおぼして、よろづのをかしげなるもの、宮内侍のかみの御、御ぐしのはこなるをさがしとりて、ふところにいれてもたまへりけるをとらせ給へれば、悦びていだかれ給へり。おとゞの給ふ程やう、「人の子は天下にいへとも女はむつましく、をとこはうとくなむありける。このあそびをばおや君のとかなむおもひつる。か、れどこのいぬを今まで見たてまつらざりつる。か、りけるものを今まで見ざりけり給。この宮に侍ふものは年をうとくをさを見かたらはす侍りしかど、かしこにもせらる、ちごをばすなはちよりなむ見侍る。けふもこのいぬをば見せじとこそは思ひためれ。ろくつわれはわがきみこそはひにおはしたれ」とてふところに入れて、おくにひきてる給へれば、人は見す。おとゞかくのたまふを、大將いとほしとおぼしてまめだちて居給へり。おとゞはかしこ

にものし給ふ。いぬ宮もいとをかしくなり給へり。おきかへりつ、人見てはわらはせ給ふ。「これをつねに見まほしけれど、ちどの里へまかれればおきなをもゆるさず。心にまかせてもえ侍らずや」とのたまへば、母宮うぢちわらひ給ふ。ないしのかみ、「あなき、にくや、おぼたきなをばたれかゆるさぬ。心ときめきなりきや」とのたまふ程に、ち、おとゞを見つけてさへげてはひいづれば、「あれはわらぬ人ぞよ。いとおそろしくにくき人ぞ」といかくかし給へば、おとゞはひおりてはひいけば、父君かきいだきて、みすのうちにいり給ふ。「こゝにか」とてさしいれ給へばさらにおり給はずなれば、みすとみ几帳との中にいれてこしらふれど、舟こぎうかぶを見て、とのかたを見、なむわらひてまはし居給へり。おほぢおとゞもたせ給へるをかしきものどもふさにもたる程。かゝる程にいをいと多く、川のはとりにいかめしき木々のかけ、花もみぢなどさしはなれて、たまむし多くすむ。えのきふたきあり。さかひのかげに、ときかけ、まつかた、ちかまさら今かうおぼりえて物のすけ、としの官人にてあるまわりてあくうちて居たり。いをあらあき人のたてまつりたらむおほくあり。おとゞの御、かゝる折のれうとて、あゆかゝりいとをかしげにつくりおかせ給へり。それにとりいでさせ給ひて、あらまきとへつ、存なしつば、宮の御方、中の君にたてまつらせ給ふ。うちにはたゞ御せうそこまてたてまつらせ給ふ。また大將のなやましく去給ふに、すませたてまつるとて、ものしつればなむきとえすなりける。さてこれはめのとたちのれうにて、とさらにてづから書を給ふ。中の君の御もとは「日ごろはいかでとなむちかけれど、ま

ば、おしはときこえぬを、今はおぼつかなき心なむたいめんひさしくなりけりや。さてこれは一てうのみぎうしのてづからとりて侍りつるかひなく、例の人々にとりちらされ給ふな。

君がためあまのかはらにつりすとて月のかつらもをりくらしつるとなむ。けふは」と書き給ふ。「これ見給へ」とてさしいれ給ふ。北の方「あなことよやと思ふためとか」とてさしいで給へれば、おしまきてたてまつれ給ふ。かくてあそびなどこれかれ給ひて。日やうやうゆふかげになるほどに、あるじのおとゝかはらけとりて、彈正の宮にまゐり給ふと侍て、「ゆく水とは今日見るとちのこの宿にほいづれ久しとすみくらべなむ」。彈正の宮とり給ひて、大將にさし給ふとて、

「水の色は君もろともすみくともわれらは人の心やはする」。大將、

「水はまつすみかはるともまとぬるけふのならしはいつかたゆべき」とて宮にたてまつれ給ふ。

「みちよへてすむなるかはのふちは瀬になればぞ心もさるら」。だん正の宮、

「人はいざわが身にかなふ心だにゆくさきまではられやはする」。八の宮、

「われらだにむすびおきてはゆく水も人も心も何かたゆべき」とのたまへば、大將「あが君よくのたまはせたり。このわたりこそあな心うや」ときこえ給へば、皆わらひ給ふ。かゝるほどにあかきまきしに書きて侍とこなつにつけたる御文もてまゐりたり。彈正の宮「い

づくのぞ」ととり給ふ。「ふぢつぼの御方の宮の御方にまらせ給ふ」ときこゆれば、「われこそは宮」とて見給へば、「日ごろなやませ給ふとうけたまはりつれば、いかにしてまゐりこむとおもひ給へれど、こゝにもまたいとくるしく侍るを、思ひ給へつるほどにいと侍はくわたらせ給ひにければ、ならせのたびにてなむとてや。

もろとも朝ゆふわかすみそぎせしはやくのせいに思ひでらるゝ。わすれがたくのみこそ」とてはしがきに、「これはなめげなれど、こゝにある人のちひさきものくひはじめけるを、わか宮のいぬ宮にとてたてまつれ給ひける」ときこえ給へり。彈正の宮の御ときよくえの給ひてまゐれり。御らんすれば一つにはまゐる物にはあらずらとさよらなる。今一つにはまゐる物なり。とりまひろげて宮たちまゐりあそびまならず。彈正の宮「この御かへりはきこえさせよとか。さらばいらへきこえむ」といらへ給ふ。人のなきにそらごたへをま給ひつゝ、「さらば」ときこえ給へば、「一の宮」あな見ぐるしや。御使のみるにたまへ。その御文」のたまへば、なほきこえとり給ふ。「御心ちくるしとのたまはず」などのたまへば、大將いとをかしとおぼしてうちに給はるるみ給へば、「いで、せんじ書きたてまつらむ。見給へ」と書き給ふ。「みづからきこえさせむとすれど、なほまた筆もとられ侍らねばなむ。日ごろはいかなるにかあらむ。うちはへなやましくなむ。けさは心にもあらぬありきをそほ。御文はあさゆふとか。

みそぎせしせいのたきつせ思ひいでばわがころもでもわすれざらなむ。それにもおと

らぬぬにとの給へる物はこのとくみつや」とて大將ひとりみなくひつめり。「などかまろには給はぬ。これをへねたうこそ」とていだし給へれば、大將、かんのおとゞに「まうけのもや侍る」ときこえ給へば、ひとへがさねのほそながこうちき裕のはかまぐしてたてまつれ給ふ。もていで給ひてかづけさせ給ひてたてまつれ給うつ。あゆの御使どもいとくかへりまゐりて、御せうそくともみなさこゆ。御かへりごとどもあり。「中の君はちかくてもおなじおぼつかなさなれば、御文はさて手づからとぞ。さればこそとしごろは、

わだのはらよそになりにしいをとりは雲いづるはらをたれかあげ、む。とりちらすなどあるは、ひとりごとよく」とあり。おとゞ見給ひて「はかなし。物は例のめのととらせて一つもくはせでぞあらむ」とつぎやき給ひて「これ見給へ」とてさしいれ給ふ。北の方見給ひて「げにや」との給ふ。かうけて御まへごにもものまゐる御をしきどもりしてわざとさよらなり。あゆさまさまにれうせさせて、いと多くごたちをまへについがさねをつゝあり。大將、宮の御もとにまうで給ひて「ものはきこしめしつや、何をかまゐるべき」と聞え給へば、内侍のすけ、物もきこしめさず。けづりひをなむめす。大將「あなおそろしや、いみじくいむものを」。宮「かゝればこそいやまきさりつれ。ひくはではいかでかわらむ。さきに物いむといひつゝ、くばまほしきものもくはせず」とのたまへば、「あな心うや。くひ物むつかりをくすし侍り、いひて聞えむ」とていで給ふ。てんやくのかみにとひ給へばさこゆ。「めさぬにやすこし給ひぬる時は、あつくひや、かなるものをおどろきて御むねやまかせ給ふ。まだしき時はいとあ

しき物なり」と申せば、大將「かくなむ」ときこえ給へば、「あなわびしや。いとあつし」との給へば「うちほまゐらせむ」との給ひて、かしらのところはかのほとり、おとゞより西によりてやあるをえたり。そこにひめせば、ちひさくわりてはすのはにつゝみて、やうきにするてあふみのかみもて参りたり。大將とり給ひてまゐり給へば、すこしまゐりて、「からうあつとじてよかりつる心ちをまどはすかない、こゝになこそ。いね」とのたまへば、大將わらひて「さきにはかくものたまはざりしを、もののつみななどにや」とのたまへば、ないしのすけ「たびたびのことにはんべれば、うちの御方は大宮の御ときにはいとみじくなむ。この御ときにはれいよいりもたがはせ給はじもおはしまさいりき」と聞ゆ。いぬ宮はひいいで給ひて、ものどもにとりかゝりてつかみこぼし給へば、父君「この人こそいとまさなけれ。かゝるわざは女はせぬ物ぞや。をとこおほかるすのものなどにはいづるものは」とのたまふ。夜に入りぬればとういろかけつゝ、御とのあぶらまゐりわたしたり。るの時に「御はらへ時なりぬ」と申す。おとゞのたんのうへより水いだして、いしだゝみのもとまで水せき入れて、たきおとしておほいがはのごとゆく。すのこにはいみすかけ、御ゆかたて、御屏風どもたてたり。そこに宮三所いで給ふ。いかんのおとゞはゆかりもいちいたて、いで給ふ。かうらんにおしかゝりてみはしのまへに、おとゞ、宮たち四人、とどののたたちこなたかなたにおたり。おんやうのかみ御はらへ物してつかうまつる。馬どもゆふつけてひきたり。御ぞぬぎ給ふい。一二の宮からあやのかいぬり「かさね、姫宮御こうちき、かんのおとゞまろきさうのひとへが

さね、男宮たちもぬぎ給ふ。宮たち御はらへつからまつり侍れば、よふけぬ。御あそびし給ふ。一の宮わごん、二の宮さう^三の御こと、かんの殿びは、宮たちおはすれば御几帳のうしろにおはす。一の宮「いとわし。なほこゝにを」ときこえ給ひて、御几帳のなかにおしやりて「いとよう侍る」とて御ゆかにおしかりてびはひき給ふ。ふし給はぬはたまうけたまふ。大將「こゝもとはとほからず侍ら」と男たちの御あそばすにもきこえ給へば、やがてならひ給ふやうなり。かゝるほどに、十九日の月山のはよりわづかに見ゆ。かんのおとゝあふぎに書きて、「一の宮にたてまつれば」

「ゆふかけてみそぎをしつゝもろともにあり明の月をいく夜またまし」。宮見給ひて、

「ながき夜の有明の月もまつべきをみそぎの神やいか」とぞ思ふ。二の宮、

「かくしつゝ月をしまたばあさきせのみそぎの神も何か知るべき」。ひめ宮^四、

「月まつとかつらわたりにさよふけてひくことのねは神もきくらむ」とあるを、かんのおとゝ、大將にたてまつり給へば、またとりて、

「神もさけかをはか^五せすやをよろづよにみそぎつゝおもふとちれへむ」とて人にも見せてさしいれつ。かくてよ一よあそび給ふ。夜あけぬれば、みすのうちに入り給ひぬ。大將まろがねのかゝり四つあしつけさせて、ちもしどもめしてつくらせ給ひて、とりあくる^六いをどもとら^七せつ。あゆ一こは入一こらし^八し、こぶならせせ、あらし^九などそへさせ、ふぢつぼのわか宮^十の御^{十一}もとにてつかうわらひ月日かきて、せんたて、御なし給へ

り。かたはらに、

「君がためしづけきそら^{十二}にすむいをを^{十三}今日より見せむ千代のひごと」とかきて、すはうせんにして、あかさき^{十四}しに書きてなでしこの花につけたり。かんでう^{十五}なる人をめして、「これ三條院の南宮にまゐりて、わか宮の御方にもてまぬれ」とのたまへり。御つかひもてまゐりたれば、わか宮見給ひて、「西のたいになむ」とてたてまつれ給へば、大將^{十六}またおはしまさ^{十七}。君たち、御かたみ給ひて「こちわたり給へ」ときこえ給へば、おはしたり。「かくかき給へ」とてこのやうにかゝせ給ひてかたはらに、

「君が^{十八}かくとりそめければ山川のあさぢぞおきのうへに見えける」、をしへつゝ書かせ給へれば、いとをかしげにおぼゆ。御つかひにろくたびてたてまつれ給ひつ。おとゝ御まへに入めしてうせさせたまひてけふしてまゐる。ふぢつぼにはあゆならぬいをいりてまゐり給ふ。かくて御つかひまゐりければ、あをき^{十九}しにかきてきちかうにつけたり。見給ひて「いとかしこもかき給へるかな。たゞ^{二十}ところこそ手本めし、かばたてまつれしか。いとよう似させたまへり」とのたまへば、右のおとゝとりて見給ひて、「なほかしこき君なり」。宮^{二十一}「さうところ見給ひしかば手をこそならひぬ給ひしか」。大將「かたち^{二十二}をかしげにおはすやはうち^{二十三}にこそ」。うちの宮わか、宮よりはこの宮^{二十四}をこそおひいで給ひぬべかめれ。いとをかしげにおはすや。は^{二十五}にこそ、うちの宮、わか君よりはこの君を^{二十六}いとらうらうしく遊人^{二十七}にぞおひいで給ひぬべかめり^{二十八}など、かくてその日一日すゝみあゆひひかせ、

日くるればうかばせなど去給ふほどに、宰相中將の君の御許より、二の宮待のめのとのもとに、女のよそひとくだり、去らばりのひとへがさねつゝ、御みて御文あり、「昨日のつとめてせうそきこえたりしかど、いそぎていで給ひにければ、かのきこえし事、宮にてはいとかたかるべき事を、宮たちも御あそびさせ給ひしかば、はとりにすゞみ給ふめる。よひのまにたばかり給へば、きのふのつとめておひいでまうできて、このわたりになむさる心ちして侍る。さてこれはいとあつき日なめるを、ぬぎかへたまへ」とあり。めのと見て「あなおそろし。人もこそけしき見れ」とて「さよりあらひにやりたりしものはこいし給はで、いとようといめ給へ」ときこえ給へれば、北の方かはらけにかくかきて、へいしもたせてたてまつり給ふ。

「すだつことまた知らざりしひな鳥のえだはいづれぞ去らずがほにも」とあり。おとい見給ひて「げにいとことわりや、されど、

とりのゐるおなじとくらはとひしかどふるすを見てぞとめずなりにし」とてたてまつり給へば、中納言なに事ならむ、かたはらいたしとおぼす。かくて民部卿けうしのところなればかづけものはせで、御ともの人々こしさしなど去給ふ。おといかへり給ふとて、「かくてのみを今はものし給へ。さておはせばかうちかきほどなるをさしあゆみつゝ、参りこむ」とておはしぬ。かくて十日ばかりありて、民部卿なむよるは殿へおはし、ひるはこいにのみおはす。中納言は藤壺いかにきゝ給ふらむと去づ心なくおもほして、去ものとのへかへりなむ

とおはすせとおはれば、よろづの人々参りてこどの、人もなつきたてまつりなど去給ふて侍。つかうまつるすりやうなどもまめやかなるもの、くだものなどたてまつれば、時の所のやうなり。ふぢつばに御文たてまつれ給ふ。「御せうそきこえたりし。すなはちとほくまかりて山ぎとせいせさせ給ひしかば、時々はときこえさせしかば、一日あからさまと思ひ給へてまうでこしを、思ひのほかなるやうなる事ども侍りておのづからきこしめすらむ。

ふるさとにありとは人に去らるれど涙にのみぞうきねせらるゝ。いつしかうちにもさらば時々とのたまはせしかばなむ、今日までもかくちかきほどに侍るを、ありしやうなるをりもいかでかとなむ、まゐらせ給ひなば、いつをいつとかは」ときこえ給へり。御返り、「日ごろはちかくものし給ふとうけたまはりつれば、おひなほりをもとなむ時々もきこえしこととはなほさてのみおはせば、さるをりもありなむとみにまゐるまじくなむ。

そこにかくありときこゆるいまよりぞいひでしことも思ひ知らるゝ」ときこえ給ふ。中納言いとはなやかにもてなされて、かくてもつきなからずや、山ぎとにつれづれとをのこどもをのみつかひておはせしよりはとおもほさるれど、なほよの人の心をつゝみて、北の方には物もきこえ給はず。ぬりこへはなくてはなかとをたて、ひんがしの方には北の方、西には中納言いとうにとうにとうにして、女もめしつかひ給はず、つかひつけ給へるをのこをのみ驚めしつかひ給ひつゝ、おはす。時々ひめ君のみよびわたし給ひつゝ、物がたりし給ふ。「としごろはなに事か去給へる。一日こいにもものし給へりしかば、かの山ぎとにおはせしぞか

し。そのかみは中将にぞありし。そはればよろづのことするなかにきんのまやうすぞ、それこそ紅葉見るとてありし、そこにやありけむ。きんひきしをよくなりぬべきことかなとのたまひしか。そののちはよくなりたりや。年ごろはよるひるこひしく悲しくのみおぼえ給ひつゝ、世にも待つるまじくのみおぼえしかば、かくてもえたいめんすまじきにやとなげかれて、よろづのこともかひなくつれづれとなむながめ侍る。君「などかまうでたりしにはこゝにはわれぞとはのたまはざりし。さおもう給うて、母君せいし給ひしかど、いで、さこしめしもやするとてよろづの事をさこえしかど、まろしめさすなりにしかば、いとこそかなしく侍りしか」とさこえ給へば、心わやまりこそまたりけれとおぼして、物ものたまはず。かくなどもてなしてへだて給へど、北の方には、人のねしづまりたるよるなどよりみそかにいりて、時々物なごさこえ給へど、ゆめに人には知られ給はず。みそか人のやうにて、さこえさこえ給ふ、「年ごろ心かはりて、あるやうなりつれど、御もとよりいで、こと人をめにちかくだにぞ見ざりつる。この西の院にありし時、ものさこえし、人の御もとなりしひやうるといひしになむ物さこえつかせしことゆめにちかきこともいはずなりにき。このころ、はばかりぞかくてありつる。かたちことなるこゝ、さうしも人にもさこゆるやうなれば、なほかくてはあらむ」といで給ひぬ。ひるつかた御文かきてなかとのもとのにて、姫君をまねきよせて、「これは、君にたてまつれ給ひて、御返りとりてを」とのたまへば、もておぼしてさうぬやうにてたてまつり給へば、民部卿もものし給ふ。北の方かくこれかれ物の給給ふに物いはずと

見給ふらむとおぼせば、とりて見給ふに、民部卿「あなたのかたさま見む」とのたまへば、ひめ君「かしこにたち給へり。人に見すな」とのたまへるを、「いかおぼしなるらむ」といゆかしく思ひ給ふるに」とととりて見給へば、「いとあはれにむかしのみおぼえしかば、よろづさこえむとせしを、山ごもりの心なきやうにやと、つゝましくて、

あひもみでふるとし月はなになれやくれがたくのみ見ゆる秋の日。くれにだに心しづかにもがな。まのびてこなたにも、やがて」とあり。民部卿「さればこそあしくやはたばかりさこえたる。はやく御返り事さこえ給へ」とのたまへば、「なにか」とて書き給はねば、ひめ君「おもほしいづるなるはちかゝりし。むかしのかひにやと思ふるも、まげにいかになむ。いでや、

よそなれどなほゆふぐればたのまれさかはるを見つる今ぞかなしき。心ぼそくのみなむ」とてたてまつり給ふ。かくてよさうつかたこなたにわたり給へるほどに、左大殿よりよいぬみちうに、やいぢめなきみづふ、ななどたてまつれたまへり。北の方の御もとに御文あり、「一日まゐりたりしかど、いでたちし、たりしなどありしかば、わづらはしさになむ、いそぎさてみるは、た人のもとにとて、

わたつらみのそこにいりてぞもとめつるものとみるめをかつきいづらむとて、みならひしたまへや。やいぢめはおうなはいたくてかみのこしたる。わかうどの御もとに」とあり。とりよせて見給へば、「いとよさうり、よきみつ、ふゝきをりびつにつみて、大きなるほと

ぎに、おひめ君なむ御らんせよ」と書きつけたり。あけて見給へば、まろがねのはとぎどもにねりたるきぬ、から^三あや、かう^三髪などいれて、いとをわにまげてくみて、ぢんのあふこにつけたり。中納言見給ひて、「あなかたじけなや。わづらはしく御志あるをあふ^三ご文給へる」とてたてまつり給へ^三。御返り事は「何事かあやしうなむ」とて、「このみるは、

伊勢のあまもみるめをかへしかづきせばうきに心はまづまざらまし。やいごめは大かみにこそはなむ。さてもやまとのには見え侍らすなむ。あなかしこ。いととくやうせ給へ^三。とかい^三髪せ給ひて、御つかひにろく賜ひてたてまつれ給ひつ。かくてよるよるなほまうで給ふ。姫君に「今は御ふくぬぎ給ひてよ。あすなむよき日」と申し給へば、「人々のぬがせ給はむ時にとこそは、君はの給へ」と申し給へば^三。ようなき事かたのごとくにて、おやわりとならばとて御車ども御せんなどしてぬがせてまつり給ふ。かへりおはしたるを見給へば、こき御ぞ、こうちきさなどき給へる御かたちいとさよらなり。ふぢつぼのやうなる人のけすこしおとりたるなり。父君いとよき御むすめなりと見給ふ。かくてをのへものせむとおもはず。北の方、おなじさうぞくいとさよらにしてたてまつれ給ふとて、

「君にとてぬひし衣もこぬほどになみだの色にくぞなりぬる位」。御かへし、

「涙にしぬれけるきぬのくろければなほすみぞめといいかい思はぬ」とてあからさまにをのへおはしぬ。かくて春宮は、藤つぼのまゐり給はず、御返りきこえ給はぬとおもほしなげきて、院の御方、なしつぼなどもひさしうなむまうのぼらせ給はず。御局へもわたらせ給

はず、つれづれと物もきこしめさず、日にまたがひて御けしきあしうなりおはしませ給は、うちにも」をりしまれかゝる頃しもなやみ給ふなること」と聞え給へば、後の宮」などかことなることにもあらず。あつけなどにや。さてはそゝろなることをおぼすにこそあらめ」など聞え給ふ。これかたの藏人めして御文給ひて、「これさきさきぎのやうに^三ならばさらになまゐりそ。さぶらはせじ」とおほせらるれば、いたうなげきてもてまゐりてたてまつる。見給へば「たびたびきこゆれどもものたまはせざめれば、いとおぼつかなくなむ。人のあやしがりし^三、さわぐなむき」にく、聞えじと思へども、さてのみはあるまじければ、

もろともにありてぞ世に^三をしまれしかくはなぞやつゆのいのち^三も。いでやちひさき人々あまたあめれば、その御ためにこそ、いのちもさらぬことも、いかでかは、心うからめ。れい^三世にあらまほしくもあらず」などあり。見給ひて例のものものたまはず。くら人「御返りもてまゐらずばふたけづらむとおほせられつるものを、とくにいたはりなさせ給ひて、とめられ侍りなば、いとかひなく」など申す。そわうの君おはしそめて、兵衛、あこきをかへり見させ給ふとおもほして「まゐるしばかりきこえ給へ。これがいたづらになりなばいと悲しう」などあつまりて申す。君「御返りきこえすとて、御使をつみし給は、わがためにぞあらむ。つみし給はず^三ばよろこびと思はむ。さばかりだにおほせられたらばこれにまざりたらむ。まきにも申しなしてむ」との給へば、くら人「いかい侍らむ。い^三かで参らず侍るべき。まゐりてかゝるよしをやけいし侍るべき」。うへ「たいまゐりて御返りもきこえずとめの

とたちして申させよ」とのたまへば、なくなくまゐりてさけいせさす。宮、これはめのとごと
ていとらうたくする物ぞ。これをとさすてたらばこれが事いひに、文はおこせてむとおも
はしてかんじにすゑたまひつ。かくて日頃まぢおはしませと殿の君たち参り給ふにこれ
にやとおほおもほせと、御せうそこもきこえ給はず。いみじうおそろしき人の心かな、なに
よりかくふかくゑんずらむ、人々まうのほらすとにやあらむとおほし給ふ。のこりはつれ
つれ時にあるべしとぞ。

未六月二日校合畢。 建正

國ゆづりの下

坂本作がの記

かくて中宮よりおほき大殿へつその日のようさりきこゆべきことなむある。大納言、宰相も
ろともにまのびてものし給へ。せちなることきこえておほむ」とて奉り給ふ。右の大殿にも
「大將もろともものし給ふべし」とあり。おとつたち「かしこまりてうけたまはりぬと
まさらにおほす世こと侍るに候はおほむ」ときこえ給へとぞ、そのよになりてみなまゐり給へ
り。ささいの宮、御前の人をおほみなたてさせ給ひてさうじいれたてまつり給ひて、おほきお
とゞにきこえさせ給ふ。せうそこにきこえしやうは、「むかしよりこのすぢにかくしくる事
のいまたがひて、ゆくすゑまでたえぬべきこときこえむとてなむ。御くにゆづりの事この

月になりぬるをのたまふやうは、おなじ日、春宮もさだめさせむとなむあめる。それをおの
らもあるに、一のかみにてはそこにこそものし給へ。またつぎつぎかくさまおほことなくもの
し給ふを、かのすぢはおほいまうちぎみのみこそおほはおほきおとゞのものし給はずなりぬ。
さてはみな下らうにてのみこそは、このすぢにまづる事を、一世の源氏の女きさきになりぬ。
ばうにすゑたる事はなきおほなるを、なかかこれしもさるべき宮に女をこれかれたてまつり給
ひし時は、この中にさりともとこそおほひまゐり給ふとしのおほゆるまで、さる事のなきを思
ひなげきしほどに、ころのまゝ、おほなる人いできて、ふたつおほなく時めきて、子をたうらみ
にうめば、これにこそはあめれ、このすぢのたえぬべきことくちをしく思ひつるを、このな
しつばの思ひのはかに夢のこと、まとうつおほるに、かゝるをりにこれをばうにはすゑむとな
む思ひ、女は世になきものにもあらず、この御身のすぢをおもほしすてつ、さしかたゆく
さき又このすぢのはぢとあるおほひなることをとゞめ給へ」ときこえ給へば、おほきおとゞ
とみにものものたまはず、まばしおもほしためらひて、「たゞまさらはともかくもいかでか
何をか申さむおほ。まんかといふものは、君のわかおはします御心のおろかにおはします時
こそ侍れ。かくめい王のことおはします世には、なに事をかかさだめ申さむおほ。たいみこの
よにみにかくなむとおほす。いかゞとまこえ給はむに、御心にさだめさせ給ひてこれをとお
ほさばなにのうたがひか侍らむ」中宮「それはさばかり、このころさとおほなりとてだに懸ひ
かなしびものもまゐらず、かげのごとなり給はむ人はまいてかけてもき、給ひなば、いたづ

ら人になり給ひなむものを、たゞ人のくに、も大臣公卿さだめてこそは、よろづの事もま
 けれ。これかれ心を一つにてこの事をかくなむあるべき。このすぢのむげになくばこそ
 とすぢのまじらめ。かくさるべき人をおきては、いかでかおのらもそこにも申さばこそはさ
 すがにだうりうしなひ給はず。さかしくおはする人なれば、心にはわかはずかなしとおぼす
 とも、世をたもたむとおもほす御心あらばゆるし給ふやうもあらめ。おのれ一人かうなむ
 思ふとは申さじ。おとと「たゞまさはうけたまはり侍りぬべし。公卿大臣さだめ申し侍りな
 む。ちかきはむすめのことなれど、こゝにこそはまづかゝる事はしもよりなむいかなるべき
 ことぞ。をのこども」とのたまへば宰相大納言「さらば給はぬ事なり。うへのさだめさせ
 給はむまゝにこそまたがひ侍らめ。おとと「さらば大臣はみなむすめ人御まごなり。大將
 は下らうなれどゆくすゑたゞいまものゝかためとはべりたうお人なり。そのいもうとをひ
 のうへなり。あるべからむことさだめ申し給へ。たゞまさはそれをうけたまはりむ」。右おと
 と「いとまたふとくかくおもほしめさせ給ひける。かの侍仰せられ給うけたまはるはうれ
 しけれど、こゝに五人さぶらふ人は、四人はみないぬに侍り、かねまさもこのあそん侍れば
 思ひすつゞいべきにも侍らず。おりのおはしますべきみかどのあまたのみ子達のはゝにてさ
 ぶらひ給ふも、世をつぎ給ふべき君のふたつなくおもほして、みところの君もちかうさぶら
 ひ給ふおなじ人のむすめなり。この御中どもおろかなるにあらず。いかゞいのちをかけたま
 へるやうなり。このおほいさうちぎみ、このこどもの母まかりかくれてのち、この女御のへは

んべり給ふも、たうびて、又一日一夜べいちのところをなむちりたまはばはば侍なる。そのは
 らに子四人侍るなり。かの大納言のあそんは、そのおとと、侍の入つにあたるをなむもて侍る
 なり。それまた子ふたりまたけふあすにて侍り、それぞの冬はかなき人に物いひふれて侍
 りとてまかりさりて、おやのもとに侍りければ、このをさなきをとりもてなむせむかたなく
 てもてわび給ひけるが、からうじてこのころなむわのちゝなどいひてわたりて侍るなる。中
 將のあそんもかねまさがあねのはらなり。それもこども侍り。なかたゞのあそん、かの家に
 侍らねど、あるかなきかの君にしてもてかかしづき侍る人に、つきて侍り、こゝに板にかぎりな
 くかなしうする女子はべり、またもあるやう侍るなり。かくのごとてをくみたるやうにゆき
 まじり、この中にいさゝかおろかならず、いのちを限りて侍るに、かゝることをなむあひさ
 だむるとき、侍りなば、このむすめどもをとりはなちて、みかどにもかれこれにも又あひ
 見せてまつるべきにも侍らず、いとよき人なれど、いとよき人にこはき人になむ侍る。また
 しか思はむこととわりになむ。家のたふとき事はかやらのをりのよういなり」とときこえ給
 へば、中宮「おはきに御こゑいだし給ひてぞ」さう殿のめのとこども、侍るはなど、すべ
 てこのめのこどもはいかなる一日かかつきたらむ。つきとつきぬる物はみなすいゆつきてお
 はいなることとさまたげもしたる。と「たまへば、おはきおとと」かの大將のあそんのき
 ゝははべるにいとよびんなるおほせなりや」とときこえ給ふ。「たゞまさは人にも侍らず、か
 のあそんはをこゝだにはづかしく侍るものを」とてうちわらひ給へば、みなわらひぬ。さ

ぞかし女なるおのらぬだにこそすぢのたえ候ふ侍事は思へぬ。したちはなにのなり給へればか、その子かななほしはとて、かゝるおほいなることのさまたげをばなさるゝ。世の中に女はなきか、それにまさりたらむ人をもおのれたてまつらむ。ちかからはおのが一人もちたてまつりたるみこ、女みこなほ女え給へざりとも、そのめの子どもにはおとらじ。いとかくつたなくはなほなほからひなほ給ひこそも。大きおと、「なほこれはわたくしごととなり。なほ侍ることをかうなむと申さるゝなめり也と、こを思はぬ人なれと、この道理のある事なり。かくはなほ心をとなへてなむえ申すまじく侍る。なほたゞけいするやうにみこの君にあるべきやうを、よからむをりこしらへさこえ給へと、おほせごとにてゆるし給はゞ、この中にさいはひにてなほこそ侍らめ。ささいの宮のそこたちはめかたをのみおぼして宮のになくおぼしたるみにての給ふにこそあめれ。よしやわれなほよの中の事ともまかせてみをらむ」とのたまふ。左のおとなほ」

「さてもこのはうなほかねの君をば、また御らんせぬにやあらむ。その君はもとより天地にうけられてめい王かねとうまれ給へる人なり。かれをさしるひおさばいとあしからむ。なほかゝる御おもてだても見えずといはれさわがれ侍へるに、かゝる事の侍るこそはぢすこしまぬかれて思ひ給へられてぞなほあらむ人にさしるひて、いたづらにならむと思ひ給へず、まかなほかのやうにてもえ侍らすのみこそ」。宮「あなほうはうなほはうなほとくなしつる。つきてをのこのはしなほとなりてかく物をいはむよな。一人してだにかしこき物は唯めのこどもやうにて」とはらだち給ひて、「そのあしたにも宮とてもめまきくるひをこそえ給へ。いとくげには思は

せずを、はたあまかつ女なればおもては、けけたるにこそあらがはざらむ。げにけしきのおそろしげに人をころすべからむはなぞに。大きおとなほ侍る人なり。さらにとゞ人と侍らず、けしきありささいとおそろしき人に侍り、かの大将のあそんぶそなたわがをのこにそへなほ侍れど、いとよく人見侍る人なり。大将「うたてあそびのやうに申さるゝかな。なほ見侍るにいとかしこく見え給ふ君なり。かのはべる所にすみ給ひし時は、ちかく侍りしことなり。いとおそろしく侍りし」と聞え給へば、ささいの宮「さるものゑもぞ神はとけはほしうなほ給ひしかな」と、君は「おとなほたちよき事さ、はべれど、えなむこの中にはさだめ侍らぬ。なほ申しつるやうにそうせさせ給へ」とてみなまかで給ひぬ。かくてひびろありて「宮にさこえさすべきことなむある。わたらせ給へ」とあれば、わたらせ給へり。御物語などさこえさせ給ひて「かうかうなむ思ふ。いかにいかにあるべきことぞ」とさこえ給へば、宮いと御けしきわしくて、あをくなりわくなり、物もさこえ給はず。いとひさしくありて「むかしよりたれもおやのおほせ事は、ともわれかうもあれいなびきこえじと思ひ侍れば、いなびきこゆべきには侍らず。このくにならずおほきなるくにも、國母大臣ひとつこゝろにてこそとをばかりけれ。まなかども御あなすゑにてやんごとなくともせらるるを、わひさだめてともかくもせさせ給ふばかりになむ。こゝにはたかの人をはなれてはいとたよりなく侍るに、かゝること侍らば参るべきにも侍らず。さればかの人をさなき物もろとも、いくとも死ぬとももろとも、山林にもいりて侍るばかりにこそは。くらゐ、そくもかへりなほみむと

思ふ人のためにこそは。なせにはこれをいたづらになしてはよくとも侍るべき」とて涙をこぼしてたち給ひぬ。宮きこえしと思ひつる事を、これらが女がたに思ひて、おのらはえらすがほにてさはせむといふを、かゝるなからひにはなれたる人をばいれませむがにくさに、心にまかじか申せばかくの給ふなめり。おほかたはさわがれいなとはらだちておはす。こゝはきさいの宮（宮）。かくて又きさいの宮、右のおほとのに、「まのびてなほしすがたにて物し給へ。こゝゆへき事なむある」ときこえ給へば、そのよまぬり給へり。宮たいめんま給ひて、宮にかのありしこときこえしかば、「ともかうもあるべからむ。さまざまにこゝれにはいかでかとなりしかど、けしきなむよくも見えざりし。それ思ふやうは、上にきこえておなじ日さだめさせ給ひて、たゞ大きおとゞのみこゝろなり、そこにはあなたか任なたにより給はむやは、ぐらゐにぬ給ひぬえぼしはしにつけなりしはしこおほさめ。王昭君を胡のくにへやり給へる、楊貴妃をころさせ給へるみかどなくやはありける。大きおとゞは女をおもひ給ひつれば、それにつゝみ給へるにこそあれ、すべきやうかならずと思ふを、さる心まじり給へれとなむ。おとゞともかうも御心と定めさせ給ふらむになむ。こゝにはみなみなひとのひとかの（おとゞ）にいりまじりて侍れば、心ひとつによるづ思ひ給ふとも、力なう侍るべければ思ひうけぬなり。たゞおほせごとになむよろづの事なかつたゞのあそんにかたらし侍るを、おほかたの心よせせよりもまた思ひ侍るめるすぢはべる（おとゞ）めれば、世にもとうし侍らじ。宮「いとふようのみこそさこそあなれ。さふけうならむ物をばこともな見給ひそかし。さもあらばあれ

それらはひとつ心ならずともありなむ。たゞ一のかゞみだにひとつ心ならむ」とのたまへば、「うけたまはりぬ。たゞせ給はむになむ」とてまかで給ひぬ。かゝるほどに、上わたらせ給ひたるに、「くにゆづりはじちにいつほどにかはべらむ」。上「この十日あまり（おとゞ）ばかりになむ」。ばうにおなじ日やはさだめさせ給はぬ。上「なにか、さあらずともさわがしきやうなり。のどかにもありなむ」。宮「そのよしはかうかう思ふことなむある。その人なかりし時こそあるにまだがひてと思ひしか。かゝる人ありとならばおなじくは申しける。そのはらのをとなむ」。上おもほすやう（おとゞ）、宮はらみ給ふなり、それもしをどこならば、それをもし、これをもやどこそ思ひきこえ給はめ、さあらぬものから左のおほいまうちぎみの思はむ事あり、こゝこばくのみこのおほぢにて、かくあること思ひて、女御をもまかでさせ給ひてまゐらせずば、いかゞせむとおもほして、「なにか、たゞいまならでもありなむ。おのづからくらゐにありさだまりて、おやのあらむ人の心よろしからむやうにさだめられむ。さしも思はざらむ人を子にまたらば、おぢきなくさかまらをもはづかしき人にさもおほえしや」とのたまへば、「このまじう殿のぬす人によりの給ふぞかし。ふけうまたてまつりて、こもりおもてこひかなしびまぢいで、あをばへのあらむやうにたちさりもせでおはすれば、いかにおそろしくおぼさるらむ人のゆかりをこそおぼすらめ」。上「うちわらはせ給ひて」なにかさまでもおぼすや。めづらしき人ならばこそ神さびにたることもの母をば、何か、十の君のまだ見ざりつるがありければ、それ見にこそ時々わたれ」。さてのたまふやうは、「かしこにまづかになりな

む時あるべきやうにかたらし給へ。たよりあるべからむことをのたまはせむには、よもいな
 びられじ。やんごとなき人のみなさ御あるす多にておんめるをわいても思ふ人のる位との
 給へど、世をば左大臣なかつたのあそんとなむまつりごつべき。おほいまうちぎみいとよき
 人なれどもごえなむなき。ごえなき人は世のかためとするになむあしき。右のおほいまうち
 君は、ありさま心もかしこけれども、女にこゝろいれてすいたるところなむついたる。さる
 べき人はたのもまげなくむある。この二人は大將のあそんはさらにいふべきにもあらず。
 今一人もごえもあり、心もいとかしこくおもし。そのひとふしこもりて、むすめどもをもと
 りみださ時でまどはさむに、人々なむさわぐ事あらむ。よかし見給へ」ときこえ給へば「よし
 きこえじや」などるんじきこえ給ふ。かくて御國ゆづりあすになるまで、ふぢつば、藏人の事
 も申させ給はず、宮かうながらあらばいたづらになりなむとおぼして、その日かんじゆるさ
 せ給給ふ。さてようさりかた、ことくら人してきこえ給ふ、「日ごろはことにまゐり給ふや
 とのみ。としごろちぎりきこえしことをたがへたまふ御めるこそ。」

もろともに思ひそめてしむらさきのくものはらをも御らひとり見よとや」ときこえ給ひ
 つれば、たゞかくなむ、

「ながき世を見るべき人はことなれどよそにのみきくくものははらをば」ときこえ給へれ
 ば、このきささの宮のたまひしことによりてなりけりとおもほして、あなをさなや、天下に
 いふらむとおぼす。十一日に御くにゆづり給ひてみかどはすぎくゑんにいで給ふ。まじう殿

の女御、御ともつかまつり給ふ。きささの宮はうちにおはしませど、ふぢつばのもろともに
 見給はぬを、夜晝おもほしなげきて、さらに人もまうのぼらせ給はず。こときみたちは皆ま
 ゐりつどひ給へり。まばしありて女御に御なし給ふ。たゞ今しもなし給ふまじけれども、藤
 つばをまゐらせ給はむとおぼしていそぎなさせ給ふ。こ宮ひにこ御太政大臣、殿の一の女
 御、今のおほと、二の女御、ふぢつばとをなし給はむとする時に、きささの宮のきこえ給
 ふ、「いかでか御なしつばをばなし給はぬ。さかしきよならばこれもばうのおやともなりた
 る。高き位にもなるべき人なり。かくみだるゝをりなればおろかくいふにこそあなれ。かな
 らずなし給へ」ときこえ給へば、みかど「二人は太政大臣のむすめなり。これは下らうにこ
 そあられ。あひついでこそはあられ御。これをしてはいかでか」ときこえ給へば、きささの宮
 「このときなしの御さかな物をななし給ひそかし」ときこえ給へば、「いかでかこれこそある
 なかの上らうなれど、おほやけに世をまづめ、久しうつかうまつりたる人の女なり。そのう
 ちにいとたよりなく心ばそき人にこそ。こゝにだにかへり見ずばいかせむ。なほなしてう
 しぐるまを梨壺にゆるさむと申し給へば、きささの宮「さもとごまかうさまに申す事をきこ
 しめさぬかな」ときこえ給へど、みなまゐり給ひてなしつばにはうしぐるまをゆるし給ふとす
 せ。かくて日の宮はそきやう殿に、こ大臣殿のせんよう殿、いまのはれいけい殿に、左の大臣
 殿のはやが御てふぢつば、式部卿宮のはとうくわ殿、右の大殿のは御なしつば、頭中納言
 どの、君とらくわ殿にすませ給ふ。御なもみなまか申す。とうくわ殿は女御になり給はず。

御父宮よりはじめたてまつりて、かゝるはぢを見ること、おぼしなげきてまゐり給はず。せ
 んよう殿はふくにてさとに、みかどはひさしく人もまうのほらせ給はず。後くはゆづりの
 所七字。かくてささいの宮のおぼすやう、同じ日ばうをすゑすなりぬれば、今はしにくかり
 ぬべき事、一の人の心だに一つになしては、ことんおやにまたかはざらむやはおぼして、
 ひがんのほどによき日をとりてさるべき事おぼしまうけて、ささいの宮舞、まうち君舞に、
 左のびてものせむ、院さこしめしてもあしく、もの給はじ、右大将をだによきむこに左給へ
 ば、これもとしもまたわかう、かたちも心もめやすく、世の一の人にもあればなどおぼし
 て、大きおとゞに「さこゆべき事なむある。こよひこゝに左のびてものし給へ」とあり。おと
 いあやしくかゝるほど、よき日といふなる日しもかうかうの給ひつれば、ばうさだめのこと
 にやあらむ、わづらはしとおぼして、「かしこまりて承りさふらひぬ。さふらふべきよしおほ
 せられたるは日ごろいたはる所侍りて、院にもうちにもまゐり侍らぬ。いまけふあすまでし
 てためらひてまゐり侍らむ」ときこえ給へれば、宮くちをしういかでかこれよびとらむ、天
 下には思ふ人もたりとも、わかみこを見たてまつらむ人はおろかにはわらじと、御心ひとつに
 人にはいはでおもはず。たびたびきこえ給へど、まゐり給はず。かくてふぢつぼの御方によ
 るこびきこえ給ふとてこれかれわたり給へり。大宮も式部卿の宮の御方もおほきおとゞ、兵
 部卿の宮、民部卿殿の北の方も舞わたり給へり。かならずなにかはと思へる事なれどあやし
 くさまたげられつるやうに聞え侍るを、「かくてとだに」との給へば、年ごろはかしこの國の

守舞ごとによりて思ひなげき、心にそこなひたるやうにて、ゆみづ舞もまゐらずものし給ふこ
 そいとみぐるしけれ。子もたるも苦しげなる物にこそ。大宮「いでや、こゝにもこのみか舞ど
 をとぎまかうぎまに思はゞおぼろげにやは。ほとほとかくもえあるまじきにこそは聞えつ
 れ。又いかなるはぢをも見むとすらむとぞかしこにも思ひなげかるめれ」。おほき大い殿、
 「その事いとさわ舞がしかりなむや。一日も后宮からめすめりきや。たびたびになりぬれど、
 わづらはしとてまゐりたまはずなりにしげしきを、それはかやうのすぢなるべしとは舞申せ
 ど、さらにの給はせぬと舞おぼろぐなむ」。大宮「かたがたとぎまかう舞まにたばかり給ふめ
 り。たいこゝにはおとゞをのみたのみきこえたる。さりとともひとつ心になり給はずばとこそ
 おもへ」。北の方「かしこきはよにもかくもおぼしさわぐぐるしきこと、こそおもはれた
 めれ」。大宮「いさや、いとわやしきことをぞ人いひつるや。まことにやわらむ、おとゞをわ
 りやんとなき所にとりこめらるべしとや舞。それこそいとおそろしきたばかりなれ。北の
 方「いづこにかゝきこしめしつるぞや」。ささいの宮の姫宮にとかや」。北の方胸つぶれて
 「あな心うや、さもあらすかし。こゝにはさるけしきもなきはかくさるゝにやわらむ。をさな
 きものどもあまた侍るに又も見まほしうて侍るにさぞ舞なたいとめてたておほする所に
 とりこめられなばかへりみもせじ。いかさまにせむ」とけしきわしうてきこえ給へば、「いさ
 や、さぞいふなりつるたしかなる事にやあらむ。北の方よりへたびたび忍びてとぞあるや」。
 宮「すぢく院は一の宮よりまさはるはなしとぞおぼしたなる。それはちひさくよりおぼしつき

たればにこそ。かの宮さらにおとり給はざる。またかたなりにておいとをかしげにおはすなり。いますこしねがひ給はしいとようなり給ふべき人にこそ。北の方、二の宮思ふやうにおはすなり。いかでみたまつる物にもがな。大將こそうらやましくめざましけれと時々給ふを、二の宮さらにおとり給へば、よもあしと思はじや。民部卿殿のこにもあめとのいふとていひまろひなどせられたりけり。それはたゞこの事に振よりよろづの事をすとてたばかるなめり」など女御の君と御物がたりし給ふ。新中納言のみことはよべきしめしたりはや。いとこそをかしかりけれ。かの三條にむかしの人をむかへおきて、さも知らせでおのが侍るぞとてぬてまかりたりければ、そで君のあらぬ物に思ひなりてあんなるを、おのれとみなしたりけるはいとこそあやしかりけれ。されどおのが方々なむいとうとく心にもあらぬやうに物せられける。をのへとてかへり給ひけるを、一口なむこゝにものせむとておはしたなるが、かの北の方こそいとよき人なれ。かしこにはいとめでたき物にこそせらるなれ。中納言をばいとよき物にして、いらへもむかしはこそよきこえざりける人は、今はおやはらからのごとしておやも子もさしむかひてあるにこそいふめる。女御の君」とし征ぶるいとあやしめて、ところどろに物せられ給つれば、かの中納言たいめんしてなほかくてをとこそものせしか。かのそで君のよくおいなり給へるを、いかでうちにまゐらせしがな。むつまじき人のいとたてまつらせまほしきを。北の方」さなむ思ふとあらばいとよくたてまつられなむ。今ことのついであらばかしこにものし侍らむ」ときこえ給ふ。すざくる

んの女御の御もとより「かならずかならずあるべきこと、おもう給へしかど、うたてきしるふ人がちなりけるを、かく物し給ふをなむ。今ひとつの事をうちの御よりいこそは」ときこえ給へり。御返り「うけたまはりぬ。のたまはせたる事は、もしまゐることあらばかちはしりのくるしかりしをのみなむ。さてものたばかりは、そなたがいとさまさまなるを、あぢきなき人々の御ためにさへあへるめなるを思ひなげく」ときこえ給ふ。藤大納言「殿の北の方はたちぬる月のつごもりにこそ子うみ給へる。またさまたち給ふは」と御つかひしてきこえ給ふ。源中納言殿より「参りまうで、聞えさすべけれど、こゝに日ごろなやまる、見給へゆづる人もなくてなむ。いとものうれしく、いつしかとまち聞えしやうにおはしますなるを、ないしのかんの殿たちなどには物やつかはすべき。さらばの給はせよ。こゝにもものし侍らむ」と聞え給ふ。御返り事、「うけたまはりぬ。なやみ給はむはいかやうなるにか。さらけうけたまはりざりけり。まち給ひける事は時すぎたるやうにては、めのとたちはいざやさするものにあらむ。いざさらはさきこえむ」ときこえ給ふ。「一の宮より」日頃おさましくかしらもたげられずありて、え聞えざりつるほどに、思ふにもまゐる御よろこびあなるをなむ。これはさるものにてかのことなむねんじきこゆる。こゝにあめるものはあやしき事あなるを、さらにしり侍らぬを、もしたれたれもおもほしやうとむらむとぞいとほしがきこゆる」ときこえ給へる。御返り、日ごろはなやませ給ふなるにみづからはまゐるべけれど、えさむ侍らぬをなむ、おもほしけることを、いざや、このころの花ざくらばかりにこそ

思ふ給へらるゝ。給はせたる人の御せうそこはさる御心のなからむこそひがみたるやうにはかくの給はせたるをなむ、たのもしうはきこえ給ふ。左大辨どの、北の方かくてのちはおもはしうん^たじて、おやはらからにもきこえ給はず。よるひるおぼしなげきてなき給ひつゝ、よき事もあしき事もあらぬやうにてへ給へば、えきこえ給はず。おとゞはこの君をぞわたくし物にてらうたくし給へど、心もゆかずのみおはす。兵部卿はこゝろすぐぬし給ひて、のちまた藤つぼにたいめんし給はざりつれば、年ごろの御物がたりきこえ給ふとて、せちにとゞめきこえ給へど、またわたり給はず。かくて御かたがたも大宮、をとこ君たちもみなおはす。御さうぞくどもはわはせ一かさね、御こうちきどもさまざまにいとさよらなり。ようざりになりて、太政大臣殿より御むかへたてまつり給へれど、「こよひはこゝになむ」と聞え給へば、おとゞ例ならずあやしとおぼしておはしたり。北の方は「いとせばうてこれかれものし給へば、さらんたいめんすべき所もなし。かへらせ給ひぬ^れ。今日二日ばかりありてそなたにを」と聞え給へば、おとゞ「あやしう例ならずのたまへば、さゝならぬ心なむ。おどろきながらなむなどからははるけくに^はの給へる。唯こゝもとにいで給へ」ときこえ給ふ。大宮「なほたいめんし給へかし。この御あやまちやある」ときこえ給へば、「かゝる事のありけるをあらざりけるがにくければぞや。あぢき^ななや^な」ときこえ給ふ。すのこにおまじまゐりて左衛門のかんの君、宰相中將、左大辨など侍り給ひて、「おはしますべき所にこれかれものせらるべければ」とてするたてまつれり。御前へにこなたの御はらの君たちみなおはする

程に、きさいの宮はこの事をいかでとおぼして、姫君をたまのごとくつくろひみがきたてまつり給へか^かし、天上^下のきちまやう天女をもたるもの、えびすなりとも、わか宮をばとおぼしつゝ、たびたび御せうそこをきこえ給へど、かくやまひ申しをのみ^たしつゝ、まぬり給はぬを、われまことの天地にうけられたるくにおやならばまはづさじとおぼして、昔わかこ君をもとめし中將の母北の方のせうと宰相になりて、わかくてうせにける子の、ちひさかりけるをとりてやしなはせ給ひける。今は宮の権のかみになして、いとやんごとなきものにま給ふ人、いとかしこよろづたゞしうおほやけ人なり。大き大殿もおなじ御まぞくにてなれつからまつる人にて、御文を書きてとらすとの給ふやう、「これ人にもたせて、ふところにいれておほきおとゞのみもとにもてゆきて、人づてならで御手にたしかにたてまつれ。なやみ給ふとてあるは、まことか、そらごとか、たしかにあないしていへ」との給ふ。かしこまり給はりてもてまぬるに、この南のみかどに大殿の御車御前など北にたてり。こゝにおはするなるべしと思ひて、おりていり見れば、おとゞこれかれしておはする。宮のすけせうそこ申させて、唯まうでに^ままうで、みはしのもとに侍るを、とく見つけ給ひて、何ぞとならむ、これに見えぬることわづらふよし申したる物とおぼしてものたまはず、みすのうち集まりてたちさわぎ給ふ。左衛門のかんの君「宮のたいふのあそん侍り」と申し給へば、「何事によりてぞ」とはせ給ふ。宮の御つかひにさぶらひつるなり。これまのあたりにてまぬらせよと侍りつるく^ただしの侍りつれば」とてふところよりみちのくに紙にてある文を藏人

の少將の君してたてまつらす。みすのうちは「さばれよ」とてあつまりてまどひ給ふ。北の方は、あをくさの色になりて、「こよひよびもていなむするにこそあめれ」と涙をながしてふしまるび給ふ。こと人々いとはしとおぼゆ侍。おとゞはむねつぶれておけて見給へば、「せちなる事ありてたびたびものし給ひつれ侍ときこゆれど、なやましげにてとのみあるを、さしもおはせぬさまにうけたまはるはをこたり給ひけるにや。たゞあからさまにたちながら物し給へ。かうかすにもあらず、人あなづられなる身にはあれども、昔の人々假世にあらむかざりはおぼしからむ事きこえおはせてあれとこそなたまひしか。よろづのうれはしからむことをも、誰にかはきこえむとてこそかならず」と言ひかき給へり。見給ひて「ゆめにもこのこととおぼさで、この春宮さだめの事にこそあらめ、かう御せうそなとあるにおもほしうとみて、いとゞあひ見え給はじとおぼして、いといとほしくおもはず。うちにもかゝる事を知り給ふれば、かゝりごととおもほして北の方は「うづぶしうづぶして泣き給ふ。おとゞかしこまりてうけたまはりぬ。ひごろはみだれあしのけにや侍らむ。さらに文たてられ侍らず。たちうごきも志侍らぬを、年ごろわひかへりみ侍らへるもの、おやのもとにまうできて、にはかにわづらひ侍りていとあやしくなむとつけまうできつれば、むなしくもこそなり侍れ。見給へざらむやはとて見たり。車ながらまかりおりてなむ昔の事どもはなにかおほせらるゝ。よろづの事いかでとのみこそすこしもふみたてられ侍らば、参り侍らむ」とておしつゝみてたてまつり給ひつ。宮のすけが御もとへ参りてたてまつるを御らんとて、「いづく

にいかやうにてあひつる」ととはせ給へば、左大臣の家のふぢつほの女御のものし給ふかたに、くぎやうたちあまたこれかれしてなむものし給へる。宮心ちやむとあるはさあるにや、くはしうはえみ奉らず。車はもんのとにたちて侍りつ。すのこに「ことなる事もなげにて」なごきこゆれば、宮なほさかじと思ふなめり、まけしあしやむといふはてぐるまのせんじを申しくださむなど思ふ。おとゞなほすのこにおはす。よのふけゆくまゝに八月十七日ばかりの月のやうやうたかくなり、御前のやり水、せんざいさまさまにおもしろく、虫のねもあはれに、風も涼しきまゝに、北の方かくてのちわが心とこそおやの御もとなどにおはして、よそなるをりもあれ。おそろしき所にとりこめられなばいかさまにせむなどおぼしなげく。こと人々ももやのみすのもとにあつまり、おはする所のいとちかければ、おとゞの給ふ、「今まぬりたらむ、わらはべのやうにみすのとにさぶらはせ給ひて、うちにこれかれ御らんずることほしたなけれ。例ならずかゝるはうちの御方御の御もてなしにやあらむ」なごきこえ給へどいで給はず。よひと夜おはすれば、君たちえたち給はず。曉におとゞかへり給ふとて御せうそこあり、「よろづあやしくならはぬ心ちこそよきものゝまなもや、

世の中はかゝるものともまらつゆのおき居てきゆるけさを去りぬる。おいのがくもんをなどなむ。唯今わたらせ給ひねとて御むかへにたてまつる」とあり。北の方御かへりもきこえ給はず御せうそこもなければ、御むかへの人は日ひとひたちくらして、かへりまぬりて「ともかくも仰せられず」と申せば、あやしとおぼす。この御はらの君たち四所、十一なる

をこのかみにて四つ五つなるおはす。七つにおはする女君ぞち、は、いみじうかなしうま
 給ふ。女は、それがかぎりかゝるほどに御即位廿三日あるべし」との、しる。みかどはかゝる
 ことをなにもおぼさで、たゞ藤壺のまわり給はぬを、よるひるおぼしなげ、ど、御つかひ
 も久しうたてまつり給はず。後の宮きこえ給ひし事をのみ心うしとおぼしつ、御つれづれ
 とながめおはしませば、御めのとたち、命婦、藏人などは「かゝるもの、初におもしろくけう
 ある事をこそかくものをのみおぼしなげき、日々に御かたちのおとろへおはしますこと」
 などいふ。女御更衣たち参りあつまりて、「身のかひなくて、とてもかくてもめづらしからぬ
 世なりや」などいふ。かくて御即位になりぬ。かんだちめ皆まゐり給ふに、おほきおとゞいと
 ま文いだしてまゐり給はず。御心もゆきかすよろづの事もろともにとおぼし、人に見せ
 ぬごとくおほせど、これかれそ、のかしきこえ給へばいで給ひぬ。舎のことなりぬれば、上
 達部ぢんにての給ふ、「おほき大殿のかゝる大事にまゐり給はぬかな。いとま文いだし給ひ
 つればことになやみ給ふこともなかななるものを」との給へば、又こと人かの北のおやのも
 とにこもりぬ給へれば、ちひさかりしこどものさわぐなるをこそもてあつかひてものし
 給ふなれと、右おほ殿、右大將このことの聞えのいできたりにこそあめれ、さは思ひしこと
 ぞやなど心の中におもはず。大將、とう大納言などは大きおとゞをだにかくしたてまつり給
 へば、ましていかになどおもほしつ、かくてかうぶりたまひに、みみな人加階玄給ふ。大殿、
 右大殿二位になり給ふ。東宮のすけ四位階こえてかくしの右大辨三位になる。いへあしの

ゑもんのせうかうぶりを給ふ。女かうぶりに女御更衣みなかうぶりを賜はりぬ。めのとたち加
 階す。くら人たちがかうぶりをえなす。かくてつごもりにつかさめしころ、右衛門のかみか
 けたる宰相なくなりければ、宰相には右大辨すゑさ、右大將あせちかけ給ふ。右衛門の
 かみに兵部のたいふ、いとかたくなり給へりと世にいふ。兵部のたいふあきすみ右大辨に、
 東宮の亮これはいたの藏人右衛門のぞうになりぬ。かくておほき大との、北のかた、東宮の
 御もとにわたり給ひて、おとゞの御せうそこはあれど、御返りもきこえ給はず。まことにも
 のの給へど、たいめんし給はず。宮もおとゞも「あぢきなし。はら人にもあらず、心のかはり
 給はむにだに身ひとつにもあらず、こともあまたあり。かくものし給ふめればわすれはてじ
 とこそ思はめ、かくのたまふめるをたいめん玄給へ」ときこえ給へば、北の方なにか、あまね
 う人にまられぬさきに、かしこにもかうのたまふ程に、おのが心とさりはべるやむと
 なむ、これかれみならひもあるものを、おのれしもかしこき心にわすれしとなむ、たゞつき
 たりしめのとなくてふところのみにならびたる、このもとめなくなればらうたさに、とぎま
 かうさまにたばかりてむかふれど、ゆるされぬをのみなむいと悲しくはとて、物もきこえ給
 はねば、おとゞかくやらむことなきをりにも参り給はず、きみたちをのみもてわづらひ給
 ひつ、姫君をば北の方のいとかなしう玄給ひしかば、これ身にはさりともしわたり給ひなむ
 とおぼしつ、めをはなち給はず、まもらへておはする。右の大との、き、給ひて、さ思ひし
 ことぞや、ささの宮にもまかきこえてきかじとおぼす。右大將われもかゝるめをやと

おぼしおぢてありきもま給はず。よるひるそひて御せうそこあれば、まつりに侍て人のまゐり
 まかでなど歸すれば、車のおとすればたづねとはせ給ひて心ゆるかびなくおぼす。かくて
 すごくぬんにはこと人々またまゐらせ給はず。まゝ殿の女御のみいで給ひし御もとに、つ
 かうまつり給ひてさぶらひ給へば、うへいまはかく中宮もうちへのみこそは、こと人々はま
 ゐりもせじ。そこにのみはそひて御子たちはあまたあれば、むつまじき物にはたゞ人のやう
 にこどもまへにすゑて、つゐに驚ならびてあらむと思ひなむとて、御局ひろくつくりまつら
 はせ給ひて、殿上人、かんたちめもさりぬべき御前にさし車どもなどして、「女御たち一の宮
 も参り給へ」とてたちまゐらせつれば、大將「このころいたくそなはれたまひにためり。
 さあらざら給ひ時ことさらにもまゐらせたてまつらむ」とてとゞめたてまつらせ給ひつ。こ
 とはまゐり給ひぬ。うへ見たてまつり給ひて「一の宮をこそこともなしと思ひしか。これも
 けしうはあらざりけり。びは、まゝうのことの上ずもがな。このみこたちのれうにせむ」と
 のたまふに、男みこたちもみなおなじ所にて、よるひる御遊びせさせ給ひておはします。
 御めもたまへるはよるはまかで給ふ。彈正の宮はよるひる侍らひ給へば、うへ「なかこの
 宮たちの見るかぎり、まかでぬはさともなきようする人のなきか」と申し給へば、女御「これ
 かれさものする人侍れど、いかなるにかかくひとりのみぞ」ときこえ給へば、「もし藤壺をや
 月みるやうに思ひけむ。さねたゞのきやうこそさやうにきしか。それだにいまはさもなか
 なるものを、それ山里に侍るまゝにさぶらひしとてよろこびにまうできたりけるを、いひこ

しらへはべる。それは時々京にかよひまうできけるを、民部卿のいひたばかりて侍りける
 にこそ。うへ「あやしき思ひしはこしらへられにたりけるにこそは、こゝろさえおぼす。あ
 まほしう、かのあそんは山でもりこそあいなかりしか。女御「いでや、いとさいはひなく侍
 りける人にこそ。わかきみやまのまたうまれたまはず。さるけしきはべりける夜おもふやう
 にてあらば、かならずまかせむ」とのたまはせければ、おやもこれかれもさ思ひてはべりけ
 るを、かゝるをりふしにもかくやんごとなくさまたげ給ふ人のいで給ふめれば、ちゝは、今
 まで世にはべりてかゝるはぢを見るこそとふしまづみて、ゆ水もたえておぼもひなげきは
 べるなれば、おやをなげかするにまざるさいはひなきことはいづくにか」ときこえ給へば、
 うへ「世にさちぎられたらばたがへられじ。我ら侍が心には似ず。さる侍所し給ふ人のみ
 心なれば、ある所かゝるときこえしかど、あるはまじきことと驚え侍ものせしや」とのたまひ
 て、よるひるものし給ふ。こゝはまゝ殿の女御の御方。ささいの宮きこしめして思ふや
 うにこどもひきいで、我がまゝにはためぎしやとおほして、右のおほとのに御せうそこ
 奉り給ふ。「たいめんきこえまほしけれど、これもわづらはしくま給へばなむものし給へと
 聞えぬ。大きおとゞにきこゆべきことありてたびたびものし給へときこゆれど、なやむこと
 わりてなごきこゆれど、さしむらぬやうにかのことはいかおほしなりぬる、そこにもや
 むかしのけさう人の心つゝましなむとて、ながき世のよろこびとあるべきことをもせしと
 はおぼすらむ。こゝにはよろづにおもへど、人にあひつゝいひかたらふべきにもあらず。か

の人にもわひつゝ、いかにかたはらひ給ひつゝ、よくいひかたらひ給はし、さりともなむ。大將そこにや
 んどとなくおぼさむことを、なにかさまたげむ、さらばこともな見給ひそかし、天下にかし
 こき君なりとも、おやの見給はざらむには、いとわしからむはよがたりおきなを語らひてこ
 そことはなどしけれ、五人の心を一つにて昔よりかうなむある、この事ゆるされずば山林に
 まじりておほやけにもつかうまつらじ、なにをいさみにてかと申されば、さりともえいな
 び給はじ。この事になはざらむ人をばかくかすならず思はれたりとならば、この世にもわ
 の世にもふかくつらしと思はむ」とあり。おとど「大將をな見そ」とのたまひつるにおどろき
 て、ばうをばすそす。大將のおろかにはいかにおもはむ、かくの給ふがおそろしくかしこき
 こと、おぼして、御返り事、「かしこまりてうけたまはりぬ。仰せられたること世にいかでか
 難と思ひ給ふれど、わひかなふ人の侍らぬになむ。今かたがたのたまひかたらひてきこえさ
 せむ」ときこえ給ひて、大將の御もとに宮よりかくなむとて奉り給へれば見給ひて、人にも
 見せてかくしつ。こゝはへる。右大將殿、宮の御方右近のこきみといふ人、御まへにてき
 こゆるやう、「宮のすけ大臣にておもふやうにておはしますまはまかるらむと申す人はべる」。
 宮「あなさま、にくやと心たがへなり」との給ふ。人々おほくまゐりつどへり。人のたてまつり
 たるものいとおほかり。こゝにて宮めのとだちなどしてあそび給へり。との、れうちひきか
 へたるやうに、人多く参りつどひて、いちのことの、しる。かくてうちより始め、せかいにの
 しりていふやうには、（かき）「なしつぼの御はらのなむ給ふべき。ささいの宮よるひるな

くなくきこえ給へば、みかどさおぼしなりににたんなり。おとど「たちはしらぬやうにて、みな
 も心ひとつにてなむものし給ふなる」といひの、しる。右のおとどは御むこたちをつらし
 とおぼす。御むこたちかくいふことをいかにおぼすらむ、夢にてもしらねどなかたみにお
 ぼせど、たれたれも物もきこえ給はず。女御の君につき奉りつゝ、物のぞみせし人々一人め
 に見えず。わか宮の御方に参りつどひし人々もまゐらねば、ひきかへたるやうにいとしめや
 かにながめおはします。うちよりも久しく御せうそも見えねば、おとどこの事じちにさだ
 まりなば又の日はふしになりなむ、なせうにか世にへまじらふ（かき）とておぼしなげきて、君
 たちもみなつどひてよろづにこしらへ給へとおもほしなぐさむべくもあらず。藤壺はよろ
 づにおもほすとももの給はず。御かどの御心をあやまりにたればこそは、人はかくはわら
 歸ふらめ、かくいふもまなじな御かへし聞えね、たちかへり給ひし御つかひも見えぬはいか
 なるにかあらむ、このことはげにげにさなりとて、おとどものたまふやうにのたまはし、我
 もあまになりなむ、なにか世にまじらむとおもほす。宮たちをみたてまつりておはす。わか
 宮はなに心もなくあそびありき給ふ。かくいふほどに十月になりぬ。大將、宮にきこえ給
 ふ、「世に人のいふなることは、こゝにも知りて侍らむやうに、さへ給へらむがいとほしきこ
 と、おのづから御らんすらむ。御即位にまゐりてはべりしまゝに、院のかくたいにおはしま
 すだに参らず。三條にもまからではべるはしり侍らぬよしを、ひと所に御らんじてはつみに
 はわて給ひしとてなむ。大きおとどひとり月をろおぼしなげくなるを、人の御うへとも

うけたまはらず。こゝには御まへわづらふべき人あまたも侍らねど、ひと所の御心を思ひ給ふるもおそろしくなむ。宮「それは人の志給ふにもわらざなり。たいめし給はぬをこそたれも^賜たれもの給はずなれど、さゝやうありとてさうじみこそたいめん賜はざんめれ。こゝにはさやうにたばかりな傳とも志はてられむやうをこそ見侍らめ」。大納言「なに事をいかやうになるすぢに宮みなつどはれてこそさだめられけれ。志らずがほにも」。大將「すべてこの事なのたまひそ。さらに志り侍らず、さるはこぞよりみづのを山ぞもりとぶらひにまからむといひ契りて侍るを、花ざかりにもとかくさはりてものせずなりにしを、この頃もみぢのちらぬさきにとてまかりいでたんなるを、一二日はべらざらむ程のうしろめたければなむ。さあらむほどと^驚あからさまにわたり給へど、ゆめわたらせ給ふな。まかりありきてまうでくるに、こなたにおはしまさぬ時は、いとたよりなくわびしくなむ。なほさきこゆる心あり。かへりまうできなむ。またせ給へ」ときこえ給へば、宮「いづちかくるしくのみあればふしおきも心やすくてこそ。日頃はこれかれものし給はねば、人すくなにてさうさうしきを^舞のみなむ」。大將「それさぞげにおはしますめる。このひんがしのたいに侍る人をめしあげてさぶらはせ給へ。ことなどいとようひきてさまさまにせぬわざなうよき人なり。心などもきよげにはべるめり」。宮はづかしげに、「かくいとことやうなるこゝろしも、いかでか大將には^似いはづかしう侍らぬ人なめり」とてまうのぼらせ給へば、いとめやすくさうさきてのぼり給へり。かたちもいととおとなおとなまうさよげなり。宮御ことたまひつゝひかせ給ふ。いとおも

しらくひき、さまさまにいとらうらうしくをかしき人えつとおもほす。あせちの君といふ大將どののたまふ、「水のをへまかるなり。御せうそこやある」。あせち「かくあらはれて侍りてはちはへなる物を」と聞ゆれば、大將に「よにさもあらじかし^舞。いとよくほめきこえなどす」との給ひぬ。宮をかしげにてひとりだちし、歩みはじめ給ふほどなり。父君見^舞たてまつり給ひて、「こゝにかくむつまじくなしたてまつるはこのこによりてなり。火水にいれども、宮はみもいれ給はず、ゆのとどもの限は、うしろめたければなむはべらざらむほどにいだし給ふな。いとあわたしくいでつゝ、人に見ゆれば見ぐるしくなむ。うへつほねなどしてかくてもものし給へ」とのたまひおく。宮に「今いとこまうできなむきこえさするやうにを」といで給ふ。そこにてそれかれまちつけ給ふ。山ぞもりにとらせ給ふべき物とてみぞびつひとかけに、ひつ一かけもたせ給ふ。ほそをといふもたせ給へり。御ともには御せん六人、御うまぞひ六人、御前二人は四位、二人五位、二人は^舞やんごとなきつかさある六位、みずるぞん四人、さうしき六人、さうぞく白きろうの指貫、あを露くさしてろうすりにすりて、白き綾のうちき、あをうま、御ともの人よりはじめて、さまさまの志ろあをな^舞ん^舞んにきたり。中納言はあか色のおりもの、青にびの指貫、綾かいぬりの鞋、あかうま、御前二人はおとれり。山もりといふこともたせ給へり。右大辨は青にびあを、その他はみなおなじ色のあを、みうまぞひ四人せいありて、かくさうどむが、御前四人、すさいふたり、志、ふたり、御ともの人みなながくの志うの下らうなり。頭の中將は青色のあを、あを志ろの指貫、うす色のあやのう

ちき、とんがの人かくのごとし。びはもたせたり。うたのかみ権のかみきんもたせたり。うまのすけちかまさはわごん、左衛門のひるのぞう時まさ笛もたせたり。これかれさうぞくは心にまかせたりし。わらは四人、法師四人、どうじ六人、これもみなようさうぞくみなとへのたり。この人々の御と臨んにかゝる物の上ずのかぎりおはしつどひて、系ようさがし給ふべしとて人のかすすくなくえらるとて、我も我も見きかむと思ひて、さうしきはやんごとなきさぶらひの人ぞいでたつ。みぞびつ、わりごもちにはさぶらひたつ。かくて二條の院にあつまりて、そこにてあるじなどしていでたち給ふ。大宮のおほぢより北さまにのぼり給ふほど車どもいみじくたてつゝけ見る。かちち人もいとおほかり。まのびてやんごとなき人ども、なほほかゝれる中にも、大將はいとこよなう清げなり。山ごまで御おくりの人いと多かり。いたりつき給ひて麓より「むかへにものせよ」とてかへされぬ。みづのをのみち七字イ。かくていたりつき給ひて、山ごもりは年ごろだうなどもいとひろくいかめしう、瀧いとおもしろくおとしたる所にすみて、里なりし女子むかへてもものならはず。山いぬ、里いぬといふをのこいどもにさうふき、よこぶえふかせて、さうのことむすめにならはしてゐたり。夕ぐれにうちむれておはしたれば、山ごもりよろこびかしてまじり聞え給ふこと限なし。まつのもみぢの林におましなかたしきてみな給ひぬ。まづつかれ給ひぬらむとて、山のほふしばら、わらはべいだして、をかしさからさひろはせて、おまへにまろがねのまがりなどとりいでゝをのかいしかせ、おまへの朽木におひたるくさびらどもあつい物にせせ、にがたけなどで

うじてまろがねのかなまりにまいれつゝまれば、きみたち興じつゝめしそへつゝまろり、御ものがたりなどま給ふほどに、御わりごどももちて参れり。とりさがして山ごもりのみでし、どうじ、そのへんのもの、この君につかうまつるなどめしあつめ給ひて、御くだ物ばかり御まへにはまぬれり。御みきたびたびきこしめして物のねどもかきたて、山風はもみぢのちりたるをばふきたて、えだなるをばちらしなどするゆふぐれの興あるにま、まづよりかたのうたのかみ、おほきなるきのふしのいとをかしきをとりて、山ぶしと御かはらけまゐるとて申す、「ごんのかみはむかしのいさゝかの御ありきにもをくれたてまつらすこそつかうまつりしか。かゝるみちにおもむたたまひにしより、つけさせ給はましかば、御ともにつつかうまつりて御でしにてもさぶらひなましものを、世の中にまじらひはべれど、なにのいさみもはべらぬ」と泣く泣く御かはらけ参りてまがのくやうも侍るなりとて、
「吹きわけつさそひしとの山ふかく尋ねて君を見るがかなしさ。山ごもりに今日は」
などて、

「谷風のふきわけを縁かひもおもほゆる山のにしきにまどひせるけふ」。大將も、
「もゝまきのむかしのともを見にくればわらしの風もにしきをぞまく」。中納言のきみ、
「君をのみたづねていまは秋山も紅葉もふかくなりにけるかな」。右大辨、むかしのとう
えいなりしほかげすがたおもひて、
「七夕のあふ夜ぞわれも君を見したれも心のめづらしきかな」。りし、

「かぎりなくうかりし身だにありはてぬ山にて君が思ひをぞ知る」。中將、
 「君をだになしとなげきしも、しきにありし夜さへもかはりぬるかな」。うまのすけ、
 「君によりまぐる、袖のふかき色をおれるもみちと里人や見む」ときかげ、
 「いにしへは君がころもに見えし色のいまはやまべにちりまよふかな」とて中將は琵琶、
 山どもりまやうのこと、權のかみきん、ちかまさおごん、ときかげよこぶえ、右大將の御もと
 なるぬひどの、かみさうのふえ、またそれらが中にひちりまよふものとふきあはせて、こと
 人々はまやうかし、うたうたひ、よひと夜あそび給ふ。ところどころに見やれば、とほら火を
 たきてその山のめぐりの山ぶしにたにあり。ちかう見れば火を山のごとくおこして大い
 なるかなへたて、くりをてごととにやまきて粥にこぼさせ、よろづのくだ物くひつ、人々の
 御もとなる人にたびぬたり。夜ふけゆくはつゆしもおく。よ一夜あそびあかし給ひて、つと
 めてになれば御かゆまるる。露にぬれたる御ぞどもぬぎかへ給ひて、山どもりの御とも
 よき人の子どもの四人あるに、よところながらとらせ給ふ。その日はだいいだして用意しつ
 、文つくり給ふ。右大辨の御もとなるすさい一人は文つくる。一人はかうしす。かゝるほ
 どに源中納言殿よりひわりで、たゞのわりで、とじきなどいとおほらわり。御まへどもに参
 り、人々にもたぶ。よき物いとおほらうもてこみ給ひて、日くれて文つくりはて、よませ給ひ
 て、おもしろき句は皆すし給ふ。右大辨の御こゑはいとたかういかめしう、大將の御こゑは
 いとおもしろくあはれなり。夜ふくるまで文すんじ、曉かたになりて風いとあはれにこの葉

のあめの如くにふるほどに、りしだらによみ給ふ。大將いみじくめで給ひてさうのことひき
 あはせ給ふ。おもしろきことかぎりなし。山のも里のも、みな涙おとさぬはなし。まばしあそ
 ばせ給ひて、山どもり常の御もとにてだらにをよみ給ふ。中納言山もりめしてまらべまさせ
 給ふ。かくてまばしありてきみたちもろごゑにふみあそび給ふ。りし、山どもりのみ聲のい
 とたふときをさゝめ、かはらけとりてかく申し給ふ、

「いつとせし身だにはなれぬひのいへを君みづのをにいかですむらむ」。山どもり、
 「けぶりたついは思ひのくるしさにみもけちがてらられる水のを」。大將、
 「こゝにかくあるどちたれかもらざりしそでのみも、をにもぬる積みやほせし」。中納言、
 「人よりはわれぞけぶりの中なりし今もさえねとえやはいでける」。辨殿、
 「よをくらめはたるもとめしわが身だにきえし思ひのめにけぶりつ」。中將、
 「月わたるひのはとりにはありながらかわかぬ物は袖にぞありける」などの給ひつ、あ
 そびあかし給ふ。かくて日やうやうはれもてゆくほどに、かねまつ山どもりのみれうにかゆ
 のれうあはせ、いと清らにてうじて馬どもおほせて、ほしいひうま甘ばかりにおほせて、ぬ
 の、あをわたあつくいれていとおほらうませ、ながびつどもにいいいれさせ、酒をいれて
 もたせてまらで、山ぶしどもめしあつめていひ酒くはせ、ほしいひ、あを一つづ、とらす。
 大將もたせ給へりしにゆひつみぞひと舞つ山どもりにたてまつり給ふに、ひつにはせんから
 にぢんのあしつけて、蘇枳をあふこにして、まろがねのはち、かなまり、かひさし、てうじ、

みづがめなどよろづのてうどつくしいれたり。みぞびつには、御はふぶく一つ限なくさよりにて、よるのさうぞく、あやのさしぬきに、おりもの、青あやのうちどもなどして、そのあをに書きてむすびつけたり。

「露けて山邊にひとりふす人のよるの衣にぬぎかへよとぞ」。子どものさうぞく、女このもいときよらにまいていでまゐり給ふ。山ごもり見て、

「よをすてしこけのころもにぬぎかへばまたまたになはたは物もいこそおもへ」とてたまはり給ひぬ。中納言はさぬあやをいとくつにいて、供養のやうにて三所ばかりたてまつり給ふ。右大辨もいとをかしき物たてまつり給へりしはよろづのおこなひの具、ぼだいのすいよりはじめて、有用物を奉り給ふ。中將はすみぞめのさうぞく、うちき、指貫、くろつるばみのうへのきぬ、五でうのけさ、ぐしたるはふぶく三つ、くしうにさうぞくよくうへわねらはのれうに、けさのれうにけすのさうぞく廿二ばかり、どうじの中にみなし給ふ。これよりほかは心にまかせてをかしきつとども。かくてもものなどまゐりて、又の日はのづくり、その寺にも、めぐりの、御讀經せさせ、せんぼふさせなどし給ひて、そのよはとまりてとぎまかうさまにあそび給ふ。山ごもり、大將にきこえ給ふ、「むかし一條どのに侍りし人のたよりなげにて侍るめりしを、見給へすて、れまかりこもりて、年ごろいかではべらむと思ひ給へしを、とのになむかへりみさせ給ふとうけ給はるをなむ、ふかうよろこびかしくまり聞えさする。わいてもむかしだにようも侍らざりしを、いかやうにと思ひ給

ふるになむ。かたはらいたくは」。大將としごろさてものしたまうしをえうけたまはらざりき。こぞことのついでありてかしこにのたまひしになむ、おどろきながらさむとせし。これかれつどはれてさわがしかりしほどは、さしはきたるやうなりしかば、え三の宮むかへたてまつりてしかば、これかれはかへわたりたがむひなりにしかば、この三條のはけなりしかたになむ侍る。ひんがしのたいになむませたてまつる。さてもことにたのもしげなることもなければ、みづからをだに人にもま給はぬかな。をさなきもの、侍りめるをにくみきたなかるめれば、身にはらうたくおぼえ侍るになむ。あづけたてまつりてなむ侍る。いとめやすくらさくなる人にこそものし給ふめれ。君をのみ見たてまつりて、かしこにたいめんせざらましかば、人のいふことはそらごとになむ」。山ごもり「さだに御らんじなさばいとうれしく佛の御とくとなむ。このはべるわらはべもはたとせはべる身ひとつだに侍りがたげにうけたまはれば、こゝらめしあつめて、まつのはをもこの衣をも、もろともこそはと思ひ給ひてなむ、をんな子をさへものして侍るを、わらはべはいかで宮づかへもつかうまつらせむと思ひたまふれど、おやはたよりなく侍ればいかでかはとてなむ」。大將「いづこにかにせむとかおもはず。せむやうをの給へ。かのをば君にあづけたてまつりて、いかにこのことをうしろみたてまつらむこと、いとうれしきことになむ。むかしだにいと御まへにさぶらひがたかりしうへにはべりし。いまはたまはむ、東宮にたてまつらむとなむ」。大將「ふちつぼの一の宮こそはそれはさらにたゞの人とは見え給はぬ。いまながらうちの御

けしきにおとり給はずいと御おぼかしこくなむ」。山ごもり「またうけたまはるやうか侍る。さらばましていかこれらがためにうれしうさぶおぼらはまほしう侍らむ」。大將「あなうたて、なでふさることか」。中納言「さりとみなさだまりたるやうにこそ、ひさへとられにたりとか申すなる」。大將「すべて知り侍らず。こゝにはしのびてなむ」。中納言「御心にこそ忍びてとかおほせど、こと人がしか思ひたらざり。さもはたおほえたることなれば」。大將「おのづからつひには見えなむ。ふぢつぼはえさやおほすらむと思ふのみこそいみじうかたはらいたけれ。それもおとなしきこゝろづき給ふめおぼれば、さおほすやうもわらむなどてさらばこのわこたちはけふもいさかし」。山ごもり「今年ばかりはものゝねすこし聞きまらせ侍りて、としかへりて奉らせむ」などこれかれおほく御ものがたりおほくしてかへり給ふ。御さうぞくどもは白きあをわたいれてまろがねのでいしてゑかきたり。あやかいねりの鞋、うす色のかうのさしぬき御ともおぼの人はうす色のあを、つゆくさしてとほやまにすれり。わたみないれたり。下人は朽葉色のあをなどを心にまかせてきたり。山ごもり、こども、法師、わらはべ御ともにてふもとまで御おくりし給ふ。きみたちは御馬ひかせてかちより、大將はさうの笛、中納言はよこぶえ、中將ひちりき、まつかた、ちかまさは御さきにたちて、れうわう、らくそんまひて、こと人々御るにたちて錦のごとくちりたるもみぢのうへをあゆみいで給ふ。山のあらしはいろいろのみぢ雨のごとくふりかゝれば、御あをにいろいろにつきて、ふもとにて別れをしみて歌よみて、山ごもりはかへり給ひぬ。きみたち御むかへにさまざま人おほ

七〇六

くまぬれり。大將、中納言の御むかへの野人おぼをたかてにすゑつゝまぬれり。かへり給ふまゝに野へごとにあさらせ給ひて、御ゑぶくろにいれさせ給へりし。大辨はたちにてわかれ給ひぬ。人々は大將の御おくりしてとのへかへり給ひぬ。御とも人あるじまうけてごせんにはかづけものし、御馬ぞひ、さうまきにはこしさせせ入りて見給へば、宮ありき給はでおはすればいとうれしとおほす。ことりどもいきたるは、いぬ宮にたてまつり給へばもておそび給ふ。御ゑぶくろなるはてうじて宮にまゐり給ふとてきこえ給ふ。

七〇七

「君がためこだか手にすゑ野邊にいで、まつむしりおぼくふ鳥をとりつゝ」。宮、

「たかすゑて野邊にといふはわがためにかりの心をまらするとやおぼは」とのたまへば、おもひてさおぼなとてあせおぼちの君にやまのありつるやうなど御ものがたりたまふ。こゝかしこおぼありきはじめ給ひてぞ院にまゐり給ひける。うへきこしめして御前にめしてもものたまはでつれおぼづれとまもおぼり給ふ。ひさしうありて「としごろかゝるすまひのかくせまほしかりつることも見まほしきこともせむとこそ思ひしか。なかか参られざりつらむとの宮もひさしう見ねば、むかへにもものし、おぼかど、とらおぼれにき」とおぼのたまへば、大將いとほしうくるしと思ひて、ものもそほらし給はず。ひさしうありて「としごろいたはるところありてまかりありきもえおぼ侍らざりつる。なかよりがはべる所にまかりて、あひいたはり侍りてなむ。からうじてまゐりてなむからうじてまゐりおぼはべりつる」と申し給へば、下おぼ上おぼをればみなひとりのせらるるとき、しか。なでふことかありし」ととはせたりし。

文どもなど御らんせさせ給ふ。こゝは院のい女御へいかくて山どもりは人々のたてまつり給ひしものども見給ひて、人々にたぶべきは賜ひて、わが御ようになるべきはなどして、中納言のかゆのれうにたとてありし物をば、こどものは、君のもとにやり給ふとて、御文には「日頃はこれかれ人々物し給へれば、さわがしくてなむ。いかにつれづれにとのみぞ。なほ人のあるやうにてあらまほしくおぼされば、さやうにてもわいてもこれに見たてまつりしやうにてもありにきとなおほしそ。いまの人の心はさしもあらじ。山のすゑよりも時々とぶらひきこえむにも、つきてものしたまひぬべうは、さても、

松風のさむきまにまにとしをへてひとりふすらむ君をこそおもへ。さてはこれはかゆのれうとて人のたまへりし。そこにてにさせ給へ。こどもとのゐ物わた多くいれて給へ。こひきこゆれど、まばしこともならはさむとてなむ」とてたてまつれ給ふ。をんなぎみ見給ひていみじく泣きて、御返り、「うけたまはりぬ。まうとたちいとめでたうはなやかにてまうで給ひてなりしをなむいとかなしうたまはりし。よ仕人のやうにてとか。いでや人に見えぬべき所なりとも、いまさらにはさる心をばいかでかさやうなるさまにて、ちかうはたにいかでとこそ。松風はそれをのみなむ。

ひとりぬる夜寒もいざやこけをうすみ霜おく山のわらしをぞ思ふ。このかゆのれうはのたまへるやうに」と書きてたてまつり給ひつ。きぬ、わたを見ればいとおほかり。おやにたてまつり給ふ。あせちの君のもとにはこに入れて奉り給ふい。ごたちも皆たまはりてひ

七〇八

きちらしてむしりなぞす。をんな君「むかしも今もこのふきわけのきみの御おくりをこそゆたかに見れ」とのたまふ。こゝは本に宮内卿殿いかくて三條の院には四面めぐりたちし馬くるまををさを見えす。ふぢつぼの御かたに一つもなし。大將とのいとおほかり。頭中將の御方にあまたあり。おほとのはえつとまゐる人々、きみたちの御くるまども、右大辨のとの、御方、武部のたいふかけたれば、此のころひしせむとて、大がくのすこの車あまたたつとくいいとかしこし。世におもく思はれ人にゆるされたり。かくしなりしかば、いまもみかど御心に御文いれ給へれば、つねに御前にさぶらひていとときそらすことも、いととくきこしめすかたちもこがともものし。北のかたにきこゆるやう、「むかしうちの院につるばきはだかにて、いへいにいつかいくふみの見ゆるかぎりはまゐらで、よるはほたるをわつめて學問をまはべりし時に、心ちつねにおもしろくたのもしく思ふことなく侍りし。今からおほやけにつかうまつり、かゝる御中にさぶらへど、ものおもはしうわびしうなむ。それはからみたてまつるかぎりおやにもたいめんま給はず。世には心にもゆかぬやうにてへたまへば、いきて侍るかひなむなき、つたなき人につき給へりとして、おやをかうしいたてまつるなむひがほみたるやうなる。おとゞは御前さらずめしつかひ給ふ。おほやけごといに侍つてなむ、おもほしかずまへたり。ごせんをもかくてこそおぼしめしかへりみたはめ。いとあぢきなき御ものはぢなり。世の中はかなきものぞや。ふぢつぼのむかしよりななり給ひて、おほくの人をいたづらになし、宮づかへをま給ふとてはかたはらほとりに人よせ給はず。すれ

なはちより子をうみ給ひしかば、ばうきさきかねとの、まられ給ひしかどおともま給はず。思ひかけざりし人の、昨日今日うちうみてま給へるこそはあめれ。かゝればかれはかくはなやかに見給ふらむ人々はかなうなりてすゑふ人々ひさしくならむとも知らず、大がく院のとうゑいといはれ侍りしかども、かんだちめのはしにまかりならずや、はかせとて侍る人の侍らぬをぞおもひ侍る」ときこゆれど、いでもま給はず。こゝは右大辨殿（七）。かくて春宮月のうちにお給へしと言ふ。右大殿、右大將どのには御みかどには人もさりあへずうま車たちいちのごとくのゝしる。さきい宮よりはひご（八）とに御せうそこあり。三條院にはうち御つかひも見えず。かゝることのすぢも聞え給はねば、おとゝ、ともあれかうもあれ、このことさだまりなば、又の日かしらおろして山にこもりなむとおもほして、さるべき所おほしまうけ、ほふぶくなどまうけ給へば、をとこ（九）もをんなきみたちもつとひてさぶらひ給ひて、泣く泣くさこえ給へば、おとゝ「我をんなとおほかるなかに、この子うまれしよりうたけなりしかば、ふところよりといふばかりにおほしたて、いかでこれをだに人なみなみにと思ひしに、ある時はたいめんにおもたゝしき時もあり。ある時はいとをかしきときもあり。こゝ（一〇）に（一〇）なほいかでと（一〇）思ひてもたりしに、これによりて人のうちみもいたづらになつといふと、人もさこえ、まひて宮づかへに出したてたれば、やすからずうらやまれ、いはれし人のかくひとわらへにはぢを見むを見ては、世にもまじらふべき」とのたまふほどに、「あすになりぬ」といふ。きみたちはよろづにさこえ給ふをも「すべて我がこのことさかじ。人も

七〇

いふな」とのたまひて、その日のつとめて、ぬりごめにさしこもり給ふ。大宮「われもなせうにかゝるめを見るべき」とてもろともいり給ひぬれば、きんだちは左右のとぐちになみだおさへてなきまどひ給ふことかぎりなし。その日ひるつかたまぬり給へとて御使あり。かくなむときこゆれどおともま給はねば、参り給はぬよしを申させ給へば、大宮大殿をめす。それもまぬり給はねばたちかへりめせば、いまはかくにはかになりたれば、我がするとも人も思ふべきにあらずとおぼしてまぬり給ふ。くら人の少將のきみを「左衛門のすけの君なほまぬりて物のけしきもあないせよ。こゝ（一一）にまぬり給へとありつるうたがひあり」とてまぬらせ給へば、あれか人かにもあらでまぬり給ふ。かくてとりのときばかりに、おとゝまぬり給へれば、うへともかくものたまはで、御すゝりとりよせて物を書かせ給ひてふんじて頭中將してたてまつらせ給ふ。おとゝみたまひて御けしきよろしきを、くら人の少將、これは我が御をひのみこなれば、おもふやうなりとおぼしたるなりとおぼして（一二）、我がおやはいたづらになり給ひぬと思ふに、色もかたちもなくなりてさぶらふを、うへ御らんじてをかしうあはれなりとおぼして、うちおほえさ（一三）せ給ひてすこしいさいで、おほきおとゝの御しりに（一四）つきぬ。「たち給へ」との給へば、御ともへのたまふことやありとけしきを見ありき給ふ。そのよはまきの御ざうしにとまり給ふ。そこにまうで、御せんにさぶらひ給ふ。あかつきにおとゝいとまをはからひて御文をいとちひさく書きてたまふ。たまはりていそぎいで、見れば、おとゝの御とも（一五）にある御文いとよくふんじてあり。ささのゆくすゑもまらさ。みかどにた

七一

てるうまにのりてはせて三條院にまゐり給ふを、きみたちたち^三をぬきてころしにくるものかとおぼして、いかにいはずとするものならむと、みもひえはて、物もいはねば、さい相の中將からうじてうちわなきて、「いかにぞ、たれかさだまり給ひぬる」との給ふ。少將「いざえい^三かす。おとりの御文ぞある」とうちわなきてのたまふ。きみたちあけて見むとさわべきこと侍り」といふ聲をきくに、おとりの物おぼえ給はず。宮「いふべきことこそはわらめ」とてわけ給へば、さんだちおしこみいれて御文をたてまつり給へば、おとりの御文すまをひきかつぎてうつぶし^三て、御文を左衛門のかんのとのによめとのたまへば、をんなき^三して「春宮にはわか宮る給ひにけり。昨日の通りの時ばかりになむせんじくたり侍りにし。例のさはふ^三おわらず、御心ひとつにせさせたまひて、せんじのさきに人にもらすなとなむ仰せられたる。巳の時にそれちひく^三つう侍り参り給へ」ときこえ給へり。おとりのすぐよかにおきぬ給ひて、「かしこにはつげつや」とのたまへば、「まづこゝにまゐるとて」と申し給へば、はやつげよと思ひこらじぬらむとて御けしきいとよし。少將はみなみの宮にまゐりて見たまへば、わか宮をばひぎにすゑたてまつりて、いま宮をばいだきたてまつり給ひて、みかどのとしごろの御ちぎりをおぼしいでつゝおはするに、くら人のかみ「かうからなむ」ときこえ給へば、女御の君うちわらひ給ひて、「さればこそとしごろの御ちぎりはよもあやまちたまはじと思ひつれど、あやしういひのしりつれば、こゝちもあわたしうぞあり

つるや」とて宮をひきすゑたてまつり給ひて、御もひきかけておはするほどに、おとりのさんだちさうぞくし給ひてうちつれておはして、まん殿の北の御方にわたしたてまつり給ひつ。二の宮をば西のたいにうつしたてまつり給ひて、さんだちとのへひきぬて、まつらひつからまつり給へば、かた時に^三たまのこゑつらはれぬ。所々^三みなあるべきやうにまつらはれぬ。御まへにはいと雪のふれる庭のごと、すなごまかれたれば、かねてせられむやうなり。かくしすゑたてまつり給ひて、みなうちへまゐり給ひぬ。うへにはめのとたち、おとな、わらはなりしにも、みなまうでかみあげさうぞくまたり。西の御方には例の御方々みなわたり給ひぬ。大宮、大きおとりの式部卿の宮のきたの方たちはまん殿にわたり給ひぬ。大將き、給ひて「このことによりてかしら^三をえさしいでず。すゞ院かひがひしきやうにおぼされき。三條にはた^三まうで、からさめを見つるかな」とてうちへいそぎ参り給ひぬ。右おは殿、中宮よりかくの給へれど、ゆめにも思ひかけず、さるべくはかゝる人のはらにこゝらうまれあつまり給はましやと、天下にいふともまさにとおぼして、かくなむと人にもものたまはず。こゝちのならひならぬど、人に心もおかれじ。よからぬもの一二人心をあはせてだにあしとおもはれぬれば、人をいたづらになす物なりとておぼしかげざりつれば、かゝるをもなにもおもほさず。されどもうちへもまゐり給はず。新中納言はをのへものし給ひて、このころは京にもものし給ひて、例のかたがた、うたとうたしうてものし給ふに、それもきこえ給はで、昔をおぼしいづることもおほかり。されどひとびとのいとほしういひのしりつれば、いとを

か尋しうおもほしければ、かゝれば見えやすく、給ひて、かゝるほどに院の女御の御も
 とに御文あり、「月ごろいと思はずにうけたまはりつれば、こゝろうく思ひ給へつるを、たゞ
 いまなむうけたまはりなほしつる。まことにやあらむ、おほかたのいとほしきよりも、と
 におぼしなげきつるなむ。いみじう宮たちもみづから参りこむとすれば、ゆゝしげなること
 なればものゝはじめにはとてなむ。いまけふあすとしてと、さきこえさせむ」となむあり。
 御かへり「うけたまはりぬ。の給はせたることは、けさおほき大い（御）の、せうそこになむさ
 やうにありける。いまのほどもいかにとぞ（い）いとわづらはしくおそろしき世の中なれば、い
 ま見給へ。さだめてことごとにはさきこえむ。宮たちの御せうこそ思ふには何ごとにかはおも
 ほしくんず（尋）らむ」とさきこえ給ふ（御）。かくてゆふがた（四）になりて、せんじもて参りてかんだ
 ちめなどみなまゐり給へり。中納言殿にけふはまうけ（給）給ひつれば、みなあなるべきやうにせ
 られぬ。たて（扱）はさきどもは、きみたち、御むこたちのなかに、さりぬべき一人づゝ（三）いだ
 してなし給ふ。殿上人、くら人などぞこれかれ御いたはりにてみなみなまゐりぬ。宮づかさ
 なさるゝほどに、大將殿より人のなるべき御文してあり。見給へば「日ごろ宮にたびたびま
 んれど物さわがしきやうにてえ聞えさせず。さるはみづから聞えおきらめぬべきこととぞ（無）
 も侍るを、いかでさてとしごろある。かへりみるべきものゝはべるを、かすならぬ心ちして
 はいたはりはべらぬを、このをりにだにこそはとてなむ。かれこれの御たまはりしにけはべ
 るなれど、御いたはりになさせ給へとてなむ。さもつかうまつりぬべきものなり。宮のだい

まんにまかりならむとなむ申すと申し侍る」とさきこえたまへり。それは伊豫のすけになされ
 しかば、いまひと（尋）なりける。御かへり、「うけたまはりぬ。のたまはせたる人のことはい
 とやすきことなり。一人はこゝにものせよとあれば、さるべき人もはべらぬを、思ひたまへ
 わづらふを、さりぬべしと御らんずる人侍らむをよろこびさこゆる」とさきこえ給ふ。かくて
 大夫にはをぢたちならまほしうおぼしたれども、みかど心よせあるやうにさこゆる。うちに
 てさてぞよからむとおぼして、大將をなしたまふ。すけには右衛門のかみかけて、ごんのす
 けにはおほ殿の御いたはりにて、かくしにはもとより宮に（無）つからまつるもん老やうはか
 せ、大まんは大將、この人少まんにはおほ宮の御いたはりにて一人、女御のきみのいたはり
 給ふ一人、もと宮一人なりぬ。それよりつぎつぎのみなこれかれ御いたはりになりぬ。みく
 しげどの右大辨のきたのかた、こゝは春宮のはじめの所（十一）、かくてささの宮は御心にこ
 そよろづおぼしたばかりつれ。みかどにははじめさきこえ給ひしに、御けしきあしかりしかば、
 ことにきこえ給はざりしかば、かゝることもうへにはことにうらみきこえ給はざりけり。ま
 たちにはいとねたしとおぼすことかぎりなし。このはらのみこたちみなしなゝむ、つひに思
 ふことせむなどおぼして、すぎくおんにいで給ひぬ。女御にくしとおぼすこと昔よりこよな
 し。いかでにくみたて、院のうちにもさぶらはせじとおぼせど、ちかきおとをふたつ三つ
 ばかりたまはり給へば、みこたちの御つぼねをまつゝ、やんどとなき人の御むすめをむかへ
 て（無）八の宮も宰相の御むすめをえ給ひて、むかへてさぶらひ給ふ。我も我もとさよらをまつ

ゝめでたき御いきはひなり。彈正の宮御めなけれど、ものすこしおぼえ、かたちよく、おや
る人われもわれもと参りつどへば、それしもぞ人傳はさままおほく侍らひ給ふ。女御の御
もとに宮たちつどひて、御かたちは花ををりたるごとくして、おとなもわらはも夜晝あそび
の、しり給へば、みかどはこれを御らんじてきこしめすとてこなたにのみおはしまして「一
の宮むかへて大將のあそびあはせてあそびをせさせてきゝしかな」とのたまふ。ちゝおと
ゝ、御はらからのきんだちつねにまゐりつかうまつり給ふ。大將もむこたちも院にまゐり給
ふとて、とぶらひきこえ給ふ。五の宮も二の宮をもせちにきこえ給へば、いかでかとおぼし
たり。かくきさいの宮我御ぞうよりはじめ、かんだちめみこたちをにくしとおぼしたれ
ば、むつまじかるべきおとゝたちもかしてまりてまゐりたまはず。かゝればなほ心うひよな
り、これらがよになりはてぬるにこそはあめれ、かゝることを見て、御ぐしおろしてさりぬ
べからぬ所にもりぬにしかなとおぼせど、たゝいまは心をさめぬやうなりとおぼす。す
ぎくぬん御、かくておほき大殿きたの方はこのことによりてこそ宮の御むことりもあべか
りしか。今はおともなし。わかきんだちはこひ泣き給ふ。御はらはゆくゆくとたかくなる。な
に心もなくいで給ひて、秋のころはひ夜寒に心ほそきを、月ごろはなれ給ひて心ほそくおぼ
す。おとももよごとにおはしつゝなきわび給へばいかせむ」とてわたり給ひぬ。「なに事よ
りもいかにおほほしてありつるぞ」ときこえ給へば、かゝることをなむきゝしかどもきこえ
給はず。世の中にの、しりいで給ふ宮なれば、をとこの御心といふものねたくともおぼし

ておとゝのとゝめ給へるやうに聞え給ふ。おとゝ、「さおぼしけるこそは心うけれ。天下にま
かのたまふともこなたにおろかなる心はありなむや。よしおや、さのたまふともあはれとお
ぼさば、月ごろかくわびさせ給はましやは。そこをおろかに思ふ人にて人のおぼしのたまふ
やうにしてましかば、我がやうなる人ふしもなくてことになどをいかにま給はず。よき人は
ありともおのが心ざしのやうなる人は御えまもわらじや」。北の方きゝ給ひてけりとおぼし
て、ありしやうをはじめよりきこえ給ふ。「宮の御文たてまつりし時はかぎりとなむ思ひし。
その御ふみを見せ給はずなりにしかば、つらきになむ」ときこえ給ふ。おとゝは「それはげ
にさきゝ給ひければおほしけむ。いかでかさおほぞうにはおもひて御こゝにありや」とて
とりいで、奉り給ふ。かくてありしよりおはん中いとめでたし。大との、北の方御物がたり
し給ふ所きんだちあそびありき給ふ。女きみ御ぐしかいしきばかりいとをかしげにて、ひゝ
なほそびま給ふ。と達三十人ばかり、わらはあまた御せんに人のたてまつりたるものいとお
ほかり。すのこに大納言さい相いますかり。宰相中將、くら人の少將など物がたりま給ふ。か
くてさかの院もし宮おとゝもぞうみ給ふとおぼして、すぎくぬんおり給ひて、はじめたま
り給へりけるに、大きさいの宮きこえ給ふ。「いかできこえざらむと思ひたまひつるに、一の
宮時すぎてめづらしきことのありけるを、もし思ふやうにてあらば、かくけふあすになり
たるはかくし給へど、うちにもきこえしとなむ思ふ。院にも御心えて申させ給へ。三條のみ
こもきゝてつらしと思はめど、かの人またちひさかりし時、そこをばおとなになし給ひしな

り。さおもひてたてまつりしかば、めにちかく見るはかなしきうちにはちるべけれ」とちと
 きこえ給ひければ、「それまでさだまらずばさこそものすべう侍るなれ」。さなりの宮「それ
 をさだまるまじきやうにきこえ給へかし。これを思ふになむかぎりになりたるといふのちは
 をしう、よみぢはやすかるまじき」ときこえ給ひけるに、かくきこしめして口をしういそぎ
 てもしてけるかなとおぼす。すぐ院はさぞあらむとおぼしければあしとまきこしめさず。
 唯さがの院のきさきさきいかにおぼすらむとぞおぼしける。かくてうちのみかど、母さきさきの
 御心をゆりてまかで給ひにしを、いとほしとおぼして、「たゞ今うまれ給へる梨壺のみこ
 をばうにすゑよと、そのたまひしか」とてみこになし給ふ。ふぢづはの二の宮は二のみこ
 縁、かれは二のみ子になし給ふ。春宮は生まれはじめ給ひしより、世の中にたひらかに思ふ
 やうならばかならずなどの給ひちぎりて、年つきゆくもまたせ給ひしほどに、あるはうまれ
 あるははらまれ給へるを、はきさいは昔よりのすぢありとて、「大きさい、くぎやう一つ心
 にての給ひたばかるなり。おほやけ、みかど、大きさいは生まれ給へるみ子をばおほして、か
 へすがへすみかどひとつ御心にしてさまたげ給ふべし」ときこしめして、人にも給ひは御
 心ひとつにおほしてその日までおともせで、にはかにはすゑ給ふなりけり。きさいの御けし
 きを見よ、人のいひの、しるなりけるゆふぢづはのまゐり給はぬことをよるひるうへはおほ
 しなげく、人もことにまうのはらすわたり給ふ所もなし、おきふしおほすに、月頃御つかひ
 もたてまつり給はでばうするてはそのよろこびはしてむ、それにつけてをとおぼしてまた

せ給へど、さもあらねば、「あさませしう心づよき人にもあるかな。例のわれこそはまけぬべ
 かめれ」とてもくのすけなるくら人して文たてまつれ給ひければ、と達めづらしがり悦びて
 みすのもとにたゞいでにゐてかはらけさしなすとす。御文には「たちかへりきこえてもおぼつ
 がなく、たびたびのをみつとだにあらざりしかば、見る人もあやしかりしを、つねによのた
 めしにはわらでもありぬべしや。月ごろはあはるやうにもあらずやとて、

山びこのこたへざりしをこゑごゑにまたまらくもとさわがれしかな。なほまゐるぢらるま
 じきにや」とあり。いとめづらしとおぼして御返り「いとめづらしうたまはせ給へるは、かし
 こまりてうけたまはりぬ。いとむいとむうれしき御よろこびは、まづそうせむと思ひ給へし
 かども、月ごろおほせごとも侍らざりしかば、いかなる御けしきにかと思ひたまへつゝ存み
 てなむやまひごとかや、のたまはせたるも、いざや。

まらくも、いろかはりぬとき、しかば山びこもいかゝこたへうからぬ。おぼろげにや
 参りはべらむことは、この宮けふあすまゐり給ふべかんめり。おなじくはとてなむ」ときこ
 え給ひて、おり物のほそなが、袷の袴一ぐたまふ。御かへり賜ふ。御らんじて、まゐりぬべか
 めりとおぼして、「昨日はめづらしきなむ、くもの色とか、

たつ雲をいろいろ見たるかせといへど、いづる月日をかざしやはする。よろこびとかあ
 るはおぼろげの心ざしにやは。この宮ひとりによりてなむ、あまたのおやにもうらみられた
 てまつりぬる。またいはさかさまなりや。いまかたへもうらやましとこそ思へ。それらもみ

な」とてこれはたのくら人としてたてまつり給ふ。よろこびてもてまゐれり。大宮もおはす。見給ひて、「さかの院もきこえ給ふことありときしぞかし」とのたまへば、「女御の君のこそきけ。あやしくも」とてわらひ給ふ。御返り「うけたまはりぬ。月とかはべるとは、

いづれとも雲へだつれば月も日もさやけく人に見ゆるものかは。それも御心にこそはとらけたまはりしかば」と聞え給ふ。かくて春宮もみどきやうにものはじめなりとて、そらからたち名あるおそろいなどもなごめして、ろんぎなどせさせ給ふ。大將まゐり給ひて夕方西のおとくにまゐり給ひて、すのこにまねまゐり給ひて、これかれ物きこえ、大將、女御の君にものきこえ給ふ。そわらの君して御いづりへなどいひつがせ給へば、大將「いまはかくありしよりもまたしくつかうまつるべくはべるを、みちしななじな行ともうけたまはりなむはなごて、さいつころ世の中にあやしきことを申しけるを、ひげせる所にいかに思うたまへならむときこしめしけむことをなむこにもかしこにもかぎりなく敬思う給へる。なげきて誰々もまかりありきもせではべりつる所により、かの三條にとかくの給はする事なむわりける。さる心も思ひ知れとて、かの宮せうそにて侍りしことさだまりて、御らんせさせむとてなむまたうしなはで侍る」とてこのかくして宮の御ふみをたてまつり給ひて、きこえ給ふ。「かくもきこゆまじけれど、昔心ざしうしなはず、今ゆくさきたのみきこゆることもなくはべればうたてある心ももたる物どもおぼしいづる」ときこえ給へば、見給ひて大宮、「なごもいとおそろしくもありけるかなと、大將も御らんじてはたまはりなむ」ときこえ給

へば、女御の君かく書きていだし給ふ、

「くる春を雲にまらせずなりにせばふちもたえぬる松にやあらまし」。大將見たまひて、「石のうへのたねよりまつとき、しかばほみどりも春ぞふかくあるべき」などきこえ給ふほどに、大殿おはしあひて、うちに宮まゐり給ふべきことをさだめ給ふ。十月十五日女御もろともに参り給へし。あるべきことどもみなさだめ給ふ。かくて皆まゐり給はむとて、わらはまもづかへと、のへ、おとな三十人、わらは八人からわやのあをいろの五重がさね、れうのうへの袴、まもづかへ八人ひはだのからぎぬ、うちさどもきたり。かくていで給ふに、三條の新中納言殿より御文あり、「いともしもおもふやうなる御よろこびはまづみづからまゐりてきこえさせむとせしを、ゆゑしげなるさまに思ふ給へつゝみてなむ。ちかうさぶらはとかのたまはせしを、かげふむばかりにてひさしうなりぬれど、いとおぼつかなくたまゐりたまへる。なほなれど、あさづまの心ちしてなむ。

身をすてし山べにもなほあるべきをいまもまどはす君にもあるかな。の給はせむまゝにと思ふ給ふること心ならぬやうにも」ときこえ給へり。見給ひて御返りみ給ひつ、「宮の御事はわしきやうにいひさわぐなりしかば、いとむかしの人ものし給はぬをなむ、あはれに心ほそく思ひ給ひしは、いまも心ゆるびなくおそろしきよなれば、御宮づかひなどま給ひて、うしろみきこえ給は、たのもしうなむ。民部卿どのにきこゆることありしやき、給ひけむ。なほおぼした、ばよもうしろめたうは」ときこえ給ふ。見給ひて「民部卿殿のものし

給ひにける。なに事にか侍る」ときこえ給へば、「そよ、さることありけり。ひめ君の御ことをや。むつましき人たてまつらまほしきを、ことごとくはあらで、まのびてつぼねにものし給ふやうにて、まゐらせたてまつり給へときこえよとなむ」。女御になり給ひしよろこびに、かしこに物する人のまうでたりけるにたまひける中に、中納言「くるしや、さきさきのやんどなき人をだにもあるものともま給はざるものを、これらはなにのことにかあらむ。おやの人なみなみにていたはるにこそをんなはひと、も見ゆめれ。かゝるに侍いたづら人のことをばなに、せむ」。民部卿「それはさしもあらじ。かの女御の御心にいれ給ふと見給は、いとあはれにぞおぼさむ。さきさきの人はあれど、みな中が、どものあしければ、女御も心とけずものし給ふなれば、それにまたがひてうへもものし給ふなる。かしこにいたはり給は、いとよくぞあらむや。この御ぶくはて、四月ばかりにもなごさせたてまつり給ひていたしたてまつり給へ、をのこももろともこそまゐらせたてまつらめ。たゞの人のさりぬべきもなし。宰相中將こそはむかしより志ありなどあめれとき、見るに、物思ふ人にこそさあらぬわかき人々はあまたあれど、させむやは」。中納言「この日ごろ五の宮御文とてたびたび見ゆれど、世の中のわづらはしさにもなきこえそとぞ侍る」。民部卿「それはさるあだ人にて、女ありときく所にてはさその給ふなり。すぐく院の二の宮も思ひかけていりなどま給ふなれど、おとみこつどひて夜晝あそびをまつ、おきぬ給ふなれば、うへもそれきこしめすとおはしますなれば、さすはどもみかどの御前にままぬりなどま給ふなれば、そのをり

には人こむとてつはものをまうけてまぢ給ふなり。一日左の大との、給ひしは、きさいの宮のよくもま給はずば、このみこしてなはたてさせて、はぢを見せてすて給ひてはいかいせむ、こどもよりはじめていくとあらむ人まうしくはへて、このみこまかでさせたてまつり給へとの給ひしかど、たのみ給ふ事ことの中にもさ思ひたるもおほかんなれば、いかにあらむ。かくあやにく、おはする宮なれば、よろしとき、給は、唯いりにいりおはしなむ。なほさおもほせ。いざや、心々にておもほしおはせむにはづかしげなるものをおなじ所にて見くらべ給は、つちとだにとのことこそあらめ。いでなにかこの君ごとにおとり給はじ」。中納言「いみじきことをま給ふかな。いかならむ人とかおほす。女一の宮こそおとり給はずとき、しか。それもむかへねたまへりしかば、けおとりてこそ世にたぐひあるべき人にもあらずや」。民部卿「かたへはみなままり給ふ人はさう見ゆるや、ありきはあやしき方ほうさうほうにこそ」などの給ふ。中納言こは三條の西の方民部卿、中納言物まゐる。ごせんに千ろちろしてまがりなどしてものてうず。わりごするものあり。これはひんがしのかたみすのうちに北の方ふし給へり。ひめ君物まゐる、おとなわらはおほかり。ひめ君の御めのとといふ、「上のうちは人々なやみ給ふをおといのけぢかう見給へば、いかなるごとも聞えつべけれども、手はなれ給へればこそ」。まさご君のめのと「わしのねはふらむとも知らずや」。ひめ君「あなき、いくなに事ぞや」などの給ふ。中納言かくて春宮まゐり給ふ日になりぬ。御車宮の御方に十、女御の御方に廿、いとげ六つ、びらうげ廿、うなる下づかへ車二つづ、ひとだまひまどもはこ

れかれいだし給ふ。車のくちつきどもさうぞくとへ、かたちもえらびて十人づゝつ給けたり。宮のひとたまひはかちのきぬかうぶりきたり。あるはまろがさねのはくちらしたる辭まろばかま、あるはうす色のまたがさね、すそこの袴、心々にせられたり。女御の御方のひとたまひばかり、まやうぞく車ごとくに心々なり。かくて春宮の御車はひんがしのおほぢのまへ、大宮のおほぢにひきたてたり。宮の御くるまはあかずげにて車の大きなるやうなり。あめなる御車うしかけたり。御車ぞひはさがの院の庖の人の子なるを、たけひとしくかたちあるをえらびて十二人、かいねりがさねの下がさね、ふかいくつはきて、まりに宮のくらくらどころのすそつかうまつる。女御御くるまは南の御もん三條のおほぢにひきたてたり。御車うしくろうてかけたり。御車ぞひ御方のさぶらひの人十二人、えびぞめの下がさねきたるもまりに二十人仕うまつる。かんだちめ、左の大との、御子ども三人、源中納言、藤中納言、右大辨、おほき大殿、御ぞうはきさいの宮きこしめす事ありとてつかうまつらす。民部卿のみそらはふくなり。さあらぬ殿上人は四位、五位なきなし。六位もめあきたるはなし。宮おはしませば、くら人ども宮の御くるまにたてまつる所に、さながらつかうまつり給ふ。御車のまりにめのと二人、左大臣どの、きみたちは女御の御くるまにたてまつる。大宮いとまゐらせまほしうおほせど、まかひで給はむがわづらはしかるべければ、とまり給ひぬ。一の人此のたむびは宮たちの御めのと三人、そわらの君、かくていで給へば、みな人うまにのりぬ。またいし二人ことおこなひつゝ、女御の君の御くるまのつきには、みくしげ殿、ひとたまひさな

がらたつ。そのつきによろづのまうとくのりたれど、女御の御方のひとたまひのまりにぞ立ちける。宮たちの御めのとといふやう、「おなじ御はらにうまれ給ひつるおなじ宮につかうまつれど、いかなる人の一の車にのるらむ。我らいかなれば宮のをさめみかはやうとのまりにたつらむ」とはらだつ。そわらの君の宮をかしづきまこえたまへば、そやといふ、おほ宮のおほぢよりのぼり給へば、おほくの左右の物見ぐるまうちまでたてたり。よまづかに月のひかりのごとくあり。御前まつきたきともしたり。いとげの車には御前六人、ひらうげには四人火ともせり。車のすだれ高くあげてまろくちよりこぼれいでつゝ、のりたる人はさうぞくかたちあらはにめでたし。物見車、大將、中納言とを見ていふやう、「これはなだゝりしすゝしなかつたぞな。めでたくもなりましたるかな」といふ。右大辨を見て「これはとうるいぞかし。いきながら人のみかはれるものなりけり。この世にも浄土とはありけり。又ある女、頭の中將を見て、「これはなかつたより、ゆきまさぞな。いとみじくさよらなりや。あはれ、源少將はふしあらしかばいかならまし。かたち心めでたかりしをばや。てを書さうたをよくよみまると車ごとにいふ。少將めは、ひとつ車にてもの見る。は、「わがむこの君をほろぼし給ひてし人のめでたくてもし給ふかな。うかりけるさいはひ人を思ひかけ給ひけるぞおほけなきや」。むすめ「さればこそまにいでひさしかんめりしか。山へいるとてこそいきいでたりしか。そのかみ侍まうなりし人だにかくなりたまふれば、かの君いまは大臣にもなりなまし」。は、「かの大將のやうにいかで宰相などにはさもありなまし。さ

れど君なればこそかゝるきみたちのうちむれて、ふかき山べをたづねて、いみじう心ざしをしてとぶらはれ給へ。そのみ時とくにぞかゝるおもしろきめをもみれ」とて皆泣く。むすめ、「かたらひてむれくゆるとりを見る時ぞのこれる袖もくちはてぬべき」。は、

「袖のみやくちはははつらむ君なくてみもみるかひの見えずもあるかな」などいふほどに、御さきは中のみかどにいたりぬれば、まりは宮またちかし。かくてまゐり給ひてまづ春宮いり給ふ。御車にめのと二人は舞いさぶらふ。いま二人はくら人二十人とあゆみいり給ひぬ。うめつばにおりたまふべきとて、くるまのせんじ申して女御いり給ふ。御てぐるまにては宮たち、いま宮の御めのと、そわうの君さぶらふ。まりにおとな六十人ばかり、わらはまもづかへあゆみ、四位、五位ぐしたり。こときみたちみなおほす。かくてふぢつばにおり給ひぬ。御おくりの人をとこ女まかで給ひぬ。春宮まゐり給ふ。かくてまづ侍のぼらせ給ひて、月ごろの御物がたりにおそくまゐらせ給へることなど、かたみにきこえ給ひつゝ、また御とのこもらぬに、うぢしふたつと申すに、女御おり給ひなむとすれば「まばしまかり給へ」とて「このごろのよはかういひてもまたくらし」。

ひとりねし夜はまぢかねし時のまのうしほもこよひはおもほゆるかな。あけがたかりし物かな」とのたまへば、女御、

「よるよるはまりける物をこよひしもなほさへうかくはなどかきくらむ」。うへうたてくもいひなきはるゝかな。さりとともうちなすかねのなどのたまふほどに、あかくなればいそぎ

おり給ひぬ。すなはち御文あり、「たゞいまは、

なげきつゝふるよもあれど朝ぼらけおきつるまものわびしかりつる」。女御、

「あけぬれば雲のうへにもとまらずておきゆく霜のさむきをぞまゐる」ときこえ給ふ。二の宮、あからかなるあやかいねりのひとへ無がさね、おり物の直衣、たすきがけの御はかま、いま宮こもんの白きあやの御ぞひとかさねたてまつりて、たすきかけて舞いとをかしくえ給ひてはひありき給ふ。御うへにわたらせ給へば、みないだしする奉りて、めのとたちは御几帳のうしろになみ居て、いづれの宮をかまづいだし給ふといどみかかはしてみるに、二の宮あそび給ふをかきいだし給ひて、御ひびにすゑつゝかきなでつゝ見給ふ。御ぐしはやうしかけたるやうにめでたし。かたうちすきたり。御かたちいとめでたし。うへ「ばうをこそまづ見むと思へ。よびにやりて給へ」ときこえ給へば、「いま今日あすすこして」との給ふ。いま宮の御めのととねたしとおもふ。二の宮はされば我こそとてははる。いま宮なに心もなくたいわらひにわらひて二の宮にはひかゝり給へば、上「これはたぐひの人をななどこれもこれにくいはわらねど、いたくわれに物を思はせつるや」とてのたまふ、

「ふたばにもまだ見えざりし玉かづらはふまでまつぞひさしかりける」。女御、

「まつだにもくるしからずばたまかづらたつをぞきみに見せむと思ひし」。うへおそく参り給ひしかば、「これをいとにく見しと思ひつれど、おやのつみも思ふまじき物かな」とてかきいだし給ふ。おはしましくらしして「ようさりまうのぼり給へ」とておはしましぬ。まう

のぼりており給へば、「ばうに新よびてすゑ給へれ。こゝにもせむ」とのたまふ。おり給ひて「左衛門の君にわたしたてまつり給へとのたまへ」とのたまへば、大蔵、うへ人などしてわたり給ひぬ。孝らぬがほにてわたり給へば、いといととおとなしうひもついでして侍らひ給ふ。御ぐしはるたけにていとけだかう清らなり。「げにはこれはさゝつるやうにたゞ人に見えざりけり。おやにこそいとよう似たりけれ。あひなう心さへ似るかな」とのたまへば、女御「いかゞ侍らむ」。上「人の新えもたる新まじくこゝろこはくこそは」とのたまはず。かくきつゝつねに宮たちを見給ふ。よごとにもるらせ給ふ。ひるも日々新にわたらせ給へば、女御「身ひとつ候ふだにゆゝしくきゝにききことさぶらふものを、かくわかき宮たちひきつれてさぶらふこと、いかにうたてあること侍らむ」。うへ「今はさもあらじ。人々の心をやりてもいとよくわりぬべかりけるものを、思ひのまゝにありてこそ院にもさわがれたてまつりしか」などのたまひて、新にて新まうのぼらせ給へば、いとほなやかになまめかしくもてなし給ひて、世の中まつりごとともいとかしこうせさせ給うて新御がくもん新に心をいれて、御あそびもつねにせさせ給ひて、いとおもろし。なしつぼはなほものゝたは新ぶれなどず。こと人は「まうのぼり給へ」と申すなることなし。人の御とのゐのよもふぢつぼの御ために、はざるやうにもあらずもてなし給ふ。ひの宮は「ふぢつぼ参り給へし」とてまかで給ふに、さかなものはまた参り給はず。式部卿の宮の女御にならずとて、ちゝ宮おぼしなげくとさこしめして「たびたびめしければ、いかゞはせむ」とて参り給へれば、てぐるまゆるされ給

ひぬ。時々まうのぼり給ふ。ひるも時々わたらせ給ふほどに、十月ばかりよりにし給ひぬ。父宮すこしうれしとおぼす。かくて世の中さだまりけり。大きおとゞはざるやんとさき一人におはす。左大臣のおとゞ世の中をまつりごち、みかどもまつりごとをあづけ給へるやうにて、いさゝかのこともたまはせではま給はず、そうし給ふこといひ給はず。おとゞもおほやけのそしりとなれるべきことは、御新ためにもやんごとなきことなれば、そうし給はず。みぎのおとゞをば、心にくきはづかしきものゝ心ある人にま給ふ。右大將はおほやけわたくしにもかしこきものに思はれ給へり。さあらぬ人もとゞのひよし、新中納言よろづ人にをしまれ、うへもこれ宮づかひせさせてしがなとおぼす。かくて年かへりぬ。ついでちの日はいさこしめす。二日すぎく院、さかの院に参り給ふ。三日すぎく院に行かうあり。大將思ひあるべければ、かうぶりたまひ新はせずやとなきものどもに賜ふ。これはかたかうぶり賜はりぬ。つぎつぎのせちゑども、皆さこしめす。ないえんには古中納言殿のみやす所なり。かたちもさよげなり。ある中に下らうにもてまかなひ給ふ。つかさめしにもなりぬ。女御そうし給ふ。「宮内卿たゞやすのあそんはよきつかさはえ給はるまじき人にや侍らむ」。うへ「さも新聞えず。よろしき人なめるを、さかの院の御ためにあやまちしたることありてまづむとこそさししか」。女御「侍らばいとあはれにて侍るなるを、すりのかみのあきて侍るなるにやはなさせ給はぬ」。うへ「なごいたはるべきやうはある」。女御「さも侍らぬと、兵衛がおやかたにてつねに申さすれば」などさこえ給へば、なされぬ世の中に、いみじきつかさ

えつるものかなとおどろきさあわぐ。左のおとよきをりに奏し給ふ。「このはなちつかはしてしまげの、ますをば、さるわ^三人侍りしかば、そのつみをのちまではかうぶり侍るまじ。かく御よのはじめなどには、天下のつみあるものをゆるさせ給ふなる。わのをのこともがわはれにて侍るなる。めしにつかはさむはいか侍らむ」。うへともかうもあらざりしことなり。これかれよろしうさだめられて、あるべからむやうに物せられよ」とのたまへば、よろこびて皆めしにつかはす。かゝるほどにかゝりける物を、今まばしばうさだまらざりしかばとおぼす。御うぶやいとなく^三、所々より御うぶやしなひ例のさはふなり。三條の院よりいかにめしうつかうまつり給ふ。こゝはさかの院日の宮の御方にて、すりのかみは覺えぬよろこびして、おどろき悦ぶことかぎりなけれど、いでゝありかむとするに、年^一老いう^二くるまさうす^三くもなし。直衣さうぞくはむすめさせたれど、うへのきぬはななし。むすめかたみにせむとて、少將のさうぞく一ぐもたりけるとう^一でたれど、うへのきぬはえさるまじ、とかうたばかる程に三日もすぎぬ。「かうじて所々によるこび申す」とていふ。こゝらの年頃おほやけにすてられ奉りて、さてた^一いしをうりて、世々に悲しくわびしきめを見て、わづかに侍るめのわらははの、をとこ^一に侍りし山ぶしの昔のころもをぬぎ、松の葉をつゝみてふかき山よりとぶらひ侍るも、わかちてやしなひ侍るにかゝりて、一人のすさもはへらず、えさうも侍らでこもり侍るに、めいわうのいでおはしまして、かくまかりうかびたるよろこびをすなはちそうせむと思ひはべりつれど、かくのごとく^一はていしはべりつるほどに、い

ままでになり侍りにけりと申すを、こと人はいかに思はれつらむ。このみよろこびはかねまさらにはえ^一のたまはじ。春宮の女御になむかへすがへす申さるべき。かの女御こそたびたび申されけれ。こと人あまたあり。かの御はらからの右大辨かけてつかうまつらむとせちに申されけれど、ぬ^一しを申しなされけるとぞき^一しか。すりのかみおどろきて、「なに^一ゆるゑにか女御さそうせしめ給ひけむ。わたくしごとには侍れど、なかよりのあそんの山にまかりこもりしも^一、かの女御によりてとて、わらはべのわび申すことを、きこしめすところや侍らむとかしこまり侍りて、さだやすはをのこのすきと言ふものはあやしきものにはべりければ、おほけ^一なきこゝろの侍りて身をもほろぼして侍るにこそあれ。女御ま^一り給ふべきことにもあらずと、おろかなる心にもせいし侍るを、身のたゝりなきまゝに申すなり」。おと^一をのこのすきわざ^一あるや。をんなあるときけば、天下の仙人もさ^一なく^一す^一めればにこそ。かの女御い^一うそくにてさやうのことをおぼしていたはられたるにこそはあらめ」。新中納言「御はらからをこしてこそはものせらるなりしか。かしこにくら人の少將などして申させたまへ」とのたまへば、こゝは右大臣どの、御方すりのかみ年六十ばかりなり^一。宮おと^一に梨壺の御文見せてまつり給ふ。「このころはなまうで給ひそ。藤つぼへたてもこそおほせ。今ころもかへのほどにもせむ」とてうまれ給ひし宮の、けうそくをおさへてたち給へるをい^一だきてありき給ふ。かうて^一かんのおと^一の御方に大将まうで給ひて「猶申すべし事の侍るを、とくわたり給ひなむや」。北の方「このひるぞまうで侍りぬる。

よるはこゝにてもとまり給はず。かの宮見たてまつりにぞ、かくひるまには。大將「このひんがしにはものし給ふなり」。北の方「わざとにはあらで、ゆふぐれよるのまにぞこうじかくれせらるなるや」。大將「さおぼすべき人にこそは年をろいかに思ひつらむ。かのあせちの君などもいとめやすき人にぞありける。かゝる人どもを見すて、いかでものし給ひつらむとこそまばしば参りくべきを、かしこにうたがはしき程になり給ひぬるを、人すぐなにて心ほそげにおぼしたればなむまかりありさもえせぬ」。北の方「げにさを信なり給ひぬらむ。参らむとするを、あせちなどにくしと思ひと思へばはづかしくてこそ。院の上註はなどかいますれではまか註で給はざらむ。いざやかの二の宮を註五のみこの世をよともま給はず。みかどささきもものきこえ給はぬ人の、いかでとらむとのみま給ひて、まかで給はゞともかくもせむとのみあれば、里にもえさらぬ人知れずぬすまむいらむ縁とのみあなれば、それにおぢてえまかで給はぬぞや。ふぢつぼのさばかりの、しられ給ひしかど、なさけなき人の御返り事申すべき。えすまじきはさてこそあらまほしくてえ給ふなりしか。これら註はものさわがしくぞあるや。さてはえぬものところになるにこそはあらめ。さてのみあらむやはとて明日ぞこれかれ大事し註てむかへたてまつり給へるなり」とときこえ給ふほどに、おとゞおはしぬれば、御ものがたりなど聞え給ふ。こゝは右大臣殿註。かくて御むかへにおとゞ、さみたちいで給ふ。左衛門のかんの君「なにかまぬり給はずとも、たゞすみは参りてまかでさせたてまつりてむ」。おとゞ「しかれどひと所をだにわれらかしづきたてまつるべし。いはむや七所

のうまごのみやたちむかへたてまつりたらむに、なにのこと註かあらむ。えうとくつくらむまにことひきいで、はえかひもあらじ。我がぬしたちのみ心もまらず、若きをとて女、おや、はらからとらぬし給ふ。やすく思ふべきにもあらざりけり」とのたまへば、さい相中將うちわらひて「さこしめしこりたることやあらむ。さやうにすいたる人も今はは註べらぬものを註とつれなくいふ。またには、いかでこのをりにぬすまむと思ひたばかる。藏人の少將はものもいはで、おりていり給ふらむほどにいりふしなむ。うへにころされむやは、またさらばさてまなむと思ひおはす。かくてみないでたち給ふ。おとゞ「わたくしの大事はこのことに註まざるはあらじ。この事かくおなじ心にま給はざらむをば註うらみ申さむ」。民部卿、源中納言、右大辨まうで給ふ。かんだちめは御馬にて御前弓やなぐひおひたるものをがさじと註知あまたして、衛門の督、宰相などはうまにてまうで給ふ。すぎく院のみかどには、ささいの宮おはすれば、ぢんわ註たり、御くるまもよせさせず。みかどにひきたて、まぬり給へり。うへおはします。女御まかで侍りて「御産たひらかにものし給はゞいとくまぬり侍りなむ」。うへ「かく大事して物せらるれば、たのもしきものを。されどけふやんとなきむかへ人どもたのもしくあめれば、をとこみこたちはないでものし給ひてそ註。いとさうさうしから註む」との給ふ。うへおもほす註心ありてせいしのたまはせて、御くるまちかうよせさせ給ふ。左のおとゞ右大將、左衛門のかみ近くさぶらひ給ふ。五の宮いとしきけなきけしきにて、うへ註たち給へり。御前より二の宮の御もとへたゞいりに入り給ふ。「いづちぞ。あなざわがし

のおほいまうち君、大將のおそんのみにぞいとけしからずや」とてひきとめ給へば、涙をながしてたゞ泣きに泣き給ふ。「などみこのあやまりで見ゆる思ひに、心あらば我にこそいはめ」とのたまへば、涙をのぞひてさぶらひ給ふほどに、みなひきつれていで給ひぬ。御車のさうにはおとゞ、大將の御くるまをひきならべて、御前にきんだちうちかこみておはしませば、こゝにかしこにひたぶるのさうぞくしたるものどもうちむれつゝ、あふよるべくもあらねばかかれぬ。大將、宰相の中將、くら人の少將のなきを、これは皆うたがはるゝやうあらむ。こゝをばはなれぬかれらぞわづらはしきとおもほして、御くるまをひきわかれてはしりさいたちて、宮におりていりて見給へば、宰相の中將かゝるわざのために、かた時に千里ゆく馬たてかひ給ひけるに、くらおきにてやんごとなくむつまじうつかうまつり給ふ。四人かりぎぬにわらうづはきてかくれたちたり。をかしと見給へうへのぼりて見給へば、御車よするほどにわたりて、たゞ参り見ぬやうにしていりてまそくをさして、いりて御帳のうち、そのへんをめぐりて見給へば、くら人の少將直衣姿にてかへしるとみざうしとのほさまにたてり。いとをかしと見て待ちたてまつり給ふにおはしつきぬ。御くるまよせて御几帳さして「はやおりさせ給へ」ときこえ給へば、おとゞ、左衛門のかみとたち給へば、女御の君「あな見ぐるしや、こゝにははぢたてまつらず、ものはぢ給ふ人こゝにもし給ふめり」。大將「宮たちもおはしませぬをとてさぶらふなり。なかたゞをばなうとませ給ひそ。火をくらうなさむ」とて御おいまつもくらうなさせ給へば、「さるやうこそはあらめ」とてまづおり給

ひて、宮たちおろしたてまつり給ふ。おとゞ左衛門のかみ御几帳さして入り給へば、大將まうにたち入り給へば、やがておまし所へもいれたてまつり給はず。一の宮の御方におはしませせて御帳のうちにいれたてまつりつ。宰相の中將「大將けふぬす人のけしきを見てするにこそあらめ。宮たちもおはせでいとようたばかりつべかりけるものを」とてはがみをしていでぬ。少將もすべりいでぬ。つとめてはつれなくてみないできたり。大將見おはせていとをかしと思ひたれど、いとまめやかにてけしきいとあしくて、宰相の中將の給へり。かくて五の宮、彈正の宮のひぎをまくらにして、夜ひとよ泣く泣く物がたりして、「まろをばいかにせよとてこの宮をばまかでさせたてまつり給へるぞ。かゝる心ありとて宮も月ごろは見たまはず。うへもよからずおぼしたれど、それも思はず。宮のわれを手にしてたすけ給へ」などのたまひあかして、つとめて御文書きて「これ御文の中にてたてまつり給へ。まろをも世よもにくしと思はじ。見る人にくまれぬ人を宮たちにぞおぼしつらむ」とのたまへば「だんまやうの宮のこゝにこそ人にくまれてひとりのみ侍れ」。五の宮「あなまれや。おなじ心なりけむ人を、なに、つゝみてたゞにはあらじぞ。わりなくとも物にだにいひそめつれば、人こそ我をいかでと思ひたれ。いづれのをとこか人をおもひかけて、それにこじて一人はある。うへの御心をおもはずば、宮をも今までかくおもはましやは。よははよろづのことおぼえざりしかど、とらへて参り給ひにしかばこそは見えおはせたてまつらずなりにしか」。彈正の宮、中納言のむすめのもとに御文つかはす。「さゝしはそれこそ人も見つべうさこゆれ。

五の宮よしと人のいひしかば、ふみやりしかども返り事もせず。あさま宮なほそれをのたまへかといふなり。こゝにもかくてのみやいはべらむ。いかゞ見むと思ひしを、さのたまふとき、しかば、五の宮にのみこをたべければゆづりきこえむ、などてこの文をとくとく」とのたまへば、「二のみこの御もとに御文書き給ふ。」よのまはいかゞ、よべ御おくりもえせずなりにしをなむ。たひらかにやおぼつかなくて無難なむとて、これはいとあはれにのたまへば、いとほしさにたてまつるなり」とかき給へり。見だまへば、「二のみこの御文には「よべは御ともにと思ひしを、あさましくこのゆるさせ給はずなりにしかば、中ぞらになむ、

かへりゆくかりの里へとおもひしを雲にまよひてひとりねもなく。今そこにまゐりこむ。わいてもちかきまもりともこそいとおそろしけれ」ときこえ給へり。二のみこ見給ひて、「わなうたてや」とのたまふ。女御の君見給ひて「げにさもし給ひてまし。あなわづらはしや」などのたまふ。宰相の中將、くら人の少將などいまはけしきもいさで、女御の君には見えなてまつり給はで、まうでかたらひたまひつゝ、よろづのこと心ざしふかうつかまつり給ふ。かくて大將どのは、宮のたひらかにおはしますべきことを、神はとけに申させ、所々にずはふなどせさせ給ふ。うぶやをわたりしよりも清らにしてまち給ふに、十月といふかみの十日すぎぬ。人々心もとながり給ふに、なかの十日もすぎれば、よろづのかしこしといはる。僧都、僧正申しあつめて、ふだんのみまはふ七八だんせさせ給ふ。眞言院のりしして、くさく經のみす經おこなはせなどしておほしさわぐに、廿三日の晝つかたよりなやみはじめ給ひ

て、そのよはひと夜なやみ給ふ。いとほしがりさわぎて、大宮、かんのおとゞわたり給ひて、あくる日一日なやみくらし給へば、民部卿の北の方、大との、こうきみ給ひていくばくもなければ、あへ物にとてきこえ給ひければわたり給ひぬ。宮のうちよりはじめて、左右のおほとんすぎくむんよりも、す經のつかひのりつれてゆきちがひつゝ、はつせ、つばさかまでよろづの所々にまうで、左右のおとゞ御子たちもみなおはしましぬ。よろづの人みなすのこにぬなみ給へり。かゝるをりに人々さわぎてしづ心あらじと思ひて、例のきんだちはめのとをかたらひて、よろづのたから物をとらせて「ひたにくればぬすませよ。いづれよ」とてくるゝをまち給ふ。すぎく院にはみかどやすくもおはします。いでいりおもほしなげきておはしまさむとすれば、ささきのはらだちての、しり給ひて、いみじきことをし給ひて、「このぬす人まらなむ」とてうちてのたまへば、御心をやぶらじとてえおはします。五の宮かしこの人おほくさわぎ給たらむ、このをりはぬすみもし歸てむとて、日のくるゝをまち給ふをも知らず、女御の君よりはじめて宮にかへりたてまつり給ひてまどひ給ふに、二の宮はなに心もなく西の方に人すくなにておはす。一の宮まかで給ひしよのことをさゝ給ひにしかば、さるいみじき御心にも「二の宮におはして我を見給へよときこえよ」とのたまへば、さきこゆ。宮の御方々をはぢきこえ給ひて、まどひて泣く泣くいり給へり。「こちより給へ。我をなまりぞき給ひそ」とてすゑ奉り給へるに、心まらる人々はいみじく泣く。そのよいとおそろしくやみあかし給ひつ。その日のひるつ方よりをさをさるものもたまはず、たゞなえに

なえふし給ひぬ。女御の君こそをもし給はず、ふしまるびなき給ふ。大宮「あなかまや。かくのたまへばいとゆみづもまるらす」とまどひ給へば、「われもまなむ」と泣きこがれ給ふ。めり。「あまたもたぬまへ知るぞうにだにかくのたまはするを、ましてた一人もちたまへる父母いかゞき、給ふらむ。たれもかゝるめをこそは見しかど、今まではあらずや」ときこえ給へば、「あまたおはすれど、この宮をばちひさくより、うへのかぎりなくかなしきものにま給ひて、たからもちたる心こそすれとのたまひつゝ、としごろ見ぬこと、おもほしなげきて、むかへたてまつり給ひしにも、まわり給はざりしを、いとくちをしとおもほしたりしものを、いま一たび見せたてまつらすなりぬるにやあらむと思へば、いみじうかなまらぬなむ。この宮によりたてまつりてこそおのれをも人にもおほしたれ。かた時も見たてまつらでは、いかゞはあらむ」となきまどひ給ふ。すゞく院より御つかひ「唯今もいみじうきゝつるはいかなることにかあらむさだかにのたまへ。いと口をし、としごろいとおぼつかなくおもひつるを、かくいふかひなかなること、たゞいまものせむとするを、をのことも一人もなきみなそこにもおのしにければなむ。心のうちにおのれにあひ見むとねんじ給へ。こゝにもかぎりなくねんぐわんま侍るをときかせ給へ」とあり。大宮見給ひて、「かくなむ」と申し給へば、「ねたくめし、をりまわりなむとせしものを」といひきよまたにのたまふ。大宮御返り「かしこまりてうけたまはりぬる。おほせどと給へる人は、このひるつかたより物ものたまはず、ことたのもしげなくなむ。かくてもたひらかにあるものとはおもう給へながら、心ほそくな

む。かくなむとものし侍りつれば、まらすなりにつけることなむきこえ給ふ」とてたてまつり給ふ。大將殿きぬはぬぎもあへ給はず。直衣などのうへに水をあみつゝまどひ給へば、人々ぬぎかへさせつゝ、にはかにいで、だいでわんをたて、申し給ふ、「この人えまぬかれ給ふまじくば、おのれをころし給へ。かた時をくらし給ふな」とふしまるび泣く。すのこに上達部みこたちおはず。ありとある人はたちなみてぬかつく。すゞく院の御使はふる雨のあしのごとまわりてはたちなみてあり。よろづのところの御つかひあり。左右のおとゝおりにておはして、「なかかかく見え給はぬものを、心よやく見え給ふ。よろづのこと心をまづめてこそは^難」とてあつまりてのぼりて、父おとゝ女にも又もあひぬるものにこそあれ。おやこそえあはさんなれ。よしやかねまさをばさも思ふらむ、かたのやうなる女こもあり。女おやをばいかにせよと思ふぞ。むかしはわすれにたるか」とのたまへば、「めおやにはたににるにまたがひてつかうまつり侍りにき。とのにまたえつかうまつらぬ。なかつががばか^難いにはいぬをかへりみさせ給へ。女子なれど^難たゞにはあらじと見たまへるものなり。いとよくつかうまつりなむ。この君いたづらになり給は、やがてふちかはにもおち^難いりてまに侍りなむ。さらにをくれじとす」と聲もをしまず泣けば、かんのおとゝ「めもこそ二つあれ。ひと所をおや君とたのみ奉る。わが子にはなかかくはのたまふ。わが子のみがはりに我こそまなめ」とふしまるび給ふ。左のおとゝは「をのこはかならずかゝるめを見る。左衛門のすけのをりになむ。かゝるめ見はべりし人のかなまらうおほえ侍りしよりも、さかの院のおほ

しめしけむことを思ひ侍りしなむいとからかりし。これも院のかくおぼしさをわぐらむをさし給ふらむ。所ぐるしうおぼえ侍らむ。大將「それまでもおぼし侍らず。かの御身のいみじきをのみなむ。御方々ものし給ふとて、あたりへだによせられねば、御おもてをだにえみたてまつらぬこと」とのたまふ。左のおと「うちわらひ給ひて「かゝりける御中をはじめは心ゆかずおもほしてかんだうせられしはや」とのたまへば、人々わらふ。「ものなおぼしそ。まさよりいけたてまつらむ。人のつかれにたるならむ。かやうのとは人つかれぬればかうもわり。おのれ二十よ人のこどものおやなり。こゝろのみこたちはたがおもくゝる元来たちてなむらませたてまつりし。まづゆまるれ」とておと「はゆ、ち、おと「はものとりてすかせ給へば、えすかせ給はず。からうじてこしらへまるりて「いませ給へ」とていでりて「人々まばしいり給へ。このぬしえみたてまつらすとわびまどひ給ふ。いれたてまつらむ。女御の君「なにか、くちをしうなり給ひにたるものを、いまさら」このたまへど、人はいで給ひぬ。二の宮はそひそひ侍おはするに、ちひさき几帳へだてたり。女御の君「おのれはもの、はぢも知らず。さきにいとよ見給ひてしものを」とのたまへば、いりても見給ふに、いと御はらたかくていきつきふし給へり。大將「わかき身はいかにまは侍れとてか、かくはふし給へる」とて、かきおこしてゆまるり給ふを、えまるらねば、「ともかくもなり給ふとも、なかつが志と御ゆきこしめせ」と泣く泣くさこえ給へば、ひとすゝりまるるを、ものひと口くゝめたてまつり給へば、すきたまひつ。よろこびてけうそくにまかりかけてかきいだきあげ給へば、心

まらひたる人にだきつきてはべる。おと「ゆみはしりひきてうちこわづくり給ふ。だいとこたちちかからさぶらへど、かぢたかうもせさせ給はず。よわき人はそれにまどひ給ふものぞとてみそかによませ給ふ。眞言院のりし一人いちはやくよむいとたふとし。おと「かゝるをりには人おほくなさぶらひそ。さわがし」とて御ゆたびたびまるりて、つるうちしつゝ、こわづくり給へるに、とらの時ばかりにいかいかになく。おどろきて女御さぐり給へば、のちの物たひらかなり。ふせたてまつりて、大將やがてそひふし給ひぬ。内侍のすけ「つかうまつるやうあり。あやし」ときこゆれば、「なほさてつかうまつり給へ」とておき給はず。わらひてものなごきせかへたてまつりて「いとあやし。なほおきさせ給へ」とあつやまりてきこゆれば、右おと「よかんめり。なほやすませたてまつれ。いみじくまどひ給へる人なめり。まづゆまるれ。そもそもなにぞ」ととひ給へば、「おきな」といと慰心ちよげに内侍のすけ申す。「あなむくつけはや、おひやれ。いとおそろしきものなり」とのたまへば、かんのおと「さらばたまはりてぬでまかりなむ」とのたまふ。宮「なにか、まばしいま見る」とのたまふ。大將「いみじき見給へるものを、なにか見たまふべき」ときこえ給へども、「なにかにくかるべき」とてゆるし給はず。おはんほぞのをきりて湯殿まるる。かうし文よむ。左のおと「おものゆにつけて、まづ大將のぬしにまゐらす。いみじういらへ給へと「被ことわりや。よくもわらであまた侍るか、一人かげにあるだにいかゝ思ふ。御うしろみしにまゐりつるぞ」とてまゐり給ふ。かくいみじうなやみ給ひつれど、うみ給ひてはことなる事もなし。たゞことなく

御みすくみてぞおはする。すゞく院におほんつかひまゐりてくはしくそうす。かぎりなくよ
 るこび給ひて、よろづの物おほくたてまつり給ふ。左のおとゞいだしわづらひ給ひつとて、
 例の御手づからきみたちひきぬ給ひつ、（注）物てうじて賜ふ。例の御うぶやしなひ所々（注）よ
 りあり。御うぶやいとおもしろういかめしければ、大將いりふし給ひつればある事もなし。
 女御殿もえいり給はず。かんのおとゞのみ夜晝つかうまつり給ふ。と違「いぬ宮の御時おも
 しろかりしをこたみはさめたりや」といふ。かくて七日すぎぬれば、かんのおとゞ、宮にきこ
 え給ふ。「すこし御かたち給は、院にまゐり給へるなり。御方とく参り給ひなむ。こたみの
 いなをしかな。おきないでまかりて、つれづれとさうさうしくてはべるに、もてかしづきて
 さにもまたてまつらむ。ゆかしくおほさむ御時はゐてたてまつりて御らんせさせむ」ときこ
 え給へば、大將も「いとよきことなり。にくしともつねにまゐりて見はべりなむ。御らんせ
 むとおほさむほどには、むかへて見せたてまつらむ」とのたまへば、宮「いざや、かくおそろ
 しきことなればまたあるべくもあらぬを、ある物をこそはいぬがもてあそびにもとてぞや。
 さらば何かは」ときこえ給へば、めのと、ゆ殿、ないしのすけひきゐてまかで給ひぬ。かくて
 大宮も、おとゞわたり給ひて、よろづの物てうじてたてまつり給ふ。大將「いみじうわづらひ
 給ひつれば、御ぐしやおちむとおもふこそいとゆゝしけれ」。宮は「さるはすこし人心ちもせ
 ば、院にまゐらせむと思ふものを、かくてやみぬるにやあらむとおもひしかば、いとこひし
 くおぼえ給ひしものを、それもみ所ありて人のやうにものし給ひしかば、それをおほしてゆ

かしがりきこえ給ふにこそはあらめ。今はかひなからむや。見えたてまつり給ひぬべし。や
 みたてまつらむ。おき給へ」ときこえ給へば、「さらば見よ」とておき給へり。大將うちわらひ
 て「こゝろみにむかひ給へるこそつねなけれ」とて御ぐしをかきなで、見たまへば、おちげ
 もなくめでたし。かくてすこしやせあをみ給ひつれどいとよきよりなり。「かくながらもにく
 げには見たてまつり給はずとも、いまずこし人となりてこそは去ばしねんじ給へ。ころもが
 へのほどにをまゐらせたてまつらむ。わかきみかくて見たてまつるこそいたづら人見たて
 まつりたるこゝちすれ。去にてふし給へ。もしさるよいづれのよに左大とゞの御こゝろをわ
 すれむ」。宮「ものおほえざりしに、りしのかぢせしこそとほくきこえてたすかる心ちせし
 か。いかでこのよろこびいはむ」。大將「いまよくものし侍らむ。いとみじき人なり」などの
 たまふほどに、左近のめのとといふ、さわがしげなるけしきにていできて申すやう、「いと
 そろしき事をこそき、はべりつれ。二の宮のあちどのめのと、宰相中將にぬすませたてま
 つらむとたばかりて、おほくの物たまはりにけるは、おほきなるりのつぼにこがねひとつ
 ぼいれて、ちんのころもばこにきぬあやいれてこそ賜はりにけれ。かゝること知りたるげす
 を、はかなきことにてうちおほひいでければ、はらだちていひの、しりければ、みな人き、
 はべりつ。（注）さきさきもおほくの物えてけり」ときこゆ。宮「さればこそそれを思ひて一よもよ
 びいたてまつりしぞかし。あなかまや。さゝにくし」。大將「何ぞとぞや」とのたまへば、宮
 「あはず」との給ふ。大將「いとよく去りてはべることをや。五の宮もかりぎぬすがたにては

そどのにたちたまへりけり。さるさわぎに少將いりなまししかばいかならまし。こゝろすとも
 さるべき心か」との給ふ。めのと「左近らこそさるいたづらものも賜はら給はず。おそろしきは
 かりごともつかうまつらでやみぬれ」。大將「やれぶこもちにおはすとも今もさやうにたば
 かれよかし。いなともいはじや。御をぢとも」などのたまふ。こゝは御うぶやの所（御うぶやの所）か
 くて年いとをそま年にて、三月かみの十日ばかり花ざかりなり。さかの院花のえんきこしめ
 さむとて、つくりまつらはせ給ふ。よろづのたからものをつくして、御まへのものどもまう
 け給ふ。おほくのまうけ物をさせ給へば、源中納言は院のけしなれば、おほくのかげ物て
 うじ給ひてたてまつり給ふ。かくて十日なむその日なりける。かねてすさく院に「花御らん
 じてわたらせ給へ」ときこえ給ひつれば、まゐり給ふを、うちの御かどきこしめして、すさく
 院に（北御下）まゐらむと思ふを、おなじくば、その日さかの院にまゐらむとおぼして、御とも
 にとて（信）たびたび中納言をめすに、まゐりたまはむともなければ、あすになりてくら人御つ
 かひにて「さかの院にまゐるべきを、院の御とも民部卿、これかれつかうまつるべけれ
 ば、御とも人さぶらふまじきを、さとはたひさしうものせらるなるをつかうまつられな
 む、ようわらむ人のあす見ざらむや。ひがみて」などおぼせられたり。民部卿「かくたびたび
 おほせらるゝを、なほまゐり給へ。かの女御よにこゝろざしなくてあるさ給ふともき、給は
 じ。申し給ふことをき、給ふとやおほさむ」。中納言「なにか、それをば思ひしあらねど、ひ
 さしうまじらひもまはべらぬに、そこばくのみかどの御まへには、いかでかさぶらふらむ。

そがちうにさかの院はいかにめくせつゝい給へるみかどぞ（御）。民部卿あつまりとはす（御）や。う
 ちにはこぬ物か、さ待おもひてこそまゐるべかなれ」とてさぶらふへさよしそらせ給ふ。
 民部卿よろこびて、我つかうまつらむとててうせられたるふく、直衣の御ぞどもをたてまつ
 り給ひて、我はあるにしたがひてつかうまつり給はむとす。大將もいとま文いだしてまゐり
 給はぬを、行幸あるべしとてめせば、えまゐるまじきよしをそうせさせ給へば、かくて宮（宮）な
 ほまゐられよかし。などかは「と信のたまへば、かくておはするを見ず（信）し（信）てたてまつり
 て、しづ心もなからむに、文つくりあそびせよとせめられば、心（信）そらにてあやまちをして
 やざわがれむ。そのうちにさかの院をみつけたまふ所に（信）ちうやくにさしあて給ふ。こせ
 にてさわがしきめを見せ給ひしも、かの御そゝのかしにて上はせめ給ひしぞかし。わい（信）て
 もさてぞかくてもさぶらふぞかし」などのたまひて、「その日になりてことかけぬべし。右の
 おとゝは院の御とも（信）につかうまつり給へければ、大將さぶらひ給はではあるまじ」とさ
 わけば、むづかりてまゐり給ひぬ。たつの一てんばかりに、すさく院にかんだちめ、みこたち
 ひきゐてまゐり給ひぬ。たつの二てんばかりにうちの御かど行かうし給へり。この院よろこ
 びかしてまゐり給ふ。花のかげにさい人どもがく所のものどもみなさぶらふ。文人ははかせよ
 りはじめ、したよりいでたる人廿人ささうもめしたり。まはしわりて右大將、源中納言、新
 中納言、宰相の中將、右大辨、頭の中將、くら人の少將ちかずみなどはふみの人にめさる。さ
 がの院にだい給はせて、たん（信）るさせ給ひおほせらるゝ、「このやうにもありしもせじ。公卿

たちやくつからまつらせむ。右大辨すゑふさのあそんには、御うつからまつらせむ。右大將の朝臣にはかうしつからまつらせむ。すぐ院いとけうあり。あそんはふみ、かうじすることなむ申し侍る。うちの御かど御前のかうぞいとなくつからまつりき。よき今日のかうしに侍り」と皆ゆるし給へば、大將さればよ、なにごとにあて給はむとは思ひつる、いか概でつからまつらむとすらむとおもはず。かくてみなたんぬす。大將ふみをたまはりにまぬるを、さかの院御らんじて、「このあそん見る時こそよはひのばる、心ちすれ。いときやうさくになりまさりにけり。この國の人にはあまりにたる人かな。すぐ院このころはせうすぬしに野たるにこそ侍るめれ。さいつころほとほとときびやうさをな概むも侍りて、かしこくまんなうし侍るなり」。さかの院「さき、侍りき。三の内親王のもとにとぶらひにものして侍りしかば、たのもしげなくものしてはべりしを、ことなる事もなくものせられけるをよるこびはべる」。すぐ院「いみじうはべりけるを、からうじてちうはいして侍る」。さかの院「けふこのあそんになんでふわざしいださせておもしろく賜はせむ。院うちわらはせ給ひて」。今は賜はすべき概もなし。とて笑はせ給へど、いさ、かつ、みたるけしきもなく、いとめやすくていりぬ概。源中納言めやすくていりぬ。新中納言いできたるを、みかどたち山概どもりはいかでいできたるにかあらむ、今日めづらしきことはまづこれありけりとおどろき給ふ。うちのみかど「からうじてめしいでたるなり」とのたまへば、すぐ院「あたらし概もさてもありぬ概。さおほやけ人のあやしうてもありつるかな。このあそんの常になげきしも

のを」などのたまふ、午の二てんばかりに、さき概のものをのこどもに概たいども賜ふに、かたくもあらず、五位、六位なり。あらはなる所にさぶらひて、の、つかさのくわん人ども左右にさぶらひ、そなたにぬたるちかたまぬりてつかうまつらせ給ふ。たんぬる賜はる人のめやすきをばほめ給ふ。見ぐるしきをばわらはせ給へば、おはしつ、天下のまぢり概をつかうまつりあへり。うへたちも御文あそばす。みこたちかんたぢめ御心にまかせてつくり給ふもわ概り。すぐ院のみこたちは、さき概の二のみこは、御やまひしてはふしになり給ひてにし山におはす。大殿ばらの四人さきさいばらの五人さぶらひ給ふ。七のみこ中の君のあね女御の御はらそれまゐり給はず。九のみこはかういばらわらはにてまゐり給はず。さかの院のみこは三人ながらうちの御ともにつかうまつり給へり。御前ごとにみなまゐれり。文人がく所のものどもなどにもたまふ。うへたち御ことあそばし、かんたぢめみこたち文つかうまつり給ふ。かく所にはかくつかうまつりあはせていとおもしろし。さるの一てんばかりに、ささうのふだいとらせ給はむとすれば、あるはきよがきたるもあり、あるはなから書きたるもあり。とかくままとひて手をひろげてたてまつりまゐるに、みちにたふる、もあり。かくまどふを今日の物見にはまたり。花さそふ風ゆる概にふける概ゆふぐれに、花雪のごとくふれるに、大將文たてまつりにやなぐひおひて、かうぶりに花ゆきのごとくちりて、右のちかさまもりのつかさのかみふちはらのなかとと申し給ふ。こゑいとたかういかめし。さかの院「よきからしのこゝろみ概のこゑ概なりや」とてわらはせ給へど、つれなくていりぬ。ふみみな

奉りはべれば、ふだいとらせ給ひてよませ給ふ。大将まゐらせ給ひてよみ申し給へば、みかどたちよりはじめてみな見たまふ。いさゝかおちつらむ所なし。すゞく院、かゝるものこゝろつよきものにおちなき人いかで前後知らずまどひけむ、なほわがみこをおろかには思はざりけりとおぼす。やんごとなき文どもをばすせさせ給ふ。大将の文をみなみかどたちずんじ給ふ。かはらけまゐる。新中納言いみじうはめらる。右大辨かはらけまゐる。かくて御あそびはじまりて、すゞく院「おいせる春をもてあそぶ」と歌の題にかゝせ給ひて、さかの院にたてまつり給へば、御かはらけとりてうちのみかどにたてまつり給ふと給ひて、

「春くればかみさへまろくなる花にことしは君もゆきぞめるかな新中納言」。うちのうた新中納言、

「つもりける花をもなかみざりけむ春とはわれもいはれつるよに」。すゞく院、

「まろくともちよしつもらば花を見よいづれの春かつれてまゐらむ」。式部卿宮、

「つもりゆく花もなげきにこがくれてそらにまらぬまづく新中納言なりけり」など申したまへば、「このみやすどころいつからまゐりぞまたりや」とて御かはらけまゐり給ふ。かはらけく

だりて、中つかさの宮、

「かくばかりえだはさかりに匂ひつゝいつかは春のふかくつもりし」。兵部卿のみこ、

「いにしへは春の宮をやさみはみなこひてををしむ花はちらめや」。彈正の宮、

「ちる花ぞかしらの雪と見えわたりはなこそいたくおいにけらまな」。そらのみこ、

「うちむれて花をしをりてかざすばなにか春のおいもまらまし」。五の宮、

「風をいたみ我らにふれる花をさへかしらの雪と見るな宮人」。ひだちの大守みこ、

「さくら花さかざらませば野べにいで、春のよはひをなにかまらまし」。大さおとと、

「さくら花いつかあくべき野べにいで、ころど、ろにきみがをしむに」。左おとと、

「もとゆひにはなむすべりと見ゆるまで見れどもかゝる春の花かな」。右大殿、

「ちりぬとて手ごとにをればさくら花かみさへまろくなりまざるかな」。右大将、

「櫻ばなくよをふればこがくれて見る人ごとにおいを見すらむ」。民部卿、

「おいもみな花をりあそぶこのくれは春さくらやとまもにわくらむ」。頭大納言、

「たちよればおいをのみます櫻花をりつゝかざすきみはいくよぞ」。權中納言、

「ちる花にかしらのおほくまらくるは世々をへだつるやどにさけ春源中納言」。源中納言、

「花の色はさかりに見えてとしごと春のいくたびおいをまつらむ」。左衛門のみかみ、

「おいぬとて春をばをしむころしもぞよろづの花はさかりなりける」。新中納言、

「君むれて花見る今日とおもはずば山のくち木も春をまらめや」とあるを、すゞく院いといたくせんせさせ給ひて、かはらけまゐらせ給ひてのたまふ、

「我がまへにこだかくなりしもとさくら山べにえだどくつとなげきし」。うちの女御、

「くちぬとてなげきしえだは春をまらめりし櫻のみえぬけふかな」。さかの院、

「もろともにおひし櫻のまづかれてのこれる枝を見るがかなしきなむ」とて御かはらけたびたびになりぬ。御ときよきほどにて御あそびさかりて、大将、源中納言などにまやうの

ことたまひて、みな人々もものゝねつかうまつりあはせて、すんのみひま、うたうたひ、さるがうせぬはなし。うへにまたちいみじうけうじわはせ給ひて、すざく院「今日は（註）いと興ある日なりや。いぬの（註）年の秋なかりがいつる所にて、このそらまかりて、人もさかぬところにて、おのがどちかくしたる手どもあらはして、けうさかし侍りけるこそいとなくはべりけれ」。さかの院「さきくや、たゞまるはふしにだらによませて、かのあそんのきん（註）ひき（註）ける曉、たゞ人などのみなつどひにけるをや」とのたまへば、うちのみかどたちたまひて、さいの宮にたいめんを給へり。さいの宮「あなかしこや。ひさしうもなりにけるかな。三條に侍りしみの若菜摘みにまうできたりしまゝにやはべらむ」。みかど「まばはかくけふあすに（註）行くべきを、まかりありさも心にまかせはべらざりければなむ」。宮「いまはかくけふあすに（註）なりはなれば、さきこえさせおくべきこともさきこえさせおきて、よみぢもやすくと思ひたまへるを、いとうれしくわたりおはしましたることをなむ、このあつげなるなつにてはべりつる人は、おもほえず、おいのちいできてはべりしかば、中になしくおもひ給へてかへりみさせ給へとてまゐらせ給ひしかひなく、人かすにもおもほされ給へば、はづかしうおもひ給へるを、このくらゐゆづりはべりなむとなむ思ひ給へる。びんなきこと、これかれさきこゆともむかしおもら給へし。こゝろざしかなふるとおぼしてかならずおぼせ給へ」。みかど「ひさしくおもほしわづらひて、またものゝ心もまらずはべりし時、みなれ給へたてまつりにしかば、むつまじくたのもしき物にはかしこをなむ、あやしう人にもま給

はず。うとうとしくものし給ひしかば、おもほしなはずまでとなむまばし物きこえざりし。のたまはすることは、かやうのことは例とはせでなむものすなるを、かうかへさせ給へらむにさるれいあらばなにかは。さらずは封はたまはりなどをこそは御くらゐひさしくものすべく侍るなれ」。宮「封賜はりなどせずともこのくらゐとこそいはせまほしくはべれ。あるにはばうの母をとこそはおぼすらめ。この人をばあはれとおぼさましかば、かゝることとはべりけるを、まばしまたせもこそはま給はましか。さもやまこゆるとて、いそぎま給へることとは」。みかど「かゝることのときものし給はましかば、なにのうたがひにかは。年をろさもあらでかれがいであうできたりしかば、なに心もなくあらむをりはさせむとのたまひてしかば（註）、そらごとせずといふそら（註）にまかりなりにたれば、はたかくまゝとてなむ。かれもおもほしすつ（註）べきにもあらぬを」とてまきこえ給へば、宮「すべてさいはひなきものは」とて御けしきよからねば、たち給ひて「日の宮の御方のまゐり給ひて、いといたくるひにけり」とてさうぞくとさひろげてふしたまひて、いとよく申す、「よ（註）うしてさいなませ給ふなめれ行り。よろづのことかたみにならひて、あはれにむつまじくこそあましううち泣き給ひしかば、おそろしさにこそまきこえざりしか。なかはかゝるわざをもとほし給はざりし」など御ものがたりま給ひて、「いでいでこのもたまへらむ物見せ給へ」とまきこえ給へば、「あなむつかしや。なでふさるものをか」。うへ「かゝるほどのをまた見ねばぞや。かゝるついでにこゝのを見ていへる。なほ見せ給へ」との給へば、めのとめて見せたてまつり給ふ。またいか

にもたり給はず。いとふつゝ、縁かにまろくこえたまへり。うへいだし給ひて「あなちひさや。人はじめはかくある。我らもさぞありけむかし。かゝるものをおほきになすこそ女はおそろしけれ。宮はいとおほきになりけり。はじめはいとあさましや。月ごろ御らんじならひたらむを、それはまかでにき。おほきになりたり。それをぞちひさきと見しかと懸て、これをもたいめんやいはむ」とて、あこめの御ぞぬぎてめのとに賜ふ。かくてかんだちめ、殿上人座につきさぶらひて「御こしよせてぞひさしくなりぬ」とそうせさせ給ふ。うへ「あなもののうや、こゝにとまりなばや」とのたまふに、るよつと申すに懸時なりぬとてさわぐに、まづ心なくいへば「さはとくまぬり給へと宮かく懸きこえこしらへ給へ」と懸ていで給ふに、ささいの宮より源中納言たてまつりたまへりし。女のよそひ廿人懸たりばかり、さくらの懸色のほそながわはせのはかまなど、かんだちめ、殿上人にたまふ。院の御方よりも例のおほやけやうにてはあらで、みこたちかんだちめに例の女のさうぞく一具、殿上人にはほそながはかま、下らうの文つくりなどには、こしよしはうもちのわたささう懸す懸までたまふ。大將にはかうしの祿とて御馬一、みこたちにも御馬一、みかどたちにはよにかしこき御おび、御はかしなどたてまつりたまふ。こゝはさがの院のはなのえんの所十五字脱。

未六月十日校合畢。 建正

樓のうへの上

三條右大臣殿の、かの一條殿のたいどもに居給へりし御かたがた、宮むかへられ給ひて、今はかぎりなめりとして思ひ思ひにわたり給ひにしなかに、西の一のたいに、源宰相の、

「ふるさとおほくの歳はすみわの懸わたりがはにはとはじとやする」とかきつけ給へりしを、殿おはして見つけ給ひて、「心ふかくをかしうかたちなどもことなむなかりしを、いかでこればかりをありどころをさかましかばたづねてしがな」との給へば、ないしのかみ「とことなり。宮のおはしけるところにあまたさてものし給ひけるを、懸をんな子もなくさうさうしきところは、ひろうおもまろうめでたきにもとのやうにてもものし給は、聞えかはしてあらむ」とて右大將のまゐり給へるに、「こゝにの給ふめること、なほ御こゝろとていめてたづねたまへ」と聞え給へば、げになかくとておほす。かゝ懸るほどに朱雀院の懸御はらから、そ懸きやう殿の女御ときこえし御は、のさい宮にておはしつる女御かくれ給ひぬれば、のぼり給はむとて、源大將殿のたまふやう、「この宮の御は、懸方もはなれたまはねば、はやちちかうて時々懸見たてまつりしに、御かたちさよげにてをかしくおはせしが、をりをりにきこえかはし、に、なにかはおほしちぎりしを、にはかにくたり給はむとせしに、又はかくみつけたてまつりてことごとおぼしてなむ大將の侍りし。げにものせられずば仁志のびて

たまさかにさやうにありなまし。また御としもわかうおはすらむかし。何かはいまもさおはせかし。宮いかにおぼさむ。かたじけなけれど、こゝには大将のとしのほど見たまふに、今にあらねばこそ」とときこえ給へば、「さや、なほすさ待め事なり。いまの一條西のたいの君はたづね侍らむ」とときこえ給ふ。かくていしつくりでらの薬師はとけせんし給ふとて、おほくの人まうで給ふ。大将の御物忌たまはむとて、いとまのびて一ところ御ともに入おほくもなくてまぬり給へり。げにいみじうさわがしきまで人まうでたり。曉にはみないでぬ、この御局のかたはらにとままりたる人、いとわてはかにゆるゆるしきこゑして、うへに二人ばかりまづかへなめり。人にいたうもかくれて几帳のはころびより見えたるもめやすし。大と様このみだうのうちよりきためる様はめとなるべし。さやうのおとなおとなしきこゑにて、「この君の御ことよかゆんべくのり給ふや。おやにおはするとのにまられたてまつり給へと申し給へど、いと心ぐるしうなむおほしなげく見たてまつる」などいふ。「おう物であるにやあらむ。おはれることなりや。おやこと見ずまらざらむよ。たれならむ」とときこえ給ふほどに、八つ九つばかりなるをの子、髪もよぼろばかりにて、かいぬり、こきうちさひとかさね、さくらの直衣のいたうなればころびたるをきて、まろら様あてにうつくしげなるけさうのもなく、たく様みにたちいで、とのかた様みたちたり。よう見給へば、宮君の顔に似たり。聲はいとわてになまめかしうあいきやうづきてをさなげにもものなど言ふ。いとうつくしげに見給へば、見あはせ給ひて、あふぎしてまねき給へば、うちゑみてふとおは

したり。うちにいとわてなる聲にて、「かれよび給へ。かの君はいつちぞ。あな見ぐるし」と言へば「おはしませ、おはしませ」と言へどもさかず。大将ひぎにすゑ給ひて、「は、君はこゝにか」といたまへば、「おはすめり」。たが御こぞ様。「まらす」。御て、はたれとか人はきこゆる。右の大将と様かや人は言へどまた見え給はず。よぶなり。まうでなむ」とてたち給ふ。あやしきことかな、西のたいの君をこそちごありしを、たゞひとめ見すて、をば君なむかなしうしてとりこめてしとのたまひしにやあらむとあはれにもあべきかな、それにやあらむ、なほけしき見むとおぼして、すゞりめしよせて、

「わたり川いづれの瀬にかながれしとたづねわびぬる人を見しかな。おはしませ給へや。まめやかにはいかでかうけ給ひにしかな。しるべはいとようこゝに」と書き給うてうへ板にちかうつかひ給ふわらはしてたてまつり給ふとて、「この御返り給ふと様てなむ。わか君を」とときこえ給ふ。とりいれさせて見給へば、大将の御手なめり。いとみじうはづかしう、いかに見給ふらむとおぼえ給へど、ほとけの御まるしもあらむとうれしうおぼす。まろき色紙にいとおぼつかならおもひたまへらるはれど、

「わたり川たれかたづねむうきまづみきえ様ては泡となりかへるとも。えおほえすぞはべると様書き給へり。おもひわてに、かの見たまひしてよりは、いとなまめかしうわてにかきたれど、それなめり、げにまがへる心かなとおぼす。たちかへり心うくもてはなれてはおぼされしものを、いまよりはおやなどこそたのみきこえさせむとおもう給へらるれ。いとまめ

やかにとしどろいかでものせさせ給ふらむ」となげききこえ給ひて「思ひのほかならぬ御御さまにてもものせさせたまはゞ、御むかへもいかでか」なげききこえ給ふ。「ひとわり心ばそくておもう給ふに、いとうれしく見たてまつるも、いとたのもしくなむおほえ侍る殿をばかたじけなけれどさるかたにおもひきこえ給ひて、心やすくおほさばとりわきてとなむ。君にはかたらひきこえさする」ときこえ給へり。「こ君にはまるがおとうとおはしけれど、このやうに思ひきこえむ」などいとよくかたらしきこえ給ふ。いと思ふやうにめでたきさまにてかうの給へば、みならひ給はぬをさなき心ちには思ひいとうれしくて、「まるも思ひきこえむ」などきこえ給ふに、「おはせ」とあればいり給ひぬ。御めのとなどかぎりなくよるこばしうおもふ。日くれて屏風のもとにてたいめんを給へり。いとあてに、けはひなどもまき待ぶきやうの君よりも、心にくはづかしげにものし給へり。院の女御の御こゑにおほえ給へり。わか君の御こともおいらかにたまふさまはづかしげなり。「今かならず御むかへはべりなむ。まかまかなむつねにきこえ給ふ」とのたまへば、「なにかみづからはつねか、つづろひする人にてはんべらむもみぐるしう、心ぐるしう見給へる人は、かの御こゑはたのもしげなくおほえ給ふを、げに御心をとめさせ給はむこそはたのもしうはべらめ御。大將はかくおぼなどきこえ給ひて、やがて「いでたてまつらむ」とのたまへど、「いままづさる人など聞え給はむに、げにとおほしいづること侍らばこそ」とのたまふ。又の日もよびたてまつり給ひて、御くだ物などまゐり給へど、あそびをのみし給ふ。大將の詩ずんじ給へば、

こゑいとをかしうてもろともにし給へば、「いとらつくしう、たれかたをしへたてまつりし御。」「は、君」ときこえたまへば、をかしかりけりとおほす。三日はてぬれば、いで給ひなむとす。「いづくよりまゐりくべき」ときこえ給へば、「いひしらぬ山里のやうになりたる侍り。御らんせんにもいとあやしげになむはべる」ときこえ給ふ。おなじほどにいで給ふ。御君の御もとにことに人もなし。御むかへにまゐり給へるさるべき人、むつましき人をまゐれとてそへたてまつりたまふ。西の大宮なりけり。一丁なれどいみじうあばれて、いとかすかなり。をばもかくなむときこえ給ひて、かぎりなくてよるこび給ふ。ひとゝもに、くだ物さかななどきよげにしていだし給へり。大將はやがて殿にまゐり給ひて「ものいみま侍らむ侍とて、いしつくりにもりてはべりつるに、まかこの人なむいとらつくしげにてこそおはしけれ。はやけふあすにてもむかへ奉らせ給へ。ひんがしの一のたいのみなみかけてこそはよくはべらめ」などきこえ給へば、「いざや、心などのおもふやうによくもあらずば、みためにもめんぼくなくこそはひだりのおとゞのくさのやうにて、いういうとひきつれてありき給ふに、ひとりなれどかれにやおとらじと思はずばかりに物し給ふこそ、世の中の人もなかなからしと思ひたるを、なまよろしくてあるべき」との給へば、大將かんのおとゞに思ひこえ給ふ侍らむ。すべて御心せばくおもはせばなりけり。たとひ人のはらからなまわろくても侍らむ侍らむにそれにつけてやおほえのおとらむ。思ふやうにものしたまはずとも、それにつけてこそ思ひとゞかのすぐれたるさまは見こえ給はめ。いと心うき御ものいひなりや。

はやむかへたてまつり給へ」ときこえ給へば、「いまいはや、ともかくも」ときこえ給ふ。大將「けさの御おくりに入たてまつりつるに、かのすみ給ふなるところは、いみじうあれて心ほそげになむはべるなる。まづ御文などもたゞ今はものせさせ給ひてやよくはべらむ」との「けしきいとすがすがし。むかしあはれ、げん宰相のゆくすゑやんごとなき人おはすとも、なほこれこゝろぐるしう見奉らばむ。心ほそくものはかなきさまにてちりはべらむは、いとかなしかるべくなむ。かたちは世にも難いとおほくはべらむ。心ばへえ難にくませ給はじと言ひしものを、なにをかはやるべからむ」とのたまへば、「かく心深かりける御心をいかにさてたのもしかりける。いでや」とてをはりより奉りたりしからくつあらば、いれ物ながらやよからむとめしめでたり。かたつかたにきぬ廿疋、あや十疋、いまひとつかたにはないしのかみ「こゝにもものいれむ」とて、かいのたまひて、かいねりの綾のきぬひとかさね、うすいろのおり物のほそながの袴、ひとへやまぶきのあやのみへがさねにそきたまはむとてまだらぎぬといれ給ふ。御ふみは「あさましうとしごろになりけり。おぼつかなき心よりほかにてなむ。いづくにもまらせ給はざりけるもことわりなれど、よろづ心うく、大將きこえられければ、あはれなる人もあやしう、またも見せまらせ給はざりしかば、いとおぼつかなきのみを、いままでのみはさすて候かは。いとよしや、心やすくてわたり給ひぬべきところなむ侍る。御むかへすこし心くるしき人のこひしさも、

さてこれはたれは人のものし給ふめ。何にかあらむ」とてはやくかの御方に心よせにありしやまとのすけなるをめしいで、奉り給ひつ。との人いであひてめづらしがり、おほんかへり「めづらし給へ、よく見給ひつるはげにおぼつかなきほどになりけるにや。

もろこしになりしなかのとこなつを露とおきふしわれぞわすれぬ。心ぐるしくおぼすなるは、ともかくも、かたもものせさせ給へかし。これはまたやつたへ待てむと見給へるもいままらにあひなきかたやと聞え給ひつ。御返り、かんの殿に「これ見給へてこそこれおぼぢかく見し人々よりは、よく書きたれ。み所あるまゝに、をかしくぞかきたるや」。かんの殿「げにいとをかしげなり」とりわきて思ひ入す。はらからなど言ひむつまじき人もなし。心ほそきに心ざまなどもおもふやうにおはすなり。さとりわきておもひきこえば、大將をも心からのやうには、思ひ給へし。あやしとおとなしくなられたれども、まづはかなき事もおのれと言ひあはするに、なくなりたらむ、よにさうさうしとおもひまどはむと、いとあはれなり」と殿にもきこえ給へば、「ゆゑしき事はうたてあり。大將のあひおもひかたみに、うしろやすく思ひ給はむには、いとよろしき心さまぞ。あはれみやの君こそやんごとなくおもひきこえしかひなく、ものはかなく言ひはがひなけれ」などの給ふ。かくてひんがしの一のたい、大將の御物忌などに時々わたり給ふところなり。さるべきさまにまつらはせ給ふ、びやうぶどもなどたてさせたまふ。大將あすのよとておはしたり。きども、せんさいなどは數あまたありけれど、げに山里のやうに、なかりにけり。たいどもらうなどかたぶきあや

しきさまなり。人のおともせず。ひんがしのかたによりたるからしふたまばかりわけためり。ひつじさるのとよりみいれ給へば、なかの玄やうじもこぼれたり。みなみのすよりのぼりてのぞき給へば、ひんがしのつま戸のすだれわけて、人ものしめぬたり。もやの方のはしらに、いとくろきうちきのつや、かなる一かさね、うすきはなだのわやのもしりわたかさねてきて居たる人の、髪いとをよりかけたるやうにつや、かにもなりけなり七六〇ひたひにかゝれるほど、いとうつくしげなり。そびやかになまめかしきかたち、ないしのかみ御やうだいかたちにおぼえまし七六一難たり。ありし君かいぬりのころ七六二たはりうら給ひてつるはぎにていとちひさくをかしげなるびはをかきいだきて、まへに給へば、いとうつくしとおもひ給うて、かみかきやり給ふ手つきいとうつくしげなり。この君びはをふと七六三難をかしくうらうらしく七六四難ひき給ひつ、「君いまさへこのちひさきびはをひき給ふは、いとみぐるしからむは」との給へば、「さは御七六五難ひぎにむて七六六難ひきはべらむ。たはたはぶれにはべり」とおほきなるをひき給ふ、いと上手なり。これをひき給ふを殿に見せたてまつらまほしくおほえ給ふ。大將うちまはぶき給へば、おどろきて几帳ひきよせ給ひて、この君して御まねいだし給へば、おほせかたじけなしとてかきいだきて、「いでその御びはもておほせよ。たゝ今なむまゐりきつる。今はなにかははぶき給ふらむ。やがてや参り侍るべき」ときこえ給ふ。「御むかへはあすとなむ侍るべかん七六七難なる」などきこえ給ふ。は、君、いとほづかしくあさましかりけるわざかな、さばかりこゝろはづかしげに、おはする人のいかに見給へ七六八難。

らむとおぼす。御かへりを「うけたまはりぬ。たゞいまみづからきこえさす」とてもやの玄やうじのもとにてたいめんし給へり七六九難。「いまはよにあらむやうもおぼされでやみにしを、いかに聞えさせ給へれば、ちかきほどになどよく侍のたまふらむと思ひ侍れば、きこえさせむかたなく、なほも何ともおもひたまへは七七〇難りて、わけくれもことに見たまひいれざりしを、はればれしくなられたる人のこりすくなくおぼえ給ふ。さらにはいとなげかしきことになたまへるを、いまはうしろやすくな七七一難む」とぞ聞え給へば、「それこそはいとことわりに侍るなれ。こゝにはことなきこゆることもはべらす。まことに年をろおぼつかながりきこえ給ひつる位が、たゞかり七七二難にものし給へど七七三難。いと心ぼそくたゞひとりものせらるれば、あまたものせさせ給ひける御なかに、「なにともおぼされずとも、とりわきて思ひきこえさせむ。むつましくおぼさるべきものなり。今ちかくても見給ひてむ。ふるめかしくいと心やすく御はらから七七四難のやうにおぼされむに、いとよくなむ侍るべき」などきこえたまへば、「いとうれしきことにも侍るべきを、ちかくては御心おとりやと思ふ給ふるうちに七七五難、こゝにもいとこゝろぐるしくてもものし給へば、ちひさき人はそひたる人もはんべりなむ。よれそながらも今はたのみ聞えさせ七七六難なむときこえさせ給へ」などのたまふさまのいとめでたう、かぎりなき人の御けはひにもかよひたれば、いとまめやかなる御心すこしひが七七七難ごとともきこえつべけれど、あるまじくびんなきこと、思ひかへし給ひつ。さもきこえ給はず。「いとなきこと時々はわたらせ給ふともこたみはいかでかわたらせ給はざらむ」。「今それはこのころすくして

なむ」ときこえ給へば、「いとあしき御事にはべる（おぼ）なり。かの御はいなくはべらむ」など聞え給ひておはし給ぬ。ゆふつけて衣ばこ一よろひに、からあやのなでしこのうちき、こきはなだのうちき、こむらさきのおり物のはそなが、みへがさねの袴（袴）、ひとつねにはわか君の御れうに、いとこきうちきひとかさね、うすきすはうのあやのうちき、さくらのおり物の直衣、つゝじのおり物の指貫などいれ給ふ。をんなの袴のこしにわかきうすえふに、

「人知れぬむすぶの神を去るべにていかすべく（おぼ）となげく下ひも」とて御文もなし。いとちひさき小舎人わらは「御返りたまはら（おぼ）む」と言ふ。「いとほづかしくあやしきありさまをおぼし給はかり給ふこと」とはたまふほどに、これを（おぼ）みつけてあさましくおぼえ給へば、御かへりも聞え給はず。は、君「いとあはれにかたしげなく、何ごともおぼすまじくよろづにこの御心のかうもてなし給ふにこそわれ。なほ去るしばかりのたまへ」とせちにのたまへば、たゞかく、

「うちとけてうちもなうこそたのみけれ思ひのほかに見ゆるまたまひも。さまさまにも見給へられて」などきこえ給へば、わらははつゝじのこうちき、わか君の御いまやういろのうちきひとかさねそへてかつけ給へるに、御返りのかぎりとしてとら（おぼ）ねばあゆみさりて、おまへのむらすゝさのうへにうちかけてはしりりぬ。「いとぞれてくちをしきわらはかな」と言ふ。御返りまゐらすとて「まかじかなむしてに（おぼ）げてまゐりつる」と申さすれば「いと（おぼ）かしくしたり」と仰せられて、御あこめ一かさね賜はず。御文たまひてさればこそくやしう、

なに（おぼ）せむに世のつねもこそ思ひ給へ、かゝるけしきを見えぬらむとはづかしくおぼえたまふ。またの日殿にまゐり給ひて、「きのふかしこにまうで侍りき。いかゞものし給ふ、見給はむとて聞えしかば、みづからはおはすまじげにこそたまふなりしか。たびたびさらばびんなかるべきよしきこえしかば、まかじかのたまひしをおはしましてなむよく侍るべき」と申し給へば、「あやしき事かな。なかさはあらむ。おそろしげにかしらもなりにたらむ。かたちもめでたかりしが、あはれ今までものし給ひける。びはり今の世にさばかりひきたる人はあらじを（おぼ）や」とのたまへば、「そよや、わか君こそまかじか物し給ひしかはりにこそはべなれ」。殿をかしき事かな。らうたくしてをしへ給へるなめり侍。は、君もいとよくひきま」とのたまふ。かんのとの「日くれた（おぼ）らばはやうおはして、なほひとたびにわたしたてまつり給へ。いでやあやしき心にくき人さまさまにあつかひ（おぼ）給ひけるほどよりは、なまめかしくをかしくこそお（おぼ）はせめぬ。左のおとゞはいとあいきやうづき、をかしくこそ見え給ふめれ」。殿「いでや、そのおとゞこそめにつきておほえ給ふらむ。浪のうへめでたくいまめかしくおはしますをみたてまつり給ひて、のちこそおのれをも思ひおとして、かくはぢのかぎりのたまはせ」との給へば、「例の事よ。さりとてやまひしたることわりなれば、くちふたげ」とてたさものなどよくよ（おぼ）せたまひてやりたてまつらせ給ふ。御くるまに（おぼ）しておはしたり。むかし見給ひしよりもいみじうなりにけり。几帳などはいとさよげなり。たゞいりに入り給へば（おぼ）よきほどにてもやにいとよ（おぼ）かなるうちきに、やなぎのおり物のうすきおり物、かさ

ねてきて歸る給へり。わか君はいとさよげにさうずかして直衣のかぎりき給へり。御ぐしはよをばらすき給へり。さがりばいとさよらなり。ひのもとにたちよりありき給ふ。見給へばおとな四五人ばかりちひさくて野をかしげなるわらはなどな有り。いとめやすし。むかしいとさくらや賑かなりし人のいとめでたくて野をまつらひむことり給ひしを思ひいで給ふもいみじう悲しうおぼえ給ふ。「わか君はや」との給へば、おとなおとなしくつゝいぬ給へり。「このわらはそのひとりよせよ」との給へば、もてまゐりたり。みたてまつり給へば、大將のちとなりし時かくやありけむと、うつくしげにはづかしさかほの、あみ給ふに、あいきやういとはひやかなり。をんな君にいとあやしくまたも見せ給はでひきぐし給ひてしことなど、とさるもののがたり賑などきこえ給へど、人のやうにも野うらみきこえ給はず。たゞいとおいらかにはづかしういらへきこえ給へば、なかなかの給ふべきこともなし。いとわはれにむかし思ひいでられ給ふ。まばしうちふし給ひて「夜ふけぬらむ。いざ給へ」と聞えたまへば「こゝにもやさうはさてまゐりきつるぞやかし」との給へば、「なにか、心まづかにかつかつさいはやう」と聞え給へば、「あやしきこと、さらばなにせむ程にか。またをさ待なきひとりばいかでか」との給へば、「さらばいますことしおとなおとな賑しからむほどにもせさせ給へかし。心ぼそげにもほのせらるゝ人をいとうしろめたくはべればなむ。なほのちに」ときこえ給ふ。「それもやがてもろともにもせさせ給へ。ひともすままでいと心やすきところぞ。母後君、わか君いかでか」。殿むかしにはにたまはず。いと心うくおぼしなりにけり」とま

めやかにうらみ聞え給へば、うちわらひ給ひては、「むかしの心のやうには、げにえわらずこそは」ときこえ給へば、「わが侍はとけことわりにはきこゆるかぎりには賑もあらず。とくとく」との給へば、かゝる所に一人はなれておはせむが、いと心ぐるしうおぼえ給へばなりけり。さはきこえむとていり給ひて、「なほこのたびとあめるをわたり給はずば、さらにもものはんべらじ」ときこえ給へば、「あな見ぐるし。さらば」とていでたち給ふ。大將の御もとに「その御くるまたいまたまへ」ときこえ給へば、たてまつり給へり。あれをんな君、わか君の御めのとを御くるまに、をば北の方、御まそくにおはするたいふの君、少將君など言ふのりぬべきに、おとな三人、わらは二人のりぬ。さるべき御とも十四人していとさくらしくわたり給ひぬ。大將などか曉方にはなり賑はべりぬらむかし」と申し給へば、「いとたてわたらじとありつれば、わか人どももろともにとてまひてなむものしつる」とてかんのとの、御まへへおはせむとし給へば、「はやまづまりて人もねいりて侍らむ」とてみなおもふやどにおろしおきていで給ひぬ。宮に「あやしく夜ふけ侍りにけり。おとしいまめかしきふることあらためさせ給へる」とて「何事ぞ、さらの人なり」などきこえ給ひては、御とのでもりぬ。かくてまゐり給へれば、わか君のこの殿をばて、どとて、むつまじうまどはしたてまつり給ふ。ぬ給へるところにもいとちかうむつれる給へり。殿をばとのときこえ給ひて、ことにむつれきこえ給はず。こゆみいたまふ日、大將殿のきみたち大とのへのおまたまゐりたり。なしつばの宮の君「このわか宮のいとさよげにさうずかしておはする」。人々

「わか君をいとうつくしげにおはするは、たれぞ」とひきゆれば「大將の子すくなくさうさうしげとてものしためる」ときこえ給へば「かの御子がいとかしこうわたらせ給ふめり。宮の君はらうらうしく、これはなまぬめかしくおはするは」などてよびたてまつり給へば、おはしたり。御々しもなかにながく、殿宮にまゐり給ふらむには指貫きてこそ」との給へど、宮も宮の君も「かやうかにかにこそ」とてきせたてまつり給はぬなりけり。あなにも知らぬ人は「大將のひとつ御はらなめり」ときこゆ。宮々やうの笛、宮の君よこぶえ、みないとめでたくふき給ふ。「この君なにかえ給ふ」と聞え給へば、「琵琶をひき給ふ」との給へば、「いとをかしきことかな」とて大殿まで傳う、中納言の御傳たらう、とうの中將、その御おとうと、四位の少將、大宮の御方にひきこえ給へて、これとてひかせたてまつり給へば、「人にだかれてはひきはへらす」との給へば、「おはせおはせ」とていだし給へば、ひかせたてまつり給へば、いとなくおもしらくひき給ふ。ふしむにひきあはせて三所あそび給へる人々、いとめづらかにをか得しき御ありさまどもなり。うちなどに御らんせさせばや。いみじきもの、上手は、又もいで給ふべきところなめりとかんじあはれがり給ふ。大殿もさまさまにうつくしう見給ふ。御あそびのぐにやかめり。大將子すくなくさうものし給ふに、かたみにゆくすゑを思ひうしろみに振りよかりけりとおぼす。入り給ひて「たいの子を人々をかじと言ひつる。あやしきは、大將見つけてはべりし。宮などをばむつびあそび給へるめり。われをば子ともおもはず。こはたれとも言はでつきたればこそらうたけれ」との

給へば「ことわりにこそあんなれ。ちひさき人は唯思ふ人にむつるゝものなり。一日初みたてまつりしかば、たいのすのこにて宮をいだしたてまつり得給へりしに、宮の君、まるもまるもとありしをいだし給ひしに、うらみあけおぼしてまつりしを、ちひさき心ちみずに見おはせしかば、一人からうらにながめてなむおはせし。などかこの君も時々はいだきたてまつりたまはざらむ。すべてかゝる御心のあれば、月加をへしかども、おもひいでもなくておはして、いみじきめのかぎり見しぞかし。涙おちぬべくつらきけしき見え給ひしか。大將は「宮をもたれをもわかずさまさまにこそおもひきこえたれ。かのをば君などの見給はし心うくと思ふ給ふなむ。人のなげきおひ給はず、あまねくなさけあり。世にひさしくおはせばこそおのれなくとも、大將の御ためにもたのもしうなせらめ。顔かたちのさ待おもひ給へらむにもものしく心も見ゆるもなし。いとたとしへなくおぼし給はむをこそ人はうたてなむ見たてまつらめ」などうちうちにかきこえ給ふことを、かの御方のまゝの君、たいの御方の少將の君とはいとことちなれば、いきあひてかたれば、をば君もは、君もうれしき事とよろこびたまふ。「大將の御子のありさまかたちよくおはするは、この御、こゝろはへのかうおはすればこそありけれ。このとの、御心はいでや心ふか、らむ人は人のいはいはて思ひたらむ心はいなとこそ思ひまじり給はね。うべたい大將殿をのみはおもひきこえたりけり」などのたまふ。かくてのち、梅壺の更衣ときこえしうらみきこえ給ひて、やますげをみねて、からりのあふぎ、うすえふのなかにいれ給ひて、

「うらやましおなじふもとの山すげのわきてぞ人はおもひかさぬる。思ひいづる事おほく」などのたまへば、御かへり、

「よそながらおもひかさぬる山すげをひとつにつらき^{山すげ}めしとやする。めもたどたどしくいまはおもひ^侍侍るを、なほむかしのやうにちかきほどにやはものせさせ給はぬ」とて、のちにむかへたてまつり給ひて、ひんがしの二のたいの北のらうかけておはす。「なかなか宮の御方の人々よりはやすからず^侍侍らば、世の中^{世の中}いにしへを思ひかへせば、わか君かゝる御すまひをせさせ給はむとや思ひしまなにもよらずや」など言ふを、かんのとの、人々きいて聞ゆれど、「あなかしこ、ゆめき、いる人もなし。人はさぞあなる」とていとさよらにもてなさせ給へり。殿は一月を廿五日はこなたいま五よをば宮の御方、このたいなどにはかよひ給うて、盡もこなたにのみおはするを、かんの殿「なほこれなむいと^侍見ぐるしく見たてまつる。いまは心しづかに時々はおとなひもしてあらむ。宮の思すらむ事もあり。これよろしきに^侍給へ」と大將にきこえ給へば、「いとようおはせられたり。こゝにかくてわが御まゝにておはします。なかつたはべり。今は人とかく申す^侍侍らばきならず、きこえにくきをのたまはせむついでに申ししでむ」との給ふにいりおはしたり。いとをかしと見たてまつり、見たまへり^侍侍人々のあるは世をそむきたまふところどころにかすかにてもものし給ふ。なほ^侍侍と申すまゝにめやすくかくものせさせ給へるを、いとうれしく見たまへるを、ひとかたにのみおはしますは、いとたのもしきやうにはべり。こなたに十五日^御、宮の御方に十五日^御や、

いま十日を三所におはしませむとさきこえ給へば、うちわらひ給ひて、「いとあやしくはてはあるまじき事をさへものせらる。むかしわか、りし時こそさまよひありくも、めやすく見まほしくおもひ給ふ人もありけめ。今は身のおぼえもはなやかならず。こしもいたければ交わりくまじ。ひと所にまた^侍侍ものしたることはまた^侍侍いとをおかしう、いか人も思ふらむとてこそあめ^侍。あるまじきことなり」との給へば、ないしのかみ「いなや、御心ざりていかいなど思は、こそあらめ。人々もつれづれにながめ給ふらむ。さてうち通ひ給ひておはせばよくなむあるべき。左のおとゞは、宮、おほい殿いとうるはしくこそ。十五夜づ、おはしつゝ、こどもいづれともなくおもひかしづき給へ。かくてそひおはせむかむに、かしこくやはあるべき。そがなかにも宮の御方は院のとりわきて思ひきこえ給ひて、をりをりもきかせ給ふらむ。いとかたじけなし。たいの君などは御こゝろざまなどもあはれに見え給ふ人なめり。そればかりにはなほこゝにはきこえむまゝに、人よりはことにもてなし給へ。かの^侍大將をもをば君のなくなきよるこひ給ふなる。おのれ一人して思ひきこゆるもゆゝしくのみおほゆるに、心ふか、らむ人には思ひおかかれ給ふらむぞうれしき。ゆくすゑにいさあふ事もあるものなり」などせちきこえ給へば、「廿八夜はこなたに、そのほかを^侍侍ば宮の御方終には」など^侍の給ふを、「さ^侍はそのほかに、おもひおもひにおはせむ」とのたまふ。「更衣の方はらうらうじくくせせしうものし給ふ。式部卿の君は心をさなくて、めのとものいひなめり。たいの君はたひ^侍らかなれど心深ければこそ人々の御ためにも心やすけれ。

そればかりはげにの給はむにまたがはむ」などの給ふ。かくてうち、春宮にもわか君見まはしうせさせ給ひて、たびたびの給へば、「おのれはわがこまひてまゐらせよ」とてまゐらせ給へたてまつり給ふ。かんの殿の御方に御さうぞくはま給ひひびきづらゆひ給へるは、いませすこしをかしげにめでたくおはするおぼ。ぬて参り給へれば、うち、とう宮もひとところにおはしして、「いとつくしき人なりけり」との給はす。ありさまらうたげにをかし。びはめして、「ひけ」このたまはす。まはし御いらへもま給はねば、大將「なほつかうまつれ」。「まだいとをさなく侍り。大きなるはおぼひとにいだかれてなむひきはへつる」とおぼそうし給ふ。女おぼたちあまなきしいで見る。げんじの中納言「このきつるはこれか。いとつくしかりける人を、今まで見たてまつらざりけるよ。このひざにを」とていできてひかせ給へば、すこしばかりいさになくひきてさしおき給ふ。うへも、みやも」やがてとめむ」との給へど、「まだいとをさなく侍りて」とそうし給ふ。中納言まのびやかにてぞの給ふ。「みやたちをかたじけなければどもこの宮にやあらむ。なかの君にはまさり給はじ、いかに」とのたまへば、さらにいいと見ゆるしうたゞ宮の御まねをしてさかなう心はうおぼなまめかしき侍りし。されば宮にもあからさまにもゐてまゐれば見給ふとて、うまれし時より心おそろしきおぼものと見まかせて見たまふ。ふよりのものなり。この君なかつたよるおぼをしへむこともさうつし。手などもいとつくしうかき、こゑもいとをかしうを侍る。春宮、ふぢつばの御方にいざと

ておぼぬておはすおぼ。大將まゐり給ふ。うちにたゞよびによびいれ給ひつ。几帳ばかりひきよせておはす。いみじうつくしがり給ふ。大將、そわらの君に「いとをさなき人まゐり給ひにけり。よびいれ給へ」そわらの君「いとつくしきは、たれにたてまつらせたまふにかあらむ」とてかくれもあらさおぼせ給はざれば、大將「あらじおぼものをおぼおおくは見給へかしとてむき給へるは人々わらははなり。まことはけさのたとひもあなれば、もの、はじめにゆしきを、いかでかとしてまかでさせむ」との給へば、あやしの事やとてまのびやかにわらひ給ふけしきも聞ゆ。「とくとくと」とのみの給へば、「さのみやは。まことはいとうつくしき御ありさまをつねにまゐらせ給へ」とて給もるともいいで給へり。みくらへたてまつらせ給ふに、うつくしげに、あてにけだかきことこのいとこのはかにもあらぬおぼをこにひきつれて見むぞおもたゞしくおぼえ給ふ。まろがねがねのわらはのすまひとりおぼたるかたをのみたまひてまかで給ひぬ。かんの殿に「まかまかなむ」ときこえ給へば、いとうれしとおぼす。宮君は殿をばて、まきとてむつれたてまつり給ふ。大將をばよそに見えなくおぼ見おぼたてまつり給ひて「大將まゐり給ふめりや」など聞え給ひて、こと、さしはなち給ふ。宮は大將をばは、こそとおぼつけ給ひて、いとよゆうしたてまつり給へば、をかしがりうつくしがりたてまつり給ふ。たいにのぼりおぼて殿にまろがねのすきはこ甘、かう、あや、ぢんじのみねに、らでんすりたるくしなど奉りたる。ないしのかみ、宮の御方に七つ、我が御方にも御方々にも二つ三つづ、くばりたてまつらせ給ふ。殿は人の御まだいにのたまへと、さへきことなれば、人は心こそはづ

かしけれとて給ひつ。かれらのすきばこひとつには、からあや五疋、いまひとつには、ぢん、
またんのくしあるを、たいの御方にたてまつらせ給ふとて、かんの殿、

「思ひやる心をつけのくしならばおぼつかなくはなげかざらまし」とてたてまつり給
へれば、御返り、

「そのかみにふりにしものをあらたむるこれこそつげのをぐしとは見れ。をばのおも
ひたまへらるゝ」ときこえ給へり。さまさまはこゝろにく、申しかはし給ふ。いとまのびて
さべきをりには、この御方にはたいめんし給ひて、かたみに心ふかうあはれにきこえちぎり
給ふ。大將は、院、うち、春宮、殿とおぼつかなからぬあひだに参り給ふ。又やゝもすればめさ
れ給ふ。こうちさへよに心懸、まづかなるをりなくおぼえ給ふ。宮にきこえ給ふやう、「身にお
もふ事侍りし時、かくてはべりては心のどかへにおもひなりはべりしを、いぬ宮うまれ給ひ
てのちは、いよいよのちもをしう思ふことあるまじと思ひはべりしを、よく思ひ侍りつ
れば、世の中にものおもふはこそなりぬべけれ。身にかぎりては人にまさりたる心ちこそ
ま侍りつれ」。宮「など」の給へば、「いぬ宮などをおぼへたるにこそ侍るめれ。ま
たはひきり給ひし時だにこのきんを見給ひては、いとひかまほしうまたまひき。このとしこ
ろは月日もとくすぎなむ。ものゝ心は知り給は、こゝろ懸、まづかにてさるべからむ所を
つくりて、おぼてたてまつりてならはしたてまつらむと、よるは目をさまし、ひるはこれと思
ひめぐらし侍るに、ほんいのいとまづかなるべし事のかたかへいをなむいかさまにせま

しと思ひ侍り。らいねんは七つになりたまふ。今までこれををしへたてまつらぬこと、かの
おとやはよつより、こそひき給ひけれ。御はかまの事いそぎ侍りしに、ことにもあらざ
りけり」と、なげきこえ給へば、「げに身にもおもふ事なり。さしもあらぬ人々にだにこそ
あれ。世のつねならむはいとこそかひなかるべけれ。そこにこそえまづかにものし給ふべか
めれ。かんのおとこそは」との給へば、「ひとりはなれてもえおはせじ。またくたれたてしよ
りこそならひたまふべけれ。昔の遊びは七人、山人のなかのをどり、のてよりこそすぐれ
たるきはまりし、手をはひきとり給ひけれ。なかつがひき侍るを、院のうへ、などは
よしとおはせらるれど、かんのおとこおなじ給へどもおもほえずこそはべれ。かのひき給
ふときは、こちさやういかにひき給ひけむとこそむかしこひしく思ひやられ侍れ。か
んのおといは、いかはひとゝころにおはして、まづなかつがおほえむかぎりこそはな
らはしたてまつらめ。春は、かすみほのかなる鶯の聲、花のにはひをおもひやり、夏のはじめ
ふかきよるのほとゝぎすの聲、あかつき空のけしき、はやしの中を思ひやり、秋のまぐれ、よ
るのあきらかなる月、おもひおもひの蟲のこゑ、風のおと、いろいろのみぢの枝をわかる
ゝをりのけしきをおもひ、冬のそらざだめなき雲、とり、けだもの、けしきのあしたの雪の
にはをながめ、たかき山のいたゞきをおもひやり、また、るいけのまたのみづをあはれび、
ふかき心たかきおもひも、もろもろの事を思ひわはれみ、世の中のすべてあざにありと
見ゆるもの、おぼゆるもの、また時にまたがひつゝ色おとるへひさしくなり、又むなしく

狂なりぬるものを、心にもおもひつけ、このねにひきそへむとおもひ、おなじくしてひきはればことのね思ひ思ひにしたがひてひき、よろづのをりにあははれ。あそはすやうにたいひにやばひくものならむ」ときこえ給へば、宮は「いとあはれにおろかならむころをおもひて、ひきならすへきことにはあらざりけりとはづかしくさへ給ふ。」かゝりけることいもをさてもがなとて、いとつねをだにをしへらるまじきなど、いぬ宮のをりこそきなりふべかな」との給へば、うちわらひ給ひて、「いまいとかしこうきこしめしむを、まめやかにはこのことを思ひはべるに、いとねうけ難たまはらまほしきを、いかさてもはべらむ、さるべき所を思ひめぐらし侍るに、こゝはいとさわがしくさるべき所をおもひめぐらしはべるに、こゝはいとさわがしくて、さるべきにもはべらす。かんののおのまやうごくをさるべきまにまがりてつくらせむ。このころいのかみじするを、とてみはしにやあはらむ」とて、かんののおとにまわり給へり。御ものがたりきこえ給ふ。おと、「此の君ひとり千字文ならはしたてまつり給ひしかば、やがて一日にきうかべ給ふべかりき。かじなどすんじたまふ御こゑにはまさりなめり。いとおもしろうあはれになむいとをかしう侍る事を、大宮の御事をこそなに事にもまづは思ひ侍るに、ねたくとがもおとなしうをしへなさせ給ひてけるかな。かんののおと、の心うくもわきまへ給へるかな。よくぞわ

たくしのこゑとのにき給ひける。いかゞ御事は今まで」ときこえ給へば、「いとひかまほしうものし給ふをいかゞとのみおもひ給ふる。おほやけにも院にも御けしき給はりていとま申して、よろづをすて、まづかにこもり侍りて、かたじけなくともおはしませせて、おほつかなきところどころもうけたまはらむ」となむよるひるなげき思ひ給ふる。かんののおと、「げにその御ことをなむこゝにも思ひ給ふる。いとあやしくもなりもたるを、さらばはやらおぼしたてかし。いとおそろしうも物の心よう思ひまらるさまにおはすれば、いとようひかせたてまつり給ひてむ」との給ふ。まのびやかにきこえ給ふやう、「この事おぼえ侍るなむおほく敷のこと侍る。かの宮はいとひとさわがしくふようなり。この殿もさるべきにもはべらす。さやうごくをさるべきまにまがりてつくらせむ。侍りてとなむおもひ侍る。よろづのところよりもかのとのをなむまか物せむに、ほいのごとはべるべき殿やびんなしとのたまはせむ。なかにたゞこれこそは一生の大きな大事におもひ侍れ。かんののおと、「さらなる御ことや、びんなしとありともそれにやは。たゞのたまはむにのみこそ。かしこはいとよにことなり。としころ思ふになほさ、わたりすま、おほしう思ひはべり侍る。心どこかにむかしを思ひいで、さへきたふとき事をもせさせ、おこなひもかしこにてせむとなむおもひ侍る」などの給ふに、なみだもとめがたうおち給ひぬ。大將もかなしきことや思ひいで給ふらむ。泣き給ふ。よくおほしおほせらるることなり。なかたゞも世の中といふものつねなきものなり。まづかに時々はこもり侍りて、見給はまほしきはふもんふみども、侍

り。さるべきむかしの御ための事ども、いかげでかと思ひ給ふるもおほやけにわたくしと、心々のいとまなく侍るに堪なむ。まづかなる御おこほなひ、殿の御よのあひだはせさせ給はじ。たふとまことはまかぢ思ふやう侍り。いぬ宮の思ふやうにものし給はし、さやうのをりにもなほかくてこそは御らんせめ。いかで世にあらまはしくめぐらかなる事を、御らんせさせむとなむ思ひ給ふる」なげどわはれなること、もきこえ給ふほどに、殿、さきおふこゑして「ひさしくなりぬ。なほにものせらるゝにこそあがりけれ」とてみ子いだきたてまつり給へり。宮の君「まろも」ときこえ給へば、宮をばかたにかけたてまつり給ひて、いまひとところをばたいにかきいだきておはす。わか君もおはしたり。いづれとなくさまさまにさよらにうつくしげにおはする。うつくしう見たてまつり給ふ。かんのおととも大將の御けしき、ななき給へりけるをなど例ならぬさまに見え給ふ。もし宮の御事、たいなどの人々のなかにびんなき事いふやあらむと、大將おぼすらむこと、給はづかしくての給ふ。かんの殿いとようゑみ給ひて「あなものをくるはし。さやうとくつくらむとあるにつけて、あはれなる事おもひいづるなり」。殿「それこそはおほしいでむにいとくるしけれ」とまめやかにのたまへば、「あやしくそれよりさきにもいみじうあはれなること、もはなくやは」ときこえ給へば、「そよ、それにつけてものおもはせたてまつりけむを思ふに、いとくるしうなむ。いかでむかしの世の中の事をかけじ」との給へば、「たゞいまめか様しきことのかぎりもおほえ給ふなるかな」とてかく書きつけこの給へり。

「しにしへのちやちぐさのもの思ひをいまもかなしといかゝまのばむ」と書き給ふにも、涙おち給ふを、殿もあはれにおほえ給ひて、「いと、

ちぐさには涙を露とむすびけむかゝるこのよにおもひとげなむ。おろかなる御まもりか」と書きつけてみせたてまつり給ふ。大將これをとりに給ひて、いで給ふまゝに任たたいにおはして、「ひさしくまゐらす」ときこえ給ふ。御まとねまるらせ給ひてむざりいで給へり。「げにおぼつかなきほどになり侍りにけるかな。いとうれしくの給はするに、よろづのことみななぐさまれ侍りてなむあけくらし侍る」ときこえ給ひて、「あやしきふるさとの侍りつるついでには、いまめかしき御なかにのたまへること」とてありつるもの御ふとこゆるよりひきいで、みせたてまつり給へば、いとあはれにおほえ給ひてかたはらに、

「ふる里はいづくともなくまのぶぐさまげき涙の露をこぼるゝ」とてさしいで給へば、見給ひしもげにいかにとわはれにおほえ給へば、御ふでのおろしとて、

「すみこしも見しもかなしきふる里を玉のうてなになさればなりなむ」など聞え給ひていで給ひぬ。大將は御とくもいといかめしう、大將につきたてまつりては、この殿を天の下世の人もかしこうたのみたてまつりまゐりつどひ、何事もものの給へなど思ひ給へり。一の宮はいぬ宮とひゝなわをびし給ふ。御かたち日々ひかりまざるやうにおはす。いみじきはらたちおそろしきもの、心ばへ給へるにも見たてまつらば、よろづの事わすれてあまれぬべし。わて宮もいまのほどかくばかり侍にて、給おはせざりけむと思ひならぶべきまなら

す見え給ふ。御乳母五人、宮の君、源氏の君どもおぼんちぬしめのとこ六人、おなじほどにてたけ五尺なるものをゆひこめにさせ給ひて、御あそびの^{御いぐ}にてさぶら^御はせ給ふ。これよりほかの人々には見せたてまつり給はず^御。おぼろおと^御ゆかしがりきこえ給へど、さらに見せたてまつり給はず。おぼろけもかのよみさし給ふ文さかまほしう^御給へど、とかうのがれ申し給ひて、おぼろげならで参りにく^御、^御給ふ。京極におはして静かにめぐらしありき給ふに、世の中にありとあるきは^御なみぢかすをつくしてあり。もろこしにもありける物のみをかしく花もみぢ、めづらかにする本草どものたねをさへう^御おき給へりけるも、山なかとところどころにいとおもしろく、何とも人まらぬおひたり。ひとと^御せはいたくおほよそにこそおもしろしと見え^御給ひしか。のどかにいま見給ふにかゝる所なし。年へたる岩のいろいろのこけおひやうもいとをかしう、めづらかなるをたておかれたりける。更にとりうごかしなほすべきにもあらざりけりと見給ふ。治部卿はうつほのまきに見えたり^{治部卿下十}。そののちに大辨しげの、わらはみこのむこなりしかば、この家もとな^御たかき宮とて、いまの世のおもしろきところにはいひすぐれたるなり。この三月十日はどろつくるべきよしを、すりのかみ宮の御めのとの^御はらからなるに^御おほせ給ふ、「北のたい、西ひんがしのたいごと^御に^御うるはしくよかりけり。四めんにかきのくにしろきかべぬらすべかんめり。この西のたいの南のはしにひつじさるの方かけて、むかしはかありけるあとのまゝに念ず堂たてたり。南の山のはなの木どもの中に、ふたつのろうたけよきほどにうち、たか^御らぬほど

にたちまちにつくるべし。西ひんがしにならびて、ろうのふたつのなかはいとたかきそりはしをして、北南にはかうしかくべし。それにわれはゐたまはむとす。これつくらむになべてのたくみはよせ^御じ。すりづかさのなかに^御すぐれたらむもの二十人をえりてかたわき^御て心ごとにつくらすべきなり」とてえらみ^御めしてつくるべきやうおほせ^御給ふ。「ひんがしのたいの南のはしにはひろき池のながれいたり。そのうへにつりどのたてられたり。そのみづさますはまのやうにて、ごせんのみなみにはなかじまあり。それにろうはたつべきなり。ごせんのたけのたかきを^御をよよりは南なる^御きし^御まげれば、すきてはつかに見ゆべし。西ひんがしのそばよりは見えたらむは柳の木どものなかより、こたかくおもしろからむ事かぎりなからむ」など人々けうじ申す。ろうのかうらんなどおらはなるうちつくりなどに、かのわけ給ひし、みくらにおかれたりける蘇枋、またんをもちてつくりせ給ふ。をろかねにはまろがねこがね^御にぬかりかへし、をす、れんじすべき所には、まろく、あをく、きなる木のぢんをもちて、いろいろにつくらせ給ふを^御さるべきところ^御には、まろがねこがねすりやりたるまつかとさして、大将おはし給ひて御らんじてつくりせ給ふなかに、すぐれたる上手いと見かはしてありがたうめでたうつくる。この事を、内、院にもきかせ給ひて、殿ばらき、たまうて、めづらかにをかしきことなりとて、すしの中納言、ゆきまさの中將、これかれいさあひ給ひて、いかで見む、あやしうたえずめづらかなることいできるところにてこそ^御あめ^御れ。さだめてあるやうあべからむとゆかしがり給ふ。ふぢつほのかたのを

んわらの君のはらから信の四の君、いぬ宮の御かたに、宮の君と言ふものまうでにいさあひ
 て、「どのいぬ宮にきんをしへたてまつり給ふべきこと、なげき給ひしありさま、ほのかに
 きしは、せうせうのきんのねきかむよりもめでたかりしものかな。今までをしへたてまつ
 らせ給はぬこと、てぞなげかせ給ふや」などかたりけるをきこえければ、うへわたらせ給へ
 り。「一の宮なほことを思すらむ。このつくりのしるるうは、いみじうおもしるき事ある
 べかなり。ないしのかみもるともに迎へて、いぬ宮にきんをしへむを一の宮き、給はむによ
 りにさることとはまたあらじを、としごろきかまほしう玄給へど、こゝにきかせずなりにき。を
 しむ手を、かのをりにこそはのこりなくき、給はめ給はうらやましうこそわれ。よろづの事
 よりはおもしろき事をわけくれき、てあらむことよりほかのことあらじ」とのたまふ御け
 しきむづかしければ、うへにいみじうありがたき事ならむかしとおほせど、もの
 の給はでいぬ宮にのこつたへらむは、春宮のみよにさりとともあくまでき、給ひてむ。
 ことぎまにはたあらじ。心のどかにも思ふこそよけれ。この大將のことにつきてこそたび
 たびけしきあしうくるしけれ。いたうはらち給はぬさきにとてわたらせ給ひぬ。かくてろ
 うにのぼり給ふべきほどのくれはしは、いろいろのきをませませにつくりて、またよりなが
 る、水はすしく見ゆべくつくる。ろうのてん上にはかみかたくものかたをおりたるこ
 まにしきをはりたり。板敷にも錦をはらせさせ給ふ。わがおましどころにはたからあや
 のうすらかなるを、天上にもはりたるいいたにもまかけ給ふ。西のろうにはかんのおとりの

七八〇

おはしどころ、ひんがしのろうにはいぬ宮のおはしどころなり。はまゆかをのみぞいぬ宮の
 御れうはさ、おやかにはせさせ給へる。その濱ゆかにはまたん、せんか、う、びやくたん、すは
 らうをさしてらしてんすりたまいれたり。三尺のびやうぶ四てう、からあやにもろ伏しけの
 人の繪書きたりけるを、こゝにて大將のはらせ給ひて、ひとよろひづ、ふたつのろうのはま
 ゆかのうしろにたてたり。ろうの天上に三尺のからかみを、かんのおとりのをみ、二階にもこ
 れにもかけ給へり。いといみじうかのにははひは世にかうばしきよりも、このまつらひこまか
 なるありままつくりはてたる。てりか、やきめづらかなるをた見つ、いも、ところのもの
 ともまたかゝることあらじといひ、おもふ、大將はまばしにても、おもふやうにてめづらか
 なるさまはて、かんのおとりをわたしたてまつりてみてまつるべきも、いぬ宮の君の玄給
 ふといと、うつくしう、すゝろにてはいかで見ましと思ひたてまつり給ひて、この事をき、
 つ、人々ふかき心を知らぬは、いかなる事し給ふべき、おもふなりとゆ、しがり給はぬなし。
 二二丁をへてゆく人々、この樓のにしきあやのこはくのとしつき、さまさまのかうども
 のかにまみたる風ふくたびごとにかうばしきを、おめであやしむ。大將、院にまわり給へるに
 「よるまことろめづらかなるさまにろうなどつくるべかなるはいかなることあるぞ。をのこ
 どもいとをかしなど、こそいふめれ」との給はすれば、「なんでも侍らず。いぬ宮のま
 づかなる所にはべれば、かしてきてきんならひたまふべき、おもふなり。ないしのかみ今はやう
 やう身あつしく侍るに、このてつたへと、いも事いまはたれにかはと、おはべるを、むかしの

七八一

やうにもはへらぎめれば、なかつたおほやけにいとま賜はりて心まづかにてものし侍らむ」
とそうし給へば、いと御御けしきよろしくて、「げにさるべきことなり。それこそは御いとび
なきことにはあなれ。すまひにいとほかきき、て、えまたさかすなりにしこそいとくちを
しけれ。はじめにはうたて心あわたしきやうならむ。かならずかの末つかたにいきてきか
む。おほひのやうにをしへられたらむよろこびもいまはかくなりたりとも、さりとともこ
にこそおぼはせめ。いとうれしく一の宮の御許に、このての御許とまるこそはいなかる御心ち
すれ。さていとまは心まづかにて見ゆるされがたくやものせられむ。いかに」との給はず。大
將の御事の事をなむ。たゞ御けしきになむはべる。かたかおぼるべうこそとまこそはあべか
めれとおほせらるゝかの文の、のこりゆかしく思ふやう」など仰せられてまかで給ふに、さ
がの院のくら人御つかひにて御くるまのものとよりて、「とのに参りてはべりつれど、院に
なむおはしますと侍りつれば、かならずまゐり給ふべき」とまことゆれば、やがてまゐり給
ふ。そのかたにおはしませしけり。「月ごろまちかねてなむ。さるはいとうれしきよろこびも
かでかくておほふや。その事は一條に心ぐるしうても、せられし宮のあそびたまへおぼる
さまにてなむあるともものし給ひしかば、その事御もとにいひもよほされたるに御なむ。こと
にふれていとあはれにうれし」といひ給へれば、「ゆくする今はいとみじかきにいとうれし
くなむ。かくちとおそろしげにて人にとはるゝよにませし御のいからにたゞ、おぼむことも
なと、いまひとたびとたびと御のみぞおほひらづる。あはれに心ほそまなぐさめにとおほふ

かなし。まことにある人のいふ、ふるさくとおらためつくられて、るうなど「頼めづらかなる
さまはつくりて、いとおもしろきことあるべしとのみきくを、などかいはと心うくむげに思
ひすてられ給へらむ御院のみゆきも、行幸などおらむにはたいこもたいめのかたに、人々
にはさやうのついでにだにいかにとなむ思ふ。大將」思ひかしてまりてうけたまはりぬ。ま
ばまばも侍らひぬべきを、おほやけわたくしとて御さくらぬこといもを、あけくらしいとま
まらはずしてなむ。宮の御事はなにがしがとり申しつることにもはべりず。ことにふれて
かたむけなくいかにかしこまり給ふることをなむとなむ御。いよいよみたて御まつるを
思ふことものせむ」との給はせて、「かのところなむゆかしとおぼゆるやうは、むかしのまげ
の、わらふる朝臣の朝臣のなむはうはわがをばにいまをかりし宮なり。としかげのあそんの
の源氏は、みやすどころばらの又いもうとなりしかば、我がまだみこなりし時、かのをば
宮のすみ給ひし時、いとおもしろかりし所なりしかば、春秋ふみつくりにものして見しに、
今ほのかにおもひらづるにいと御あはれにゆかしき所御になむあるを、いかなるわざをせ
らるべきぞ。さるべきこととあらばこの事の事おぼえてまじらまほしくなむ御ある」と仰せ
らるゝを、「つねにいにしへのこと思ふにもきくにも、あはれにのみものを御おぼえ給ふに、
おぼつかなかりつる事」とおぼえきらかにの給はず。「なにおもしろうかたむけなうおぼえ給ひ
て、あなかしこ。御念佛をもなどかは、かならず参り侍りて、むかしかたはとしふかくまは
り侍らで思ひ給へは、かりしを、今は心よくなし事のこのをりにも、仰せごとのまゝにこ

そそむかすは侍らむとおもひ給ふる時、心はなかつたこそはへだてあらためられめと思ひ給ふる。うちにないしのかみ「いかでいまはおぼ、はいありておぼかのところにいははありはべらむついでに、一の宮のわか君の今はおよすけて、きんひかまほしう志給ふに、をしへさせはべらむとてなむ。おほかたにてはまづかならず侍れば、すこしはなれてたかきさまなるものたてさせ侍るを、まかことごとしく人のそうするにやはべらむ」。院おほきにおどろきけうせさせ給ひて「きやうかうよりほそれこそ天下におもしろき事はあなれ。すさくぬんはうちにもすまひのをりもき、給ひけり。としかげのあそんのもろこしよりのぼりて、きんをたてまつりしに、そのね例のことに似ず、ひさきよくおどろおどろしかりしかばひきとめてとものせしにもきかず。きかまほしかりしかたどもきかせず。かゝることなる事をこのみしあひだに、文のみちをばさる方にて、この方の志にせむ。女君侍たちにもをしへたてまつらむとたびたびいはせしにもきかた、かのないしのかみをち、は、の悲しかる人にてはかぎりなくいたはしう、またなきものにおもひときて心もわりしかば、女かたよりもたびたびものすることわりしにも、いと心づようこゝろふかゝりし人にておほやけをうらみ、世の中をまらでなむ身をも心づからまづめてし。そのをりの大じんどもの、この國のための縁かぎりなきめいぼくをひろめむと言ひいだしたてし事を、こゝにはをしみ思ひしかひなく、我一人にうらみをとめられにしになむ、いまにあかすおほはれに思ふ。このみよにだにかのかんじを、いまはかくのこりなき身にゆるされなばおぼ、いかにうれしからむとなむものしつる

と、かならずつたへられよ。それをきかむ。そ縁のこゑをあくまでひきてきかせ給はゞこそはげにと心やすくおほえめ」。大將「むかしのこととはくはしうもえまづり給はおぼ。おほせごとはいかにものしはべらむ。今ははれはれしうなりてはべれども、そのうちにもまゐりていとよくきこしめさせはべりなむ」。院うちにもまゐりていとおぼきこしめさせはべりなむ。院うちまませ給ひて「いな、それはえあるまじきことなり。おほやけわたくしとなくならはれたれば、かのちごにをしへはてられむすゑつかたなむいときかまほしき」などさまさまに、いにしへのおはれなることもいさゝかほけはせしからずおほせらる。おほしまさむことのがれあるべきならずのたまはず。院うちまづらひておほします。年たかうならせたまへるやうならず。いとさよらにめでたし。月十五日には僧あまためして御念佛、殿上人、かんとちめあまたしてそれにたへたる人しておぼはさうかうせしめ給ふ。院うちぎしきいとなし。かくてまかで給ひぬ。いぬ宮の御方には同じもやのしに、げにちひさき几帳たて、まづらひ給へり。ちひさき人々さゝやかなるそばにごうちゐたり。御おぼ花てのあやのひとへくろきよりさしいで給へる、いとうつくしげにおはす。ちご宮、兵衛おぼどのいぬ宮といかいうち給へるとて見給へば、はぢ給ひてうち給はず。これらにつけてはまれば「いとふかひなき御とも人かな。もきたるおしおとにはあらずや」との給へば、おとなどもげにおぼとてわらふ。大將はいぬ宮にまこと給ふ、「ひかまほしく志給ふきんならひたておぼまつらむ」との給ふより、いとうれしとおぼしてまみ給へる、いとほなやかにみまほしうあいきやうとほ

るばかりにておはするを、いとつつくしとみたてまつり給ふ。きんならばせ給ふ。「は、宮に
 はまかせたてまつらでなむならひ給ふべき。いとおもしろうをかしきところにてたてま
 つりて、がんのおとよはおはしなむや」とのたまへば「さりとも宮おはせではいかでか」
 とのたまへば、「いとくちをしく、さてはふよう人にはなかり人にきかせてなかつたかんの
 おどいなむ人にをしへはべる。まばしねんじ給ひておはしませ。さてよくひきとり給ひて
 ひほどに、宮はおはしなむ」ときこえ給へば、「さらばよかりなむ」とて、「宮にはかくし
 給ふぞ。みな人のきくにもひき給ふは、このはべることをなむさはひき給ふ。これはことな
 り、人にきかせつれば聲もせず、みならず侍る。宮も二の宮もおはせしところなり。いと
 おもしろくなむ侍る」ときこえ給へば「さてちや侍は」とのたまふは、なかにおぼす御めのと
 りけり。それはちかうさぶらひなむ。さう宮うちやましとのたまはむな。されどこゑきかぬ
 ほどにこそは侍りて御ちほしうおはしませむほどは、ふとおはしませせてむ。さてなほひさ
 しくや宮は見たてまつらざらむする。なごてかたは、まばしなり」ときこえ給ふにも、いと
 おはれにまつはしたてまつり給へるに、ちごにおはするはこしらへてもおはしなむ。宮い
 におぼしの給はすらむといとほしけれど、さるべき事ならねばとおぼす。「とせんにめのと
 たちさぶらひ給ふや。いづらや、このこまくらと、侍のおとしつる。人々もまゐれ」とおほし
 ぬ。くれ給がたになりけり。「すざく院にひさしくさぶらはまかであつるまゝに、さかの
 院にめしありつれば参りて今まで侍りつるを、いとおそろしう御としのほどよりは、さかし

うものやおほせらるゝ君にこそおはしませ。この院の御まへにさぶらふはおそろしう、よろ
 づにの給ふことのらうらうしくわいぎやうづき、いかなるさまをかかたつ御らんじつけられ
 むとこそ思ひはれ。まことやこのろうつくらせ侍る事を、いまよりはいとことごとしうき
 こしめしつゝ、たづねとはせ給ふに、くるしくなむみゆきあるべくおほせられつる。はいな
 くさわがしくやあらむ。はてかたになどは、おもしろきことならむかし」などきこえ給ふ
 どは、すゞしの中納言おはして、「ひさしくたいめんのはべらねばまゐりきたる。さかのいま
 りでまかではべりつるなり」ときこえ給へば「あなくるし。などことならむ、院のことをけ
 うせさせ給へばさ給へり」なりたごのたまひて、「そのことのためにはやあらむ」とて、「それ
 だにこそ参り侍らめと思ひ給へ。たゞいまかく侍り」とてなほしきかへ給ひて、西のたい
 と、わた殿みなみのまにてたいめんま給へり。「ひとところにてはおぼつかなからず、うけた
 まはりなむとこそは、おもひ給へしを、はいもみなたがひにけり。いにしへ契りきこえ侍り
 じ侍事どもは、みなぞおぼしめされたりけり。はるかなるほどにすみ侍りしをりにも、とり
 わきていかでたいめんもがなと思ひ給へしに、たまたまたいめんのありがたくて侍りしか
 ば、さはまりなくこそうれしく思ひ給ひてしかば、いつしかも一所にておもふやうにて、
 聞えうけたまはりて、心やすきあそびをもとこそ思ひ給へしか」などきこえ給ひて、「まづは
 ひみじき大事のことをおぼすなるこそすゞしにはかくし給ふを思ひ給へ侍れば、いか
 らしと思ひきこえぬ」。大将「いとわやしく、げにひとところによくもわらず、おほひの

ほかのすまひにてさぶらはせたまふ。心なぐさめには、げにおけくれきこえさせうけたまはらむを、なぐさめにせむとなむかねて思ひ給うてしを、なにのいふらむやうに心まづかにもはべらずなむ。むかしの心ばへたにおぼすらむ心のやうに、いまはいますこしむつましようなむおもひきこえさする」。中納言「いでや、かのさやうごく殿を世の中ゆすりてめづらかなるさまに、ろうなどつくらせ給ふとうけたまはるを、うとき人々にさだめてあるやうあらむとものし侍り、ゆきまさの左兵衛、中將たちなどものせられしと侍りしもまゐるく、になくおもしるき事はべりおぼるを、なかむかしの御こゝろばへのなごりあらば、けしきばかりもきかせ給はざらむ」とてうらみきこえ給へば、大將、

「きのくにの吹きあげの勢はまのはまへにて契りしかひはなきさなるかは」。中納言「いでや、

吹きあげのはまへのちぎりなごりなくかひあることは見せじとぞきく。御ものかくおのしなほあらしの御ことはなどは、きんなどのねよりすぐれてこそおはすれ。よろづの事はいかにかくしもみならし給ひけむ」とわらひ給へば、大將もいと心よくうちわらひ給ひて、「なにごとをかは、かくしきこゆるはむとおぼえすなりてはべるなごり、京ごくはまか御みゝとまるべくも侍らぬものを、たかきものおもしるくは、すぎくもん、はたはこなどを、いかにたえず見る人はべらまし。まづかなるところなれ。時々もまかりうつりて、心やすやすと思ひ給ふるなり」などきこえ給ふほどに、いり日のいとわかきし入りたるに、いぬ宮玄

ろいうすもの、ほそながに、ふたあゐのこうちきをたまふと行て、たけは三尺の几帳にたらぬほどなり、御ぐしはいとをよりかけたるやうにてほそはきにはづれたり。あふぎのちひさきさげ給ひて、ちご、おとなども三四人そひておれところまじく、元にはとてすのものになに心なくたち給へるに、風のすを吹きあげたる、たてたる几帳のそばより、かたはらがほのすきて見えたまへるや、顔うたい、顔いとほなやかにうつくしげに、あなめでたのものやと見え給ふを、えねんじ給はでるみて見やり給ふに、大將あやしとみおこせ給ふ。あらはなれば「いとふびんなりや」とてたち給へば、「何のふびんなるぞ。わかき時はうち侍はつてはかかに人に見え給へるこそ美しくしけれ。世の中にのしり給ふ人も、むげに見ぬは心ちむづかしき時は、いでや、いかありけむと見ゆるものなり。いみじう世にも思ひて、いできぬべきよなめり」とて、あかずうつくしくおぼえ給ふ。またこそ侍見え給ふとて、いり給ひて御めのとたちに「いとあさましうまかかなむありつる。いみじきわざなり。ちかうあらぬわざいとあし」とのたまへば、「てふのみすのもとにとび侍りつるを、このをさなき人々のわれもとらむわれもとらむとさわざはべりつるを御覽じつるならむ」と申せば、「いとこのおとなどもいはけなしや」とていで給ひぬ。かた思ひはとこそいひ侍るなれ。くちをしきわざ」との給へば、「まめやかにいとみじううつくしうおはしつるさまかな。なにをおぼすらむ。かしこにおはするちは、この御おなじほどぞかし。いとみにくものし給ふに、思ひわづらひはべりぬるものを」などのたまふけしきをかしげなるべし。ないしのすけまかきこゆめ

りきとて、ゆかしういかならむとおぼえ給ふべし。中納言、院にのたまへる、「わが君わが君、かの御手のかぎりをつくしてをしへ給へむらむはざることはありなむや。人にげになべてきかせ給はじ。たゞかた時のほど、いとまゝ侍らまほしきを、かならずきかせ給へ」とねんごろにきこえ給へば、「わが御ぼとけ、かくしきこえさせず。いとおもしるき事はあるべきことにも御ぼとけはべらす。ふたぬん上もあやしうきこしめしておほせられつる。この侍りどころはいとさわがしう、宮たちもあわたしうおはしまして人まげれば、たゞいぬ宮ひとりをかしてにわたして、なかつがをしへたてまつるべきなり。ないしのかみも身もはづかつたしうも御ぼとけのし給ふうちに、あわたしき人のあつかひなどせられて聞ゆ。うへ御ぼとけも、心まづかにもものし給はじ、大宮もいとおほけなくおはすれば、はかばかしくえや御ぼとけはならひ給はざらむ。今はむかしのやうにきかまほしきさまもえひきなされずや。さてもいつかわたり給ふべき。すまひの事、くにくにさわがしき事ありて、ことしはあるまじとかき侍りつる。もしさわらばたゞむつきのあひだにやとなむ思ふたまふる。ちかく侍るは、さはかならずかならず」ときこえ給ひてわたり給ひぬ。「中納言のかたにいとうつくしきものをも見はべるかな、大將のみかたにまうでたりつるに、いぬ宮まかまかなむ。天下のあてみんやさらにいまのほどよりはかくものしたまはざりけむ、すべてかく御ぼとけばかりのかたたちはこの世にまたもあわらじとなむ見えたる。いとをかしかりける君かな。あさましくいまは御ぼとけ見せ給はぬこそいか物し給ふ」。いでさらにめでたう聞えむかたもなしや。おとなの世にはよういなどしてもて

なしすれば、すこしのことあり。これはいと美しくこそをかしかれ。かみのさまなどまだいとをさなげなるかほの、けだかくうつくしげなるに、かみのつやつやとよりかけたるやうにてかゝりたり。たゞちごにかつらをうちかけたるやうにて、なにごゝろもなく、てふにやありつらむ、ものゝと御ぼとけつるを、あふぎさゞげてうちあふぎ給へるこそ、それにはづかしうなまめかしき顔かたも御ぼとけのし給へる。かたはらより見るだにあり、むかひむてあらむは」。大將いととらみつけていみじと思ひて「めのとをいひつるにやあらむ。ことしはきんならばさむとてないしのかみもろともに京極にうつるべきなめり。このひめ君、かたはいとこよなうはおとり給はじを、なにごゝろに御ぼとけもすぐれたる上手の御ぼとけのちにて、今より何ごとも世の中をひかすこそいとねたけれ。ちひさきこともものいとほしげなるを、おとなにつくりてぞありける。よろづことあやしく、めづらかにものし給ふ人にこそあはれ、女ごもいかに見るかひありとおほすらむ」などの給ふ。大將、宮に「中納言のこの京ごくの事にてものし給へるに侍り。かく上下かねてよりことごとく公わたくしともものし給ふを、思ふやうにひき傳へ給はずばいかに口をしからむ。生れ給ひし時よりだにいかならむと安からず人々はものし給ひしを、殊なることなくば公ごともものせず侍らむとて、院にいとま申し侍りしを、こむ月よりとなむ思ひ侍る。いぬ宮はいとよくはなれ奉り給ひてあらむとのたまふをさへへはみにおはしませば、院宮たちまたたれもさわがしう侍らむにはいなるべし。おはしませせてたいひとところをなむわたし奉りたるとて、かどもわけはべらじ」とてす

きこえ給へば、「いくひさしさかは」との給へば、「いかでかは、いとくはみにならはせ給は
 じ。もの、心くはしく見させ給ひてこそ。ないしのかみよつよりみとせこそことあそびせ
 られでならひ給ひけれ。七つ時になり給ふは、いとよく、さりともいとくひき給ひてむ。
 いままで縁ならひ給はぬ、いと心もとなきことなり。院、内のおほん文などのことより、いた
 づらに年月をすぎ給はるに、世の中もいくばくは、かなきものかな。ひと、せばかり
 となむ思ひ侍る。ないしのかみ「心ほそくわつしくものし給ふこの御、これをおぼつ
 かなからずならひ給はむこそよからめ」。宮「いかでいとさまでこひしくみてはあらむ。時々
 はわたりてこそは見め」との言給へば、ななたは「おぼつかなか、よるなどは参り
 きなむ。それを御らんせばなぐさませ給ひてむ」などきこえ給へば、「それはやがて見すと
 ありなむ。いぬ宮のこと」といとまめやかにの給へば、「いとまがまがしきことのためはす。
 かくの給はせばさらに三三ぬんもわたしたてまつらじ。いと心うくたはぶれにく、か、
 ることはおほせらるべしやは」とて多ききこえ給へば、「これこそまがまがしかめれ。ことひ
 く人はおもふ人に見ずなれてやならぬ。まづかなるところはさもありなむ。一ぬんばかりは
 とわれば、いとあさましくをさなければ、何ぞ、ろなくて、いつともあらではなれてあらむ
 と、ものしげにこそあらむなれ。まばし人々のものせらる、時、あなたにあるをだに心もと
 なかりまつは、すものを、わびしともこそおもへ。いかなるべき事にかあらむ」といと心ぐる
 しげにのたまへば、大將「ことわりなれどなに、事も心にいられてならひうつすにのみこそ人

よりことにはべれ。をさなくおはせむも心ぐるしとてやは思ふやうはるものを、さらばき
 こえさせじ。ともかくも御心なり。こゝにはをしへたてまつらじ」とまめやかにきこえ給へ
 ば、さてあべい事ならぬは、宮もこのことを心ことにいかでか、とおほすことなれば、さら
 ばねんじてこそあらめ、いとまのびてあからさまになどはなとかものせざらむ。なほこゝに
 はきかせじとなめり。かんのおと、「いかでか心まづかにきかむとつねにもものすることはあ
 らずや。そのほどだにさらすばいつ」とのたまへば、「いかは、はさこそは。それもす多つかた
 になむまのびてもわたらせたまはむを、この人々き、つけ給は、や。むづかしう人々のもの
 し給はむにこそ、おまへをだにとてすこしは、べらむとなり」ときこえ給ひて、いまぞ思ふ
 やうなる心ちし給ふ、宮ひさしう見たてまつらざらむをとてあけぬれば、くる、までいぬ宮
 ひ、なわそび給ふ。「はかにては戀しく思ひ給へじや」とのたまへば、「いかは、はことこのひ
 かまほしければ、ねんじてやおはせむする。みそかには、おはせよ。このひ、なにもや
 きかせじとする」との給へば、いとわはれにをかしうおほえ給ひて、「なごてかゝるおはせ。
 大將を、ささくとぞきこゆる。ひ、なわそびは時々を、さんてたまへ。さんを心にいれ給へ」
 とて、「いとおもしらくひかむとおほせ」などきこえ給ふに、ひさしくみたてまつり給はざら
 むことの、いみじうこひしくおほえ給ふべきを、うちまも、りてたてまつり給ふに、涙のこぼ
 れぬべければ、いまずこしもえきこえたまはず。くるしとおほすまじきことをかたらひたま
 ふ。大將、わたり給ふべき人々のまやうぞく宮のも、ないしのかんの殿にもわかたせ給ふ。御

わたりのれうとて、人々にもたてまつりたり。ないしのかんの殿にきぬ百疋、あや廿疋、おり
 せさせ給ふに、宮のみなわり。あやおなじかず、なりおなじ。ひめ宮もわたり給ひて、三日す
 ぐしてかへり給へし。おとなかんの殿に三十人、わらは四人、宮の御方もおなじかずなり。女
 御殿の御ぞ、これはかずまさりたると言ふべきなり。宮の御方の御おとなはみなかへり参
 るべければ、このかずへのうちにはいらず。かたちどもすぐれてめでたし。かんの殿の御方
 にすこしねびたるがまじりたるしも、なほ人にすぐれて、もてなしありさま心にく、めでた
 し。この御かたの宮はじめの時にと、のへられたりし。なほ心ありさまめやすくよしと、女
 御殿の御かたに見たまふ人をばこ、に給へなともなれば、いとびなしと見えたり。八月十
 三日なり。大將かねてよりも心ことにてわたしたてまつらむとおぼしければ、ないしのかみ
 の御くるまわたらしくてうせさせ給へり。かんの殿のはこむらさきのいとげにからとりて
 ささせたまはせ給へり。宮の御御はふたあむにくもだすき秋の野のかたをかきつ、
 さ、むらとりのかたをいろいろにぬはせ給へり。いとなまめかしうさまさまにをかしう、
 ちりがひにも、唐草のかたをぬはせ給へり。またすだれもかうのちに、うすものかさねて、こ
 とり、てふなどをぬひたり。右の大殿ももろともにおはして三日すぐりしてかへり給へし。右
 大將殿も、ごせんいかめしうと、のへ給へり。左の大殿の御かたにも人々のかたちよきをお
 ほせられ、院よりも、四位、五位、六位かたちよく、年わかきうちのくら人へたるもえらびて、

かの一條京極なるところにわたり給ふなるに、つかうまつるべきよしおほせ給へれば、われ
 もわれもとかものまつりはさるべきかぎりこそあれ。これはひだり御みぎの大殿、院との
 へさせ給ふに、世の中にも、おぼえある、人々このうちにまゐらざらむはしみ
 じきはぢなりと申す。さうぞくをと、のへまどひたり。うまくらよりは始めてひききていそ
 ぎたり。大將「かんの殿のごせんどもは、わかやかなるをみなへし色のまたがさねをきよ」と
 のたまふ。宮の御方は「うすきふたあむをきよ」との給ふ。女ばう車どもかんの殿の上らう
 三車は、くれなるのうちあはせにはじのおり物、つぎつぎのは、くちば、かうかさねいろのす
 りのおほらうみのもなり。宮の御方は、上らう四くるまあるに、はじせん緑色のうちき、あ
 かいろにふたあむのからぎぬ、つぎつぎのはふたあむ、をみなへしいろなどのをきて、あを
 りすみすりの舞みつのもなり。わらはもおなじくきせたり。なつこのれらのうへのはかまき
 たり。このは、大將殿の御方、なかのおと、人々参りあつまれり。とりの時なり。院より。と
 のうち、宮たち、殿ばらいたしくるまき給ふ。あつまれり。大將殿はいでぬ給へり。院よ
 り人々参り、またいで給はむ見たてまつりてと、おほせられつるとて、左のうまのかみ源の
 むねよしさぶらふ。やがて宮の御方の女ばうくるまのまだいたて、よすべき事おこなふ。
 おなじ時に、かんの殿もいで給ひて、くるまのまだい定めにくければ、おほちをわかれて
 いら給はむも、西のみかどよりないしのかんの殿、ひんがしのみかどより、宮の御くるま
 いるべきなりとそ、ごせんのかんの宮の御かたに、院より四位の殿上人十人、五位二十人、かた